
リリカルなのは 最弱でヘタレなオリ主

Jack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 最弱でヘタレなオリ主

【Nコード】

N0112M

【作者名】

Jack

【あらすじ】

オリ主ものです。

チート能力ありますが、初めからは使えません。
だんだん使えるようにしていく予定です。

第1巻 1ページ 扉 (前書き)

処女作です。

拙い文章ですが頑張ります。

第1巻 1ページ 扉

「はあ．．．疲れたあ」

六畳一間の部屋にスーツを着崩した男は、上着とネクタイを取りながら溜息をついた。

「なんか食べるものあつたっけ？」

そう言つて冷蔵庫を開けるが中にあるのは、食べかけのヨーグルトとキムチだけ

（このキムチいつのだったけ？）

そう考えながらにおいを嗅ぐと．．．

「酸っぱ！！！！」

明らかにキムチの匂いを超えたすっぱい匂いが男の鼻をつき、つい叫んでしまった。

ドン、ドン

そういつた瞬間、隣の大学生が壁を叩いた。

「はあ．．．毎週のようにどんちゃん騒ぎするクセに俺がちょっと大きい音出したらすぐこれだよ」

「なんもないし、しょうがない何か買ってくるか．．．」

さつきから何度目かの溜息をつきながら近くのコンビニで夕飯を買いに向かった。

in コンビニ

ありがとうございますー

適当にコンビニで弁当とおにぎり、そしてタバコを買って外に出ると、早速買ったばかりのタバコに火をつけた

「ふう．．．」

一息入れながらボーっとしていると声を掛けられた

「すみません。」

目の前には、白髪に灰色の帽子をかぶり、これまた同じ灰色のスーツを着た、いかにも老紳士といったおじいさんがいた。

老紳士「火を貸してはもらえませんか？」

男「ああ、どうぞ」

そいつって愛用のzipproライターで老紳士のタバコに火をつけ

てあげた

老紳士「ふう．．．どうもありがとうございます。」

ぺこりと老紳士にお辞儀されライターを胸ポケットにしまつと
硬いものが当たった。

男「ん？」

一枚の名刺が入っていた。
ただそこには、名前や肩書きが書かれていたわけではなく、古い鍵の
絵が書かれていた。

ふと、顔をあげるとそこには、先程の老紳士はいなかった。

（あれ？さっきのじいさんもうどこかいったのか）

まあいいやと思ってタバコと鍵の絵を灰皿に捨て男の家に向かった

in 男のアパート

弁当とおにぎりを食べ終わつた男はベットで横になりながら見てい
たテレビで、
節約をして貯金とか、増税とか、会社の倒産のニュースとかろくな
番組がやってなかった

「結局金と才能のあるやつがいいおもいするんだよね」

愚痴にもならない愚痴をこぼしつつ
ついうとうと寝てしまった。

in 夢の中

男「やべ〜、テレビつけたまま寝ちゃったよ〜」

??「うたたねは気持ちの良いものですからなあ」

後ろから声がしたので振り返ると先程コンビニであつた老紳士がいた

6

男「え?え?なんで、さっきのじいさんがいんの?これ夢じゃねーの?」

老紳士「これこれ、落ち着きなさいな」

男「あ、ああ、すいません、ってか夢ならじいさんは一体何者なん?」

老紳士「これはこれは、失礼、私はキーメイカー、じいさんでかまいませんよ」

男「俺は・・・あれ、俺の名前なんだっけ・・・」

混乱のせい、疲れすぎたせい、はたまた夢の中だから男は自分の名前が出てこなかった

キーメイカー「名前を忘れたんじゃない、名前がないのですよ。

この世界では、名前などなんの意味も持たないですよ。」

男「よく分からないけど、どうせ夢だし、なんでもいいよ」

そう聞いた瞬間、待ってましたとばかりにキーメイカーは満面の笑みを浮かべながらこうきりだした。

キーメイカー「夢ではないんですよ。」

(コツ)

持っていた杖で足元を軽く叩くと、

さっきまで、白だか灰色だかよく分からない空間だったが、狭い通路の両サイドに扉が沢山ある空間に切り替わった。

丁度アパートの入口のように、等間隔で同じ扉がずうと続き、それが通路の両側にあようなイメージの空間だ。

男「うおお、なんだここ!!」

キーメイカー「さあ鍵を出して下さい。」

そう聞いた直後、男は自分の胸ポケットを触っていた。

男「あれ？さっき捨てたはずじゃ・・・」

見ると古い鍵が胸ポケットの中にあつた。

キーメイカー「この扉は色々な世界に継っています。似たような世界など無限にあります。その鍵で好きな扉を開けて下さい。」

男「世界だとかとんでもないスケールの夢だなくどうせだつたら魔法が使いたいから世界のある世界に行きたいんだけど」

キーメイカー「鍵が選んだところがあなたにとって一番の世界です。」

じゃあと適当に選んだ扉に手をかけて、ふとキーメイカーに向きかえって

「よくある転生みたいになんか能力とかもらえるんのおおおお
おおお・・・」

男は扉に吸い込まれるように消えていった。

「鍵の声に耳を傾けることができればあとは、なんともなるんですよ。」

そう言つてキーメイカーは帽子をちゃんと摘み上げ
コッ、コッ、と音をさせながら次第に消えていった。

「ばあああああああああああああ！！！！」

人間、極限のパニックになってしまつと何も考えられず、
体を丸めて防御体制をとり、叫ぶことしかできなくなってしまうの
である。

「君、大丈夫か？」

（それは、綺麗な澄み渡る青空のような声だった。）

「ふおおおお・・・」

男の声は掠れてまともに発声出来ない状態だった

「君、もう大丈夫だから落ち着いて」

（それは、母のような優しさの籠った若い女性の声だった）

「大丈夫だから」

そう言つてダンゴムシのように丸くなっている男を抱きしめた

「大丈夫」

抱きしめられ声を掛けられた瞬間、男の体から力が抜けていった

意識を手放す直前に男は見た、日の光を受けて金色に光輝く長い髪を見た

そして、吸い込まれそうな女性の赤と緑の目を・・・

第1巻 1ページ 扉（後書き）

初投稿です。

しかし文才がない・・・やっつけすぎる・・・
どうぞコメントをお願いいたします!!

第1章 2ページ 蛇と王女（前書き）

やっと次で本編に入ります。

第1章 2ページ 蛇と王女

Side ???

目を覚ました男は、ボーっとしながら腕時計を見ると8時38分だった。

「やべっ、会社に行かなきゃ」

がばつと、起き上がった男は見慣れない部屋にいた否、部屋とは呼べないような粗末なテントの中にいた

「は？え？俺の部屋で寝てたんじゃなかったの？」

そう言いながら今の自分の状況がよく分からない男はベッドの上で叫んでいると

ザッザッと音とともに誰かがテントの近づいてきた

「おい、大丈夫か？」

そこには、日に焼けた肌に屈強な体躯、手にはバカでかいナイフを持った男がテントの入口を捲っていた。

「へ？スネーク？」

某くれんぼゲーム3の主人公にあまりにそっくりでついつい叫んでしまった。

だが、それを効いたスネーク（仮）はいきなり襲いかかってきたのだ

「ちょ、タン　「貴様！！なぜ俺の名前を知っているんだ！！」
マ、タンマッて、え？」

声も0塚さんです。

本当に、スネークでした（笑）

「答える！！俺の名前をどこで知った！！」
そついうと手に持ったナイフを首に突きつけてきた

「すいません、メタルギアでみたんですけど・・・」

「わけの解らんことを行ってるんじゃない！！！！」

「やめなさい！！！！」

声を掛けられたためとつさに二人は振り向いた
ただここで、組み伏せられている男の首にはナイフが突きつけられていたで

ビュッシュウウウウウウウウ！！！！！！！

はい、切れています。
噴水のように血が吹き出しています。

「「あつ」」

スネークと女性の声が聞こえてたと思ったらまたまた、男は意識を手放してしまった。
ただ、意識を手放す瞬間に見たのは金髪の女性が駆け寄ってくる光景だった。

~~~~~  
~~~~~

数時間後

本日2度目の目覚めを果たした男は、ベットの上で体を捻ろうとすると体が動かない

なんとか動こうともぞもぞしていると、ベットの脇に二人の人影が

「気がついたかしら？」

ぱつと声のしたほうに顔を向けると意識を手放すときに見た女性とスネークがいた

「あなたに危害を加えるつもりはありませんが、念と為拘束させてもらってます。」

その声には凜とした強さが込められていた。

「ああ、はい。」

いくらヘタレで、テンパリやすくても、いきなり上空からパラシュート無しでスカイダイビングをしたと思ったら

スネークに羽交い締めになればこの程度ことは何でもないのである。

「ってか、首!!」

確かに切られた首を確認しようと思ったが自分の首を確認できるはずもなく、頭を上げるが特に痛みはなかった。

「大丈夫だ、陛下が直々にお前を治療して下さったんだ。ありがた

く思え。」

「そんなことより、あなたはいつたい何者なのですか？」

「俺は．．．．「エックスⅡステイングレイ」です」

（あれ？俺こんな名前だったっけ？）

「なぜ空から降ってきたのです？なぜこの男の名前を知っているのです。正直に答えて下さい。」

「え〜と．．それはですね．．．」

〜エックス説明中〜

「おい！！陛下に嘘をつくんじゃない！！！！」

今までの経緯を話したのだが、信じてもらえないようだった。
（まあ俺も信じられんような状況だし、グスン、、、、）

「私は信じましょう。」

「陛下!？」

「彼が嘘をついているかどうかを見れば分かります。」

「し、しかし、」

スネークと金髪の女性が話しているのを眺めていると女性がこちらに向きかえった。

「私はオリヴィエ、オリヴィエ」ゼーゲブレヒトです。」

「ど、どうも、」

（そついや、さっき抱きしめられた人だったよな？）

「さっきは助けてもらったみたいで、ありがとうございます。」

ぽかーんとした顔でスネークがこちらを見ながら

「お前、陛下を知らないのか？」

（そついやさっきから陛下陛下って呼んでるよな）

「あの、オリヴィエさんでどっかの国の王様なんですか？」

それを聞いた瞬間くすりと笑いながら

「この世界とは違う世界という話は本当のようですね」

「こちらは、ベルカ王国女王陛下、聖王オリヴィエ―ゼーゲブレヒト様だ、と言ってもわからないのか、」

「はあ、すいません。」

「まあいいでしょう。そして、あなたは何をしにこの国に来たのです？」

「その前にこの拘束具をはずしてもらえませんか？」

ああ、と納得してオリヴィエさんが手を翳しながら

「解除」

そついうと体を固定していた圧迫感がなくなった

「改めてお聞きします。あなたはこの国に何をしに来たのですか？」

「さあ？ 適当に観光でもしようかと思えます・・・」

そつ聞いた瞬間ぽかーんとする二人がいた。

（そついえば、会社どうしょ、明日早出なのに）
二人とは全く違うことをエックスは考えていた。

第1章 2ページ 蛇と王女（後書き）

どーもJackです。

舞台は古代ベルカです。

何とかリリカルなのはの世界に入れました。

主人公の名前は、コルベツトステイングレイから来てます。

第1章 3ページ 蛇と王女 サイドストーリー (前書き)

軽く書くつもりが結構大きくなってしまった・・・

「陛下！！お戻り下さい！！、聞こえないのか・・・」

必死に追いかけるスネークを少しづつ引き離しながらオリヴィエは、落下中の男の元に近づいた。

「大丈夫ですか！？」「ばばあああつおばばああおおおぞ×」だめね・・・完全に混乱している」

落下中の男は完全に混乱しており、体制を立て直させることは不可能な状況だ。

「陛下！！」

オリヴィエに遅れること数十秒スネークも近くに到着した。

男は混乱しており、空中でもみくちゃになっている。

抱きかかえて助けようものならこっちまで巻き込まれて落下してしまふ。

「スネーク！！クロスバインドネット！！」

「つつは！！」

通常は、人を拘束するのに使われるバインドだが、二人で交互にバインドを展開しネットを作り出すものである。

ただし、二人の力・タイミング・精神力などを完璧に合わせないと

成功せず、

通常は地上でトラップ用に使用され、空中ましてや落下中に使用するなど有り得ないのである。

「タイミングを合わせなさい！！ 3・2・1！！ つな！！」

落下中の男が急に体制を変え、体を丸めたのである。

落下速度は空気抵抗がブレーキの働きをしており、一定の速度で落下するのだが、

男が体を丸めたため空気抵抗が減り、クロスバインドの網を展開するのが間に合わなかったのである。

「いけない！！」

オリヴィエは今まさに地面に向かって一直線に落下している男を追いかけたのである。

ただし、その速度およそ300km！！

生身の人間では目を開けることは不可能な状況である。

「無理です！！諦めましょう！！」

スネークが叫ぶが風の音で打ち消されてしまいオリヴィエには聞けない、

時速300kmのハリケーンの中にいるようなもので当然会話など不可能だからだ

もう地面まで数百メートル!!

ここで停止行動に移らなければオリヴィエも無事では済まないのだが、、

「!!!!!!」

さらにオリヴィエは加速したのだ!!!

空中でブレながら落下する男を一気に捕まえるためだ。

そして、男と同じ目線の位置に到着すると精一杯の力で手を伸ばしたが、

ぶううおおおっおおおんんん・・・

タイミングが合わず、男とすれ違ってしまった
(っちい!!今度こそ!!)

びゅうううおおおっおおおんんん・・・

ガシッ！！！！

既に停止限界高度を超えているため、もう停止は間に合わない！！
そこで、オリヴィエが取った行動はあまりにも意外！！であった！！

「バスター！！！！」

なんと魔法砲撃を横に撃つたのである！！！！
止まらずに落下の運動エネルギーを横に移動の運動エネルギーに変えようと言っただけ！！！！

普段の彼女であればもしかしたら可能だったかもしれない。
両手で砲撃を打てば可能だったかもしれない。

しかし、左手で男を抱きつつ右手で砲撃する不安定な体勢に加えて、
彼女は砲撃が苦手であった。

（ダメ、間に合わない！！！！）

その瞬間！！衝撃が体を襲った！！！！

「っは！？スネーク！！！」

救出が無理だと分かった瞬間スネークはオリヴィエを救出するためにチェーンバインド伸ばしていたのだ、

「うおおおおおおおお！！！！！」

スネークが叫びながら全力で真上に引っ張り上げる！！
地面スレスレを滑るように移動するオリヴィエ！！
今にもはち切れんばかりのチェーンバインド！！

そして・・・

振り子のように運動ベクトルは横運動から上運動に変わった！！

「助かった……」

スネークとオリヴィエは二人とも安堵の声をあげた、
助けたばかりの男を見るとまだ怯えていた。

「大丈夫」

何度かそう言っていると次第に男の体から力が抜けてきた。

「陛下……！！おケガはありませんか！？」

「大丈夫、問題ないわ、それよりも彼を治療しなくては」

男の全身を見ると空中でもみくちやにされたせいで、ズタボロだった。
た。

ただオリヴィエもボロボロだった。

「全く、肝が冷えましたよ、なにかあったらどうするんですか！？
こんな事は2度としないで下さい！！」

「あら？その時はまたあなたに助けてもらっわ（笑）」

コロコロと可愛らしく笑うオリヴィエを見ながらスネークは「全く。。。」とつぶやいた。

どうやら相当苦勞しているようだ。 (合掌)

「さあ、急いで治療しますよ。」

↓数十分後↓

男性の治療を終え、森の中を歩いているオリヴィエ、するとテントの方が騒がしい。

なにか嫌な予感がするので急いで戻ると、

スネークが先程助けた男性に馬乗りになってナイフを突きつけている光景を見たオリヴィエは

「やめなさい！！！！」

そう叫んだ瞬間二人はこちらを向いたのだが男性の首から血が吹き出しているのである。

びくんびくんっ！！と痙攣を始めた男性を急いで治療した。

「オリヴィエ治療中」

「これで、よしっと!!」

男性への治療魔法が済むとスネークに向きかえた。

ただそこには、ガチガチに震えながらも直立不動のスネークがいた。
スネークの目線の先には、
ブチギレたオリヴィエが血まみれ姿で立っていたからだ。

~~~~~

その後の話し？

そりゃあ、まあ・・・察してくれや

あっ!!

そうそう、この話が結構あとになってから、美化されて本になったらしいぜ





第1章 3ページ 蛇と王女 サイドストーリー (後書き)

仕事がつつい、、、  
眠い、、、

話しがまとまらない、、、

だれか感想を下さい!!

## 第1章 4ページ オリヴィエの城（前書き）

エックスはシステムエンジニアをしていました。  
ハード・ソフト両方ともかなり詳しいです。

という設定です。

## 第1章 4ページ オリヴィエの城

「え？ なっなに？」

エックスはわけが分からなかった。

何かしたいかと？ と聞かれたけど時に何の計画も予定もなしにこの世界に来たのだから、

観光でもしようと思ったのだが、そんなにおかしかったのだろうか？

「まずは、この国が今どういう状況なのか知ってもらいましょうか。」

オリヴィエは、すぐに微笑みを浮かべながら切り出した。

一方スネークは、「おまえ、あほだろう？」という顔でエックスを見ていた。

（何かスネーク、やけにボロボロじゃね？）

先程のオリヴィエとスネークでどんなやり取りが行われたのか知らないエックスであった。

（オリヴィエ説明中）

「えっと、つまり戦争中で、観光どころではないと?」

「簡単に言つとそういうことになりますね。」

(オリヴィエさんの国といろんな国が裏切り裏切られの血みどろの戦争を繰り広げているらしい。。。)

「じゃあ、どうすればいいかな?」

エックスは、戦争を経験していない現代っ子、その上仕事はエンジニアで日々運動不足気味な男である。

このまま、二人と別れたら、即効で死ぬ自信がある。(笑)

「先程勝手に調べさせてもらいましたが、武器は持っていないようです。あつ、そういえばこれはなんですか?」

そういつてオリヴィエは、エックスの携帯電話を差し出した。

「あゝ、ケータイですね、それ」

「「ケータイ??」」

オリヴィエとスネークは、頭に?マークを浮かべていた。  
(もうメタルギアにしか見えねゝ)

「えっと、それは、俺のいた世界の通信手段で、」

エックス説明中

エックスのは、前にいた世界の事を話した。  
軍事・産業・観光・経済・技術などなど  
話していたらエックスから異音がし始めた。

• • • • •

腹の虫だ。

この世界に来て最初に気がついた時点で、8時38分  
現在時刻10時24分

ただし周りは完全に真っ暗であるが。

「ここで、話していてもしょうがないですね。あなたの世界に興味もありますし、私たちの城にいらっしゃい。」

スネークも始めは、ウサン臭そうな顔をしていたが軍事方面の話しをすると

かなり興味を津々行った顔で質問してきたりしたのだ。

「そうですね、ひとまずご飯をお願いします（笑）」

～ 一行移動～

Side ベルカ城

「おお、すげえ」

見上げるエックスの目の前には、城というより要塞があった。

『城』という単語を聞いた瞬間もつと西洋的な城を想像していたが、周囲を照らすサーチライトが幾つもあるような近代的な城があった。

「止まれ！！！」

へ～とか、ほ～とか、言いながら城に近づいていくといきなり呼び止められた。

すると目の前に二人の兵士らしきモノが槍を構えながらこちらを警戒していた。

黒いヘルメットだか、マスクだかを付け、迷彩柄の服を着込んでいたのだが、どう見ても  
メタルギアソリッドのゲノム兵だった。

「陛下の御帰還だ！！すぐに門を開け！！」

スネークが叫ぶと二人は「は、っはいっ！！」とか情けない声で叫びながらどこかにいきまもなく巨大な門が開いた。

「「「お帰りなさいませ。オリヴィエ陛下」」」

扉の内側には、メイドと執事が左右に別れてお辞儀をしていた。

「こちらは、異国より来られたエックスⅡステイングレイ氏だ。陛下のお客人である、丁重におもてなしをしろ。それから食事の用意もだ。」

「畏まりました。」

スネークが執事の中でも特に年配の男に声をかけた。  
オリヴィエは、「それでは、また後で。」とこちらに微笑んで城の中に入ってしまった。



所謂超上流階級のお出迎えを初めて経験したエックスは入り口で固まっているしかなかった。  
だから呼ばれたことに気付かなかった。

「エックス様。」

「あ、はい!？」

やっと気が付いてくれたと安堵しているメイドさんがいた。

「お部屋へご案内いたします。」

そういつて、部屋に行かれた。

部屋には真っ白なベットがよく似合う美しいというよりも機能的な部屋、さながら一流のビジネスホテルのようであった。

「お夕食の準備が整いましたらお呼び致します。それまでこちらでお寛ぎ下さい。何かありましたらこの呼び鈴を押して下さい。」

「あ、すみません。お風呂に入りたいのですが、着替とかありますか?」

城に入る時に気がついたのだが、おそらく自分の血であろうか、白いワイシャツは赤黒く変色していた。  
さらに、鉄錆のような血生臭い匂いが気になっていたため夕食前に着替えたかったのだ。

「着替ですか．．．使用人のものであればすぐにご用意出来ますが、よろしいですか？」

「お願いします。」

「畏まりました。それでは他に何かありましたら、こちらの呼び鈴を押して下さい。」

そういつて、メイドは着替えの準備と夕食の支度のためか部屋から出て行った。

エックスはとりあえずシャワーを浴びようと服を脱ぎだした。

シャワールームの鏡を見ると、いつもとは違う自分の姿があった。  
今までの中肉中背の体型から程よく筋肉がついたスポーツマンのような体つきになり、  
身長も今までは多少サバを読んで165cm位だったのだがどう見ても190cm位はありそうだった。  
髪型も今まではリクルートカットだったのだが、耳が隠れるくらいまで神が伸びていた。

（はっ！？何この体？）

驚きながら、自分の体を確かめっているとシャワールームの扉の外から、

着替を持ってきてくれた事、明日の朝までに今まで着ていた服は洗っておいでくれること、もうすぐ夕飯が用意出来ることを先程と同じ声のメイドさんが教えてくれ、急いでシャワーを浴びる事にした。

[illegible]

ここでキング・クリムゾン！！

読者のために野郎のサーブシーンはカットさせていただきます。

[illegible]

シャワーを浴び着替終わった頃に、メイドさんが来て食堂まで案内してくれた。

ちなみに用意してくれた服装はメイド服ではなく、ワイシャツにスラックスと今までと同じ格好であつた。

## Side 食堂

そこには豪華な食事の数々が、、、、待っていなかった、、、、

豪華なフルコースというより、変に見た目に拘るのではなく近所の美味しいと有名なイタリア料理店のように味にこだわってます！！  
というような料理であった。

「ごめんなさいね。お客様にお出しできるような料理ではありませんが……」

そういったオリヴィエさんは白い多少フリルの付いたワンピースを着て、済まなそうに笑っていた。

「いえいえ、とんでもない！！見ず知らずの俺を助けてもらって上に、こんなつまそうなご飯までご馳走になってるんすから。」

「ありがとうございます。うちのコックは優秀なのよ、味は保証しますわ。」

クスリと笑うオリヴィエさんは本当にきれいだった。

きれいというよりかわいいが適切かもしれない。

その後、早速食べ始めたが、感想は『うまい！！その一言であった。本当にうまいものを食べると』『うまい』しか言えなくなってしまうものです。

もう会話そっちのけで料理を食べ進め、今は食後のコーヒーを頂い

ている。

もちろんこのコーヒーのコクも香りもたまらない。

「いやあゝ、本当にうまかったです。」

「それは良かったです。私は所用があるので先に失礼しますが、先程のお話の続きをしたいので後で迎えを寄越しますのでごゆっくりしていて下さい。」

ニコニコしながらオリヴィエは席を立ち、執事を数人連れて食堂から出て行った。

その後は、コーヒーを飲みながらボーっとしているとスネークが呼びに来た。

「陛下が先程の話の続きをお聞きになりたいとお待ちだ」

「わかった」というとスネークに連れられしばらく歩くと扉の前にスネークは立ち止まりノックをした。

「お入りなさい」

そう言われて入った部屋は、ビロード張りの赤いソファが中央に置かれ、そこにオリヴィエさんは座っていた。

「御掛けになって。」

オリヴィエさんの机を挟んで向かいのソファに腰掛け、その隣にスネークが座った。

「さて、早速ですがアナタの世界の事、そしてアナタの事を教えてください。」

「はい、そうだなあ、、、まずは、」

～エックス会話中～

エックスは、自分の世界の政治・経済・軍事そして自分の仕事はシステムエンジニアでプログラムなどを作っていた事を話した。

二人からはこの世界について詳しく聞いた。

特にこの世界には、『魔法がある』こと『デバイス』と呼ばれる魔法の補助器具がありこと、

デバイスについては興味がありいくつか質問していたのだが、あまり詳しくないらしく明日、

研究者たちが集まっている集落があるためそこに連れて行ってくれる約束もした。

途中何度かオリヴィエとスネークからの質問に答えたりしていると時刻は、夜中の3時を知らせる柱時計が音が部屋に響いた。

「すっかり話し込んでしまいましたね。今日はもう休みましょう。残りはまた後日お話頂けますか？」

「ええ、もちろん。いつでもお話しますよ」

すっかり話し込んでいたから本当はあまり眠くないのだが、これ以上遅くまでいるのも申し訳ないと思い自分に充てがわれた部屋に戻った。

「今日は、色々なことがあったなあ・・・」

そつ言終わるが先かエックスは眠りに落ちた。

**第1章 4ページ オリヴィエの城（後書き）**

なかなか盛り上がるシーンまで進めない。。。。

誰か感想を下さい。。。。



**第1章 5ページ 失われた土地（前書き）**

またまた別作品のキャラ登場です。

## 第1章 5ページ 失われた土地

翌日、ランチを済ましたエックスは、スネークと数人の部下に連れられて

デバイス作りをしている人達が集まる集落に向っている。

なんでも今日はオリヴィエさんは、用事があって忙しいらしい。

「あのさスネーク。今向かっている場所ってどんな所なの？」

「ふむ、どんなところか・・・まあ研究者たちが集まって武器やデバイス・魔法の研究をしている村だ。研究者たちに必要な物資を売るのを専門とした業者達も多く出入りしているし、ここベル力は周辺国よりも戦火が少ないから自然とそういった者たちが集まってできた村だな。」

エックスの質問に答えるスネークだった。  
さらになにか言いたげだったが「行けばわかる」というとそれっきり何も言わなくなった。

（なんかこわいなあ）

エックスは、白衣に牛乳瓶の底のようなメガネを掛け、変な色の薬品が入った試験管を振りながら

『ついに完成だー！！』とか叫んでいるマッドサイエンティストが、うろつろしている光景を想像していた。

「ちなみになんて名前の村なの？」

「ん？言っ てなかつ たか？その村の名前は・・・」

## アルハザード

古今東西ありとあらゆる文献に出てくる土地の名前であり、技術者にとってはまさに夢のような土地であり、ここからこぼれ落ちた技術が多くの世界の技術の根幹なっていると  
も言われている。

どこにあるか分からない場所の名前だ。  
呼び名は違ったとしても同じ場所を示しているのではないかといわれているまさに伝説の土地だ。

そして、エックスは伝説の土地アルハザードに足を踏み入れた！！

「・・・なに・・・このカオスっぷりは・・・」

そこには、白衣の研究者と思われる者たちが大通りを至ったり来たりしていた。

ただ、その雰囲気はなんともいえない奇妙な雰囲気だった。

人通りの多い大通りの中でも人の壁になっている箇所があった。  
そこからは、「おお！！」とか「いいぞー！！」とかいう声が上がっていた。

丁度人の切れ目から見るとそこには、肩まである濃い茶色の髪

をした女性研究員と思われる人が  
上半身ブラジャー姿で立っていたのだ。

「「「!?」」」

我々一同はびっくりして見ていると、スネークがいきなり

「こらっ!!何をしている!!」とでかい声で叫び出し群衆は一斉  
に驚きスネークに向き返った。

ちなみに、その時の群衆の頭の上には赤い大きな『!』が見えた気がしたのだがエックスの気のせいだろう・・・

「貴様ら、すぐに解散しろ!!」

スネークがそう叫ぶのが早いか、群衆は蜘蛛の子を散らすように周りの人ごみの中に消えていき、そこには、上半身ブラジャー姿の女性研究員だけが残された。

「だっ大丈夫ですか!?!」

エックスが恐る恐る声を掛けたが意外な返答が返ってきた。

「???意味が分からないのだが?」

「いや、だって、上着を脱がされていたじゃないんですか!？」

「脱がされた？私がか？暑いから自分で脱いだに決まっているだろう。」

つまりこの女性研究員が言いたいことはこうだ。

- 1 ・今日は暑いから上着を脱いだ。
- 2 ・でも暑いからさらにシャツを脱いだ。
- 3 ・そしたら、人が集まってきた。
- 4 ・人が多くて移動できないからどうしようか考え中。
- 5 ・スネーク叫ぶ。

「意味が分からん。。。」

エックスがそいついつつ女性研究員に服を着せようとしていると後ろから周りに聞こえないくらいの小さな声で

「・・・性欲を持て余す・・・」

「え？何だって？」

「いや、何でもない・・・」

スネーク以外には周りの喧騒に掻き消されてしまったのだった。

「ところで、君は見かけない顔だな。名前は？」

「俺は、エックスⅡステイングレイです。どうぞよろしく。」

「ああ、よろしく。」

「つて、ちょ、ちよつと!？」

そう言いながら、立ち去ろうとした女性研究員の腕を取り呼び止めた。

「????もう人垣は無くなったから問題ないだろう????」

「いやいや、周りを見て下さいよ!!目が血走った奴らだらけじゃないですか!!襲われたらどうするんですか!!」

「起伏の乏しい私の体を見て、劣情を催す男性がいるとは思えないのだが・・・」

「そういう問題じゃないから!!危ないから!!」

なんかブツブツ言っていたが無視して話しを進めた。

「あ、すいません。名前って何でしたっけ？」

ああといった女性研究員は名前を覚えてくれた。

「木山春生だ。」



**第1章 5ページ 失われた土地（後書き）**

お気に入り登録して下さった皆様ありがとうございます！！  
おかげでまだまだがんばれます！！！！

第1章 6ページ 木山邸（前書き）

今回はあまり話しが進みません。

## 第1章 6ページ 木山邸

「ここが、私の家だ」

エックスたち一行は、木山春生を研究所兼自宅に連れていったのだが、

そこは、大きな庭に砂場やジャングルジムといったものがあり、家や研究所というよりも幼稚園に近い建物だった。

「あ！！せんせーおかえり！！」

黄色いカチューシャをつけた小学生くらいの女の子が声を掛けるとさっきまで庭で遊んでいた子どもたちが一斉に駆け寄ってきた。

「せんせーおかえり！！」

「せんせい、お土産は？」

「せんせーけんたくとあきらくんが、けんかしてたよ」

子どもたちは一斉に自分のしゃべりだし、エックスたちはタジタジだったが、

木山は慣れた様子で「まったく、私は一人しかいないんだ、順番に話してくれ」

そういつて困ったような顔をするが何処と無く、満足そうな嬉しそうな顔をしていた。

「きやませんせい、そのひとたちだれ?？」

やっと気付いてもらった・・・

～木山先生説明中～

子どもたちの話を聞く限りしょっちゅう人前で服を脱ぐクセ(?)  
のようなモノがこの木山先生にはあるらしい・・・

目の下には濃いクマができており、髪もバサバサではあるが整った  
顔立ちをしていた。

起伏がないと言っているが十分に女性らしいラインを描いていた。  
そんな風に、エックスは木山をみていると

「私の事がそんなに珍しいのかね??」

「っ!!! すいません!!!!」

「ところで、君たちは政府の人間たちだろう?こんなところに何を  
しにきたんだ?」

「実はデバイスとかに興味がありました」

「エックス説明中」

「ふむ、なるほど、話しの筋は通っているようだ。しかし・・・」  
そう聞こえたと思ったらブツブツ独り言を言い出したのだ。

「だめーーーー！！！！！！！！」

いきなり何事かと思つて子供を見ると、ほほをふくらませながら先程のカチューシャの女のこと怒っていた。

「またせんせいのわるいクセだよ！！入り口でたったままじゃなくておうちの中にはいるうよ??」

「ああ、そうだな。おまえたち今日のおやつはロールケーキだ。手を洗つて食堂に集まりなさい。」

わー、っとロールケーキの入った箱を持って家に向つて子どもたちは一斉に走つて家の中に消えていった。

「しかし大家族だなあ、何人家族なんだい？」

「孤児だ。」

「え!??」

「この子たちは、捨てられたり奴隷として売られていた子供たちなんだ。」

「子供が好きなんだな。」

「子供は嫌いだ」

そういった木山は頬を赤くしながら嬉しそうな顔をしていた。

第1章 6ページ 木山邸（後書き）

PVアクセス6,000超え!!

ユニークアクセス1,300人超え!!

この作品にこんなにたくさんの方にご覧いただきありがとうございます!!

**第1章 7ページ 恐るべき子供たち（前書き）**

そろそろ戦闘シーンに突入予定です。



## 第1章 7ページ 恐るべき子供たち

エックスは、木山に自分の世界の科学技術などを教える代わりに木山から、この世界のデバイスや科学技術について教えてもらえることになった。

そうこうしていると、おやつを食べ終わった子供たちが木山の部屋に入ってきた。

「せんせい、ごほんよんで〜」

「せんせい、おにごっこしようよ」

「だめ、せんせいは私たちとおままごとするの!」

子どもたちが、誰が木山と遊ぶかと言い争っているとき、木山はとんでもないことをいいだした。

「このおじさんたちが、みんなと遊んでくれるらしいぞ」

「『え!?』」

エックスたち一行の頭上には一斉に「!」が出ていたことだろう

「折角だ子どもたちと遊んでいくがイイさ。」

子どもたちと木山の顔を交互に見やっていたエックスたちはいきなりの事で、何を言われたのか分けが分からなかった。

「悪魔め・・・」

スネークの部下が消え入りそうな声でつぶやいた  
確かにほんの一瞬木山に小悪魔のような尻尾が見えた気がした・・・

子どもたちのわくわくとしたような天使の笑顔。  
木山のニヤニヤとした悪魔の笑顔。

勝敗の結果は・・・

「「「 わかりました．．． 「」」

今回は天使の笑みを持つ子供の勝利だった。  
というより、天使が勝っても悪魔勝っても子どもたちと遊ばなければ  
ならないという罫が待っていた．．．

それから数時間は、まさに地獄だった。

エックスは、子どもたちに関節技を次々掛けられまくっていた。

スネークは、頭にお花の冠をつけながらおままごとに付き合っていた。

部下の一人は、鬼ごっこをしていた。ただし重装備のままで走り続けていた。

部下の一人は、カンチョーをされ、「は、腹が．．．」と言ってトイレに籠って未だに出てこない。

「おまえたち、そろそろ夕飯の準備を始めろぞ」

「．．． はあ．．．い！！！！」

そういうと、子どもたちのおもちやになっていた男たちをそのままにして一斉に家の中に入っていた。

「．．． 助かった．．．」

「あたた、マジで折れるかとおもったよ」

「はあはあ、訓練よりもきついぞ」

「うっ、また腹が．．．」

それぞれ、グチっていると一人反応がない男がいた

「スネーク??」

みんなに背を向けた状態で立っていたのだ

おそろおそろスネークの前に出ると、そこには何かを成し遂げた男の顔が、、

雲のように消え入りそうな男の姿が夕日の中で見えた、それはスネークだったのか「後は任せた」

そういつているように聞こえた、、

「スネーク!! 帰ってこい!! スネエエエーーク!!」

数分後

そのあと何とかスネークを呼び戻し

現在は、応接室のようなところでコーヒを飲みながら夕飯間の時間を待っていた。

「いやいや、申し訳なかったね」

「疲れたけど、結構楽しかったですよ」

エックスは答えるが、他の男達は「まじかよ!?!」って顔をしていた

「お詫びに夕飯をご馳走するよ」

「ありがたいがまたの機会にお願いしたい。我々はまだ仕事なんだ。」

スネークがそういうと、「残念」と言いながら木山が肩を窄めた。ちなみにスネークの頭には、まだ、お花の冠が乗っかっていた。

「できれば、俺を雇ってもらえないかな？」

エックスは、何かを思い立ったようでいきなりそんなことを言い出した。

「なぜだ？お前の仕事くらい後ろのやつに頼めばいいところが見つかるだろ？」

エックスはこの世界にきてまだ二日ほどだが仕事が無いというのがなんとなく不安に感じていた。

オリヴィエに言えば仕事の幹旋などを手配してくれそうだが、そこまで世話になるのが申し訳なかったのだ。

「そういうことなら構わんよ。子どもたちもオマエのことを気に入ったみたいだからな。」

そんなわけで、木山の研究の手伝いや子どもたちの世話をする事で給金も貰えることになったのだが  
突如電子音が部屋のに響いた。

プルルル。プルルル。プルルル。

「失礼。」

そっいつてスネークは、無線を取った。

「こちらスネーク。ああ、まあ多少予定が変わってな、何！  
！」

スネークがガバッと立ち上がる同時に、大きな声を出した。  
いつもの厳格イメージのスネークではあるが、今のスネークは厳格  
というより  
焦っているというか怒っているような感じだ。

「分かったすぐに向かう。」

無線を切ったスネークの顔からも何か重大なことが起こったが理解  
できた。

「隊長。今の無線は一体なんですか？」

部屋にいる全員がスネークに注目していた。  
ふむ、といって考える素振りをしたあと、一言だけ呟いた。



「戦争だ。」

**第1章 7ページ 恐るべき子供たち（後書き）**

次回から戦闘パート突入です。

## 筆休め

どーもJackです。

PVアクセス1万超え!!

ユニークアクセス2千を超え!!

ほんとうにありがとうございます!! m ( ) m

まさかこんなに多くの方々にご覧いただけるとは思ってもいませんでした。

ここで突然ですがアンケートを行いたいと思います。

なにぶん思いつきで始めてしまったので、文才なし・誤字脱字多し・わかりにくいとは思いますがぜひご意見をいただければと思います。

~~~~~アンケート~~~~~

・文章の量はどうですか？

1) 少ない!!

2) まあまあ

3) 多い

・話しのテンポはどうですか？

1) もつと細かく

2) 今くらい

3) 早く進める

・ぶつちやけおもしろい？

1) おもしろいかな？

2) 暇つぶしにはなる

3) 早くヤメロ!!。。。 or z

・その他何でもご意見を!!

~~~~~アンケート終了~~~~~

えゝこの後この物語をどこまで続けるかなどのネタバレをのせたい  
と思います。

嫌な方はブラウザの戻るでお戻り下さい。



もういいかな？

- 1 物語は、StS+アルファ程度までは進めていきたいと  
思います。
- 2 チート無双をやりたいです。
- 3 キーメイカーを第一章の最後くらいに登場させる  
予定です。
- 4 魔法も超能力なんでも都合主義でいきたい  
と思います。

**第1章 8ページ 先生（前書き）**

今回から戦闘開始です。





「ふざけるな!!」

木山が叫んだ。

「戦争を止めるための戦争？そんなものために私たちを巻き込むな!!」

部屋を静寂と思い空気が覆う。

「えぐっ、せんせい」

声のした方を振り向くと、夕食のために呼びに来たであろうか？  
一人の女の子が泣きながらそこにいた。

「また、ここにいらなくなっちゃうの？」

この子は戦争で家族を失ったのだろう。  
そして、戦火を逃れるように逃げてきたのだろう。  
こんなに小さな子までも戦争の恐ろしさが分かるのに  
大人たちはまた戦争を行おうとしている。

「大丈夫だ。私が守る。」

そう言って女の子を木山は抱きしめた。

「う、うわあああん!!」

嫌なことを思い出したのだろうか  
木山に抱きしめられて安心したのだろうか  
声の限り泣き出した。

「せんせい・・・」

いつの間にか子どもたちが集まっていた。

「また、戦争なの？」

今にも消え入りそうな声で聞いてきた。

「ああ。だが私がお前たちをどんな事があっても守る。」

「「「せんせい！」「」「」

みんな泣きながら木山にすがりついた。

「大丈夫。大丈夫。」

木山はこどもたち一人ひとりの顔を見ながらそう呟いた。

「木山春生」

スネークの呼び掛けに木山は振り返った。

「我々はこれより戦場に向かう。だが、エックスは魔法つかえない  
ただの男だ、ここに置いてやってくれ。」

「わかった。」

そうしてスネークは部下を引き連れて部屋を出ていこうとした。

「スネーク……」

エックスは、戦争の知らない世代だ。

戦争といってもゲームや映画の中の話しか、ニュースで見るだけの  
実感のない存在だった。

「お前とは短い付き合いだったな。陛下には俺の方から行っておく。  
この村で静かに暮らすんだ。」

スネークにそう言われるとエックスは何も言えなくなってしまった。  
否、言えたところで何を言えというのか？

一緒に戦場にかかるか？

戦争を止めるとも言うのか？

そんな事を考えているとスネークは部屋を出て行った。

「すまない。」ただ一言だけそう言って出て行った。

「さあお前たち、泣いてばかりてもしょうがないからな、早くこ  
飯を食べよう。」

「数時間後」

「ふう．．．」

エックスはベランダで一人タバコを吸っていた。

コンコン

「どうぞ」

ガチャ

木山が入ってきた。

あの後子どもたちをなだめて、夕飯と風呂を済ませたあと、子どもたちは中々寝付けなかったようだが木山が添い寝をすることでやっと寝かしつけたらしい。

「今日のご苦労様。」

そう言ってコーヒーを差し出した。

「ありがとう。」

そう言ってエックスはカップを受け取り一口くちに含んだ。

「苦っ」

木山は小さく笑いながら「すまないな」と言っていた。

「木山さんは、この後、どうするんだ？」

「何もしない。」

「え？」

「子どもたちにはここ以外どこにも行く場所はない、ここが最後の居場所なんだ。」



そういつて、二人で外を見ていた。

どっ！おおおおおんんん．．．

「！！！？」

近くで何かが爆発したようだ。

「木山！！」

「っちい！！ここまできたか、子どもたちをすぐに起こして食堂に集めるんだ！！」

先程の爆発音で目が覚めた子どもたちが廊下に出てきていた。

「すぐに食堂に集まれ！！」

（食堂）

「みんないるみたいだな・・・」

エックスと木山は子どもたちの数を数えながら全員避難できたことに安堵した。

バッシューウウ

ドサッ

倒れる子供。

泣き叫ぶ子供たち。

床に落ちたカチューシャ。

「ばんり絆理！！」

木山とエックスは絆理の元に駆け寄った

「おい！！返事をしろ！！おい！！」

「きやま・・・せん・・・せ・・・」

頭から血を流しながら木山を呼ぶが  
そう言ったきり動かなくなった。

「大当たり〜」

一斉に振り向くと銃を手にした男が4人へらへら笑いながら立っていた。

「貴様ら————!!!!!!」

ガッシャーン!!

木山がそう叫ぶと、彼女の目が赤くなった。丁度白目の部分が充血したよりも真っ赤になったと同時に男たちを外へと吹き飛ばした。

「いって〜、マジあの女殺すわ」

「おい、先に楽しんでからだろ」

「抵抗できなくなるまで痛めつけてからだろ」

「抵抗する女を無理やりつてのも中々おつなもんだぜ」

最低の人間だ。

戦争では自分を律することができなくなって獣に成り下がるものがあるがその最たる例だろ

ドツチュウウウー——————ウウン・・・

一瞬カメラのフラッシュのような閃光がしたと思ったら、直後スゴイ音がした。

エックスは、『撃たれた』と思ったら違った。  
男の一人の左肩の部分が丸く消滅していた。

「あ？」

ドツチュウウウー——————ウウン・・・

ドチャ

二回目の閃光と轟音。

先程の肩が消滅した男の胸の部分が丸く消滅したと同時に倒れた。

レールガン

金属片などを電磁力で超高速で打ち出す兵器だ。

ただ、消費電力や装置の問題でかなり大型になるのが欠点なのだが、それを木山は指先から発射したのだ。

「つてんめー!!」

一瞬のうちに、男のそばに移動した木山は赤い棒のようなものを手にしていた

気が付いたら、男の左腕から腰までが斜めに切り裂かれた。

「シネー……!!」

そう言っただけで残った二人の男は銃を木山に向かって乱射した。

木山に当たる直前、全ての弾丸が一方の男に向って跳ね返っていた。

文字通り蜂の巣のようになった男は原型をとどめていなかった。

カチン、カチン

「っち、ちくちょー！ー！ー！！弾切れか！？」

急いでマグチェンジする男にゆっくり歩きながら

「貴様が・・・絆理を・・・」

「っちい！！死ねええ！！」

マグチェンジが間に合わないと思ったのか、銃を捨て代わりに大型のサバイバルナイフを手に木山に斬りかかった



ぎゅっうんん．．．どおおおおおん．．．

男のナイフが急に縮んだと思ったら爆発した。

爆発の規模は大きくなかったが、男の両腕を吹き飛ばすには十分な威力だった。

「がああ！？なんだよコレは！？？」

無くなった腕を見つめながら男は叫んだ

「よくも絆理を！！！！！！！！」

木山が体を捻りながら右腕を思いっきり後ろに振りかぶった

そして、反動を使って右腕を男に叩きつけた。

ちょうど野球のピッチャーのようなフォームだったが彼女の手にはボールの代わりにコブシが握られていた。

木山の右手が叩きつけられた男の胸から上の部分が消し飛んだ。

「うおおおおお！……！！！」

木山が獣のように夜空に吠えた。

第1章 8ページ 先生（後書き）

今回はちよつとがんばりました。

初めての戦闘シーンでしたが、如何だったでしょうか？  
レビュー＆感想を待ってます。

## 第1章 9ページ 許し（前書き）

前回下書きで最後に間違えて絆理の事を書いてしまった・・・



「木山！！絆理はまだ生きているぞ！！」

エックスが叫んだ。

それを聞いて我に返った木山は急いで絆理の元に駆け寄った。

「絆理！！しっかりしろ！！」

「せんせゝ・・・」

弱々しいが何とか返事をした。

右肩を撃たれたらしく、出血している。

頭の傷は倒れた際に切ったらしく大した事は無いがこのままでは長くは持たない

急いで適切な治療をする必要がある。

「急いで病院に「だめだ！！間に合わない」「じゃあどうすんだよ！！」」

「私の能力で治療をする」

そう言つて木山は、絆理の肩に両手を当てて力を込めた。

「っん！？・・・」

一瞬苦しそうな顔をしたがすぐに楽になつたらしく穏やかな顔になつてきた

それと同時に、さっきまで白い顔だった絆理の顔に血の気が戻ってきた。

カチッ

先程左腕から腰まで切られた男は、まだ息があったらしく何かのス  
イッチを入れた。  
気がついたのはエックスだけだった。

コロコロ・・・

男が事切れたため、何かが転がってきた

「うおおおおおお!!」



エックスは咄嗟にみんなの前に出た

どおおおおん！！

それとほぼ同時に爆発した

キャアアア！！

子どもたちが叫ぶ。

木山は絆理を守るように抱きしめる

エックスは目を瞑り強く思った。

俺が．．．守る！！

しかし、爆風はこなかった。

恐る恐る目を開けるエックス目の前には虹色に光る半透明の壁があった。

「待たせたな。」

スネークがシールドを展開してたのだ。

「スネーク!!」

「さっきここに逃げてくる奴らが見えたんでな、急いできたんだ。」

そう言っところらに歩いてきた。

「せんせい」

絆理も気が付いたようだ。

「大丈夫か？」

「絆理ちゃん大丈夫？」

エックスや木山をはじめ子供たちが一斉に絆理に注目した。

「大丈夫。」

「済まない。君を守ってやれなかった・・・」

「どうして？せんせいは、私を助けてくれたじゃん・・・」

木山は泣き出した。

絆理が助かって嬉しかったのか  
自分が許せなかったのか  
許しが得れてからなのか

ただただ、木山は大粒の涙を流しながら泣いた。

「ありがとう。」

一頻り泣いた後、木山はスネークに一言だけ呟いた。

その後は、スネークの部下たちが来て死体を片付けたり  
避難でケガをした子供たちの治療を行ったりで気が付けば東の空が  
明るくなり始めていた。

「スネーク」

木山は、庭に独り佇むスネークを呼びかけた。

「ありがとう。」

そう言ってスネークに木山は頭を下げた。

「謝られるようなことじゃない。俺たちがあいつらを逃がさなければ済んだだけだ。」

「でも君は子供たちを助けてくれた。本当に感謝している。」

そう言った木山の顔は疲れているようだが美しかったと後にスネークは語った。

「俺に魔法を教えてくれ!!」

エックスはスネークと木山のところに駆け寄って来るなり開口一番に言った。

「俺は、あの時怖くて何もできなかった。ただ頭の中が真っ白になったんだ。」

でも・・・何かを決心した顔でエックスは続けた。

「皆を助けたいんだ。だから俺に魔法を教えてくれ!!」

そう言つと頭下げた。

「もとよりそのつもりだ。君にはここで働いてもらうんだからな。」

木山はいつもの口調で話した。

「君には魔法だけじゃなく私の知識を知ってもう。そしてこの子たちを守ってもらわなくては」

「ありがとうございます!!」

「なら俺も協力しよう。なにより・・・」

スネークはエックスを成長したわが子を見る親のような顔で語った。



「戦闘の基本は格闘だ。」

第1章 9ページ 許し（後書き）

チート無双な木山先生でした。

今後は木山のチート能力とスネークの体術を覚えてもらいます。

## 第1章 10ページ エックスの立場（前書き）

今回は短いですが2話連続投稿です

## 第1章 10ページ エックスの立場

その後、スネークと木山は和解したらしく  
親しげに話していた。

城に戻ったスネークは、今回の経緯についてオリヴィエに報告をした。

なお勝手に出ていってしまうのは申し訳ないと思ったエックスも  
挨拶だけでもと思い、スネークと一緒にオリヴィエの前にいた。

「エックスごめんさい。関係のないあなたを私たちの戦争に巻き込んでしまつて。。。」

いつもの明るい表情のオリヴィエとは思えない悲痛な顔をしていた。

「そんな気にしないで下さいよ。みんな無事だったんだからいいじゃないですか」

「しかし、そういうわけにはいきません。アルハザードの人達を守れなかったのですから・・・」

今回の襲撃は、アルハザードの技術が目的だったらしく  
多くの技術者たちが殺され、彼らの研究成果を破壊もしくは盗まれ  
てしまったのだ。

「恐れながら陛下に申し上げたいことがあります。」

「改まってどうしました？スネーク」

「再びアルハザードが襲われる危険があるため兵を常駐させてみて  
は異如何でしょうか？」

「兵をね．．．」

オリヴィエは、街中に兵が銃を持って歩くと住民にストレスを与え  
てしまうのではないかと考えているのだ

「あのーオリヴィエ陛下、ちょっといいですか？」

「無理に陛下とつけなくてもいいのですよ。今まで道理名前で読んで  
く構いません。」

「わかりました。オリヴィエさん。提案があるんですが。」

「提案？」

エックスの提案とは、アルハザードの住民が自分たちで守る自警を

行ってみてはどうかと言う話だ。

ちょうど、スネークに戦闘技術を教わる約束した話しを交え、一先ずエックスに教えるという名目で

数人の兵士がアルハザードに出入し、住民が慣れてきたら自警のために少しずつ戦闘技術を教えていこうというものだ。

「なるほど自警ね、考え付かなかったわ。スネーク」

「っは!!」

「あなたにエックスさんに戦闘技術を教えることを命じます。内容については私よりアナタの方が詳しいので任せます。」

「畏まりました。」

「オリヴィエさん、ありがとうございます!!」

「あと、これはエックスさんをお願いなのだけれど聞いてくださるかしら?」

オリヴィエは、いつもの明るい声と表情に戻っていた。

安心したエックスは「俺にできることなら」と意気込んだ。

「訓練の合間で構いませんから、アルハザードのことを教えてください。」

「え？でも報告とか受けてるんじゃないですか？」

「確かに受けているは、でも、住民が何を思っているのかを直接聞きたいの」

「わかりました。そんなことならお安い御用です！！」

そのあと、今後のエックスの立場などを話し合い  
今後エックスは、他国の技術者でありこの国に流れ着いたということにし、

エックスの国の技術などをオリヴィエに報告する代わりに、アルハザードでの生活を許したということにしたのだった。

## 第1章 10ページ エックスの立場（後書き）

これで、エックスは自由にオリヴィエに会えるようになりました。



**第1章 11ページ スネークの自論（前書き）**

短いですが勘弁してください。

## 第1章 11ページ スネークの自論

木山から魔法・スネークからCQCを教えてもらえることになったのだが・・・

ドガン！！

「いつて」

ひっくり返るエックス。スネークにCQCをかけられている。

さつきから投げ技・関節技・寝技とありとあらゆる攻撃を仕掛けられている。

幸い木山から簡単な治療魔法を習ったおかげでなんとか立てているが初歩の初歩程度しか治療できないため、ダメージはどんどん蓄積していつてる。

「早くたたんか」

「分かってるよ。ってか初心者なんだから、少しは手加減してよ」

「戦場ではそんな言い訳は通じんぞ、早く立たんか」

しびしび立ちながら、構えるとすぐにスネークが殴りかかってきた。

「へっぶー!」

エックスは何回目かの空を見た。

「数時間後」

「今日はこれくらいにしておくか」

「助かった」

その場にへたり込むだけで精一杯のエックスであった。

「これで本当に強くなるのかなあ。。。」「

「なるわけ無いだろう」

「どっ!」

多少でも「修行だ!!」とか言ってもらえると思っていたのにスネークの無情な一言に凹むエックスであった。

「単純に強くなりたいなら魔法で身体強化すればいいだけだ」

「じゃあ、その方法教えてよ!!」

先程までの死に体とは思えない鋭いツツコミをいれた。

「言っ たら? 強くなるのは単純な強さだけだ」

「??」

スネークが言うには、体を鍛えることが重要であるらしくなまじっか力が強いとその力が通用しなかった時に弱いらしくそれでは戦場で生き残れないらしい。

「まあ、今は徹底的に傷めつけられて、どうすればダメージが少なくなるか考えるんだな」

「マジっすかあ!」

ははは、と力なくエックスが笑っていると木山が子供たちとやってきた

「ひどいやられようだな」

「エックス先生ひどい顔（笑）」

子供たちが笑う中さらに凹んでいると木山が「どれ見せてみる」と言って治療をしてくれた。

「あれ？目が赤くなんないの？」

「ああ、あれは、私のレアスキルを発動させたからな」

「レアスキル？」

レアスキル

人がそれぞれ生まれ持った能力の総称  
すべての人が持っている能力だが、発言できるかどうかは家系や周辺  
の環境などで大きく左右される

「じゃあ、俺も使えるんだな」

「言っただろ？使えるかどうかはひとそれぞれなのさ」

張り切って聞いてみたがあまり期待はできそうもない回答だった・

「さあ、帰って夕食にしよう。スネークも一緒にどうだ？」

治療が終わってそういう木山に対して、相変わらずスネークは「いや、仕事があるから」と言ったが

「えゝ、ヒゲのおじちゃんも一緒に食べようゝ」

「いや、しかし・・・」

子供たちにブーブー文句を言われ焦っているスネークは木山に助けを求めるような視線を送るが

「食事くらい、いいじゃないか」

残念。スネークの思惑とは別に木山には「行ってもいい？」という

視線だと取られてしまった

「はあ、分かった。だたしちょっとだけだからな」

「「わーい!!」」

子供たちに無理やり連れていかれるスネークは中々珍しい

「君も何時までも座ってないでいくぞ」

「はーい」

そう言つて木山たちの家に向かつて一行は歩き出した。





## 第1章 11ページ スネークの自論（後書き）

さて次回からはアルハザードでの生活と、修業について書いていきます。

**第1章 12ページ 魔力の使い方（前書き）**

エックスと一緒に考えてください。

## 第1章 12ページ 魔力の使い方

本日の訓練メニューは魔法学

「待ってましたー!!」

「張り切っているな」

「なんとって魔法だよ？一度でいいからつかって見たかったんだ」

「そ、そうなのか？まあいい、訓練メニューなんだがな、まずは魔法を感じてもらおうと思う。」

「魔法を感じる？治療魔法なら使えるけど違うの？」

「確かにあれは魔法なんだが、本来の意味とは少し違う」

「????」

よくわかっていないエックスに説明するために

木山はガラスのコップを取り出し、そこに水を半分くらい入れた。

「まず、水を魔力。コップを人間だと想像して欲しい。」

「コップを人間？」

「そうだ。まあまずはこのコップの中の水を君ならどうやってコップの外に出す？」

「そんなもん、コップを傾ければ溢れるじゃん」

「正解だ」

そういつて木山は、コップを傾け水をこぼした。  
子どもでも分かることを聞かれて意味が分からず、  
だんだんイライラしたエックスが木山に突っかかる

「で？それと魔法の使い方がどう違うのさ？」

「さっきコップは人間だといったろ？たくさんの水>>魔力<<を取り出すためには、

コップ>>人間<<を動かさなければならない。」

「そんなことわかるよ」

「だがな、人間をここまで大きく動かすのは難しいんだ。」

「どういうこと？」

ますます意味が分からなくなってきた。

- 1 魔力を使うためには人間を動かす必要がある。
- 2 人間を動かすのは難しい
- 3 俺は簡単な回復魔法が使えているから、魔力が使えている

「全然答えがわからないのだが？」

「そう焦るな。じゃあ次にコップを傾けずに水を外に出してみろ」

そういつて木山はコップに再び半分位まで水を注ぎ、机の上に置いた。

「そんなの無理だよ、コップに触らないなんてそれこそ超能力でも使わないとできないよ。」

「これが今日の訓練だ。これができるまで次には進めないからな、まあせいぜい考えてみることだ。」

「あ、ちょっと」

そう言つて、木山はエックスを部屋に残したまま、部屋の外に出て行ってしまった。



## 第1章 12ページ 魔力の使い方（後書き）

さてここで、読者のみなさんも考えて見て下さい。

半分位まで水が入ったコップの水をどうやって外に出しますか？

自分ならこうするという方法をメッセージなどで教えて下さい。

**第1章 13ページ 固定概念（前書き）**

前回の解答編です。



## 第1章 13ページ 固定概念

「んゝわからん!」

あれからエックスコップを前にうんうん唸っていたのだ、

ボーン．．．ボーン．．．

玄関の柱時計から昼の12時を知らせる音が響いた

「やっべ、お昼の用意しなくちゃ」

お忘れだろうか？

エックスは訓練だけでなく、子供たちの世話もしているのだ  
もちろんその仕事の中には3食の用意も含まれている。

「エックスせんせ、おなかすいた」

「お昼ごはんまだ？」

「はいはい、ゴメンね！！すぐ用意するからもう少し待ってて！！」

子供たちの『お腹すいたコール』を聞きながら急いで用意した・

～昼食後～

「ふう～、腕時計とか買いに行かなくちゃな」

そう言いながらエックスは子供たちの食べた食器を片付けていた。

「さて、どうすっかなあ～」

「すこしは、イイ考えが浮かんできたか？」

そういつて、初期を洗いながら考えていると  
木山が厨房に入ってきた。

「まあ～何パターンか方法は思いついたんだがな、1つに絞りきれないんだよね～」

「ほう、そうか、ならもう少し考えて見るんだな、」

「え、せめてヒントくらい教えてよ」

「ヒントか？構わんがそのかわり、10年は魔法の習得が遅れるぞ？」

「何それ！？ひどー！じゃあいよいよ、自分で考えるさ」

そういつて、エックスは走り去っていった。

「彼がどんな答えを出すか楽しみだな」

数時間後

ボーン．．．ボーン．．．ボーン．．．ボーン．．．

現在午後6時、木山と約束した時刻になった。

現在エックスは、木山の研究室のソファに腰掛け机を挟んだ向かいに木山がコーヒーを飲みながら座っていた。

「俺の思いつく限りを書き出してみたんだが、どうかな？」

そう言つて、エックスが差し出した便箋には、以下のようなことが書かれていた。

- ・ 溢れるまでコップに水を注ぐ
- ・ コップを加熱し蒸発させる
- ・ コップを破壊する、穴を開けるといった加工を施す
- ・ 水を凍らせる
- ・ コップの中にモノを入れる
- ・ 揺らす
- ・ コップを勢い良く上下に振る
- ・ ハンカチなどの布の一部を水に浸す
- ・ ストローなどで吸いだす
- ・ 密閉して、真空状態にしたのち一部に穴をあける
- ・ 棒などでコップの中をかき混ぜた勢いを利用する

「ふむ。なるほどな。」

「で、この中に正解はあるの？」

「正解か．．．まあこの中の方法であればどれも正解だろう。これ以外にも『油を勢いよくいれる』や『熱した金属を入れる』なんかも正解だろうな。」

エックスはこの訓練の意味が分からなかった。

『コップを傾けずに中の水を外に出す』ことくらい子どもでもでき

るし

それこそ、多少の科学を学べばやり方なんて、いくらでも思いつくのだ。

「この訓練には2つの目的があるんだ。まず一つ目は、自信の魔力をどのように引き出すのかをイメージしてもらうのが目的だ。」

「イメージ?」

「そうだ。まず、自分の回答を見てくれ。これらをまず4つに分類してみてくれ。」

そういつて木山は、紙に以下のように書いた。

- 1 ・ コップに加工する
- 2 ・ 中の水を加工する
- 3 ・ 周りの環境を加工する
- 4 ・ 道具を使う

「ふむふむ、つまり『コップを勢い良く上下に振る』なんかは、2に該当するんだな?」

「そういう事だ。厳密に分けられなくてもいいからまずはやってみてくれ」

先程の便箋に番号を振っていった。

- 2 ・ 溢れるまでコップに水を注ぐ
- 3 ・ コップを加熱し蒸発させる

- 1 ・コップを破壊する、穴を開けるといった加工を施す
- 3 ・水を凍らせる
- 2 ・コップの中にモノを入れる
- 2 ・揺らす
- 2 ・コップを勢い良く上下に振る
- 4 ・ハンカチなどの布の一部を水に浸す
- 4 ・ストローなどで吸いだす
- 3 ・密閉して、真空状態にしたのち一部に穴をあける
- 4 ・棒などでコップの中をかき混ぜた勢いを利用する

「こんなんでいいかな？」

「まあいいだろ、これは人によって感じ方が違うからな自分がそう思った分類で構わんよ。」

「で、結局これと魔力のイメージってどういうものなのさ？」

「これは、取り出しす方法よりも取り出した結果が重要なのだよ」

「結果？」

「そうだ。水は魔力だと言ったろ？例えば、『水が広範囲に飛び散るもの』は、『広範囲に魔力が広がるもの』に置き換えられる」

エックスに以下のように書きながら説明した。

- 1 ・広範囲で水が取り出されるもの
- く広域魔法など

2・狭い範囲で水が取り出されるもの

・＜収束魔法など

「なるほど、つまり『狭い範囲』で『勢い良く』魔力を取り出したときは、直接中の水を弄るかコップを弄るってことだな？」

「そういうことだ。実際に今後魔力を使う時に、このようにイメージすると良いだろうな」

「なるほどネ、でも一つ一つの目的ってなんなのさ？」

「それはな、『固定概念』を打ち破れるかだ」

そういつて、木山は意地悪そうな笑みを浮かべながらこう説明した

「残念ながら君の回答では固定概念を打ち破れていないだ。」

「え？」

小さく笑った木山はコップを持って立ち上がると扉の前に立ちエックスに向き返った。

「私は言ったはずだ、『コップの中の水を外に出せ』とな」

そういうと木山は部屋の廊下に出ると  
ニヤニヤしながら切り出した。

「どうだ？部屋の外にコップの中の水を出したぞ」

「あつ・・・」

木山は再びソファーに腰掛けコーヒーを一口飲むと  
呆然としているエックスに

「魔法とはイメージで使うものだ。だが人は固定概念があるせいで  
なかなか上手く使えない。ある一族だけで使える魔法というものは  
その一族しか使えないとい固定概念があるからだ。」

「な、なるほど。じゃあこの前木山が使ったのは？」

「あれは、私が組み上げたオリジナルの魔法、>>多才能力<<（  
マルチタスク）だ。尤も、術式が複雑すぎて私しか使えないから、  
いわばレアスキルだな。」

「今までの話からすると、俺もその『多才能力』って使えるんだよ  
な？」

「もちろんだ。むしろ君にはこれを覚えてもらうんだからな。」



エックスは、将来チート魔法を連発する自分を想像した。

## 第1章 13ページ 固定概念（後書き）

どもJackです。

メッセージを下さった皆様にこの場を借りて感謝します！！  
ちよつと無理やり過ぎましたかね？

批判などありましたらメッセージで教えて下さい。  
今後は自重しようかと・・・

## 第1章 14ページ デバイス（前書き）

前回の回答編以降多数のお叱り・応援のメッセージありがとうございました！！

そろそろ盛り上げる展開を作っていこうと思います。

## 第1章 14ページ デバイス

木山の最初の訓練から一ヶ月あまりが経とうとしていた。エックスは、木山から魔法そしてスネークからCQCを学んでいるが一向に成長しない。

所詮スポーツ程度しか体を動かしたことがない男がほんの数日鍛えただけで成長するなどありえないのだが、一ヶ月近く体と精神を鍛えれば多少なりとも変化は出てきた。

木山からは、回復・砲撃・フィールド魔法などの基礎魔法をひたすら教え込まれていた。

スネークとの訓練では、初めは2〜3m程度吹き飛ばされていたのが1〜2m程度に抑えられてきたのだ。

ただ、怪我の功名か？

治療系の成長はなかなからしく、今までは腕の骨一本折れると10分近く治療に時間がかかり、その最中は激痛を伴っていたのだが、

最近では5分程度までに短くなり痛みも多少は和らげる事ができるようになったのだ。

そんな日常が過ぎようとしていたある日の夕食のこと。

「なあ、デバイスってなんだ？」

エックスは最近になって、町に買い物に行くようになり  
そこで『デバイス』と言う単語を聞いたのだ。

「ふむ。そういえば説明していなかったな、デバイスと「ダメー！  
！！」ってそうだったな」

エックスと食事をするようになり、食事中ついつい訓練や研究の話  
しをしてしまい  
食事を忘れてしまうことが多くなったため食事中は仕事の話は一切  
に禁止になったのだ。

～夕食後～

エックスと木山は研究室にコーヒー片手に先程のデバイスに付いて  
話していた。

「さっきの話だが、デバイスというのは魔法の補助をするようなも

のだ、多くの種類があるが杖の形が一般的だな」

「魔法の杖か．．．それってやつば高いんだよな？」

「上をみたら青天井だな。ただ自作を行うものもいるし、うまくすれば安く上げることはできるぞ」

「なるほどね。パソコンみたいなもんか」

この世界のデバイスというのは以下のような特徴があるらしい

・使用する術者の好みに合わせて、身体強化・魔法強化の2種類に分けられる

・形状の決まりはないが扱いやすいのことで杖が一般的

・予め魔法の術式を組み込んでおくことで、魔力制御を自動で行うことができる

ただし、容量制限がある。

・デバイスはカスタマイズや自作が可能だが、上を見たら青天井らしい

「明日訓練は休みだから町にいつて話だけでも聞いてくるといい」

「そうするよ、今日はスネークとの訓練だったからクタクタだからすぐに休むよ」

「ああ、ちよつと待て」

木山はそう言うと胸ポケットから封筒を取り出した。

「今月の給料だ。多少少ないかもしれんがこれで日用品でも買っ  
てこい」

「ありがとうございます!!」

そういつて、早速封筒を触ると若干の厚みがあった。  
中を見ると札束が入っていた。

「ぶっ!!」

だが今まで自分がもらったこともない金額に驚いた。

現代日本と物価や貨幣価値が多少違うがだいたい同じの価値だと思  
ってもらいたい

さらにお金の単位や紙幣の単位などは日本と紙幣と似ていた。

だからこそ現代日本に換算するとおよそ40万位の金額に思わず吹  
き出したのだ。

「いくら少ないからって、そんなに驚くことはないだろう」

「いやいや逆だから!!多いから!!」

木山がブスつとした表情で愚痴るがそれをすぐにエックスは否定し  
た。

「ってか助手兼学校の先生でこの金額は多過ぎだろ!？」

「そうか？助手だけでも、もう少し良い金額だぞ？」

この木山には一般常識というものが圧倒的に足りていないことを痛感した。

（そっぴゃコイツ、人前で平気で服を脱ぎ出すんだった。。。）

「君は何か失礼なことを考えていないか？」

「はぁ。。。何でもない。。。」

その後、学校と研究の出納管理をエックスが行うようになったのは言うまでもない。



第1章 14ページ デバイス（後書き）

どーもJackです。

1、10、50、100までは硬貨

1 0 0 0、5 0 0 0、1 0 0 0、1 0 0 0は紙幣を想定しています。

[illegible]

前回の解答編後、読者の方から良く分からないや  
とっとと話を進めるとお叱りを受けました。

魔法を説明するために必要だったと思ったのですが、  
上手く伝えきれず申し訳ありません。

今後の内容につきましては、仕事から帰宅後、  
文才の無い頭で少しづつ進めておりますので  
時間がかかった割に出来はよくありませんが精一杯頑張りますので  
これからも、お叱り・応援メッセージをお願いいたします。

第1章 15ページ 珈琲（前書き）

ついにあの人が登場です!!

「ありがとうございます」

次の日エックスは町に買い物に来ていた。

ひとまず、日常で使うものを中心に買い揃えたのだが

両手と背中には大量の買い物袋があり、

後ろ姿はさながら荷物のオバケが歩いているようにも見えた。

普通そんな人が歩いていたらつい見えてしまうのだが

誰も気にしている人はいなかった。

否、気にする事ができなかったのである。

近隣の国でまたも、戦闘があり難民のようにベルカに皆逃げてきたのだ。

多くの人はオリヴィエの城の近くに集まるのだが

ここアルハザードにもそれなりの人が来るようになったのだ。

理由としては、すぐに聖王の部隊が助けに来てくれると

研究者を中心に噂が広まっているのだ。

「よっこらせつと」

崩れかけた荷物を治すとエックスは買ったばかりの懐中時計を開いた。

「11時前か、カフェとかで、なんか食つかなあ」

時計をしまつと再び大通りを歩き始めるとすぐに  
ごんまりとしたカフェを見つけた。

カラン、カラン

「いらっしやい」

コーヒーのいい匂いが立ち込めている店内から声を掛けたのは、  
40代位の男性マスターだ。

「どっこいせつと」

エックスは荷物を置くとカウンター席に座った。

「で？何にする？」

「そうだな、薄めのコーヒーと軽く食べるものを頼むよ」

「あいよ。全部で1500だ、前払いで頼むよ。」

「ん？ああはいよ」

金を払うとマスターは、優しい笑みを浮かべながら食事の用意を始

めた。

「たばこいいかな？」

「どうぞ」

灰皿を受け取ったエックスはタバコに火を付け、大きく煙を吐き出した。

「先にコーヒーを飲みながら待っててくれ。」

白いコーヒーカップに注がれたコーヒーからは香ばしい香りが立ち込めていた。

一口コーヒーを飲むと店内を見渡した。

>> やっぱ、平日の昼は誰も居ないよな<<

店内は静かだった。

マスターが食事を準備している音。

コーヒーがコポコポと湧いている音。

大きな柱時計のコツコツという秒針の音。

そとの雑踏とは一気に違う雰囲気と本格的なコーヒーの味に微睡んでいると

料理ができたみたいだ。

「おまちどうさま。」

早速エックスは、皿に盛り付けられたサンドイッチを一口頬張るとマスターが話しかけてきた。

「さっきは、変な態度を済まなかったね。」

「ん？いいよあんま気にしないし」

「それは助かる。ここ最近食い逃げが多くて困ってたんだよ」

「ああ、最近難民が多いからな」

「あれ、じゃあお客さんは違うのかい？」

「まあ似たようなもんかな？最近俺も来たばっかだから買出しだよ。」

そういうとサンドイッチとコーヒーを食べ進めていた時にエックスはふと気がついた。

「マスター、この辺でデバイスのいい店知らないか？」

「んゝ俺はデバイスにはあまり詳しくないからなゝ、曲がりなりにも研究者たちが多いから半端なものを売ってる奴はこの辺りには居ないよ。」

「ふうん。それじゃしょうがないか。」

そう言つて全てのサンドイッチを食べたエックスはタバコに火を付け  
食後の一服を楽しんでいた。

もうコーヒ―はコップの中に残っていなかったのだが、

「さっきのお詫びだよ」と言つて注いでくれたコーヒ―を飲んでい  
ると

誰かきたようだ。

カラン、カラン、

「ああ、いらつしゃい。」

振り返ると真っ白な白衣をコートのように着こなした紫の髪をした  
男が  
右手を少し上げ「やつ」と言つとカウンターに座つて「いつもの」  
と頼んでいた。

>> 常連かあ<<

タバコを吸いながらエックスはそんな事を思っていると  
常連さん（仮）と目が合った。

「ん？君は見かけない顔だね？」

「最近こっちに來たばかりでね、今日は買い物途中で寄らせて貰ったのさ。」

そんな会話をしていると、マスターがエックスに出したのとは違うサンドイッチを

出すと常連さん（飯）はパクパクと食べていった。

「ここは珈琲屋なのに、いつもサンドイッチとオレンジジュースしか頼まないんだよ」

エックスに呆れたような顔をしてマスターは同意を得ようとするが、

「私は甘くないコーヒーは飲めん！！（キリ）」

すぐに常連さん（飯）はあまりカッコよくない台詞で決めるが、マスターとエックスは苦笑いしかできなかった。

「そっぴやあんたは確かデバイスの技術者だったよな？」

「まあ本業と云うほどではないがな」

「じゃあこのお客さんにいいデバイスの店を紹介してやってくれな  
いか？」

「珍しい！！マスターが私に頼みごとをするなんて！！ああ・・・  
明日はこの国の最後なのか」



妙に大きく両手を広げながら演劇チックな喋り方をしているあたりかなりノリのいい人らしい。

「ところで君はなんて名だい？（キリ）」

「あつ、ああ、俺はエックス。エックスⅡステイングレイだ。」

若干気後れしながら話すと、常連さん（仮）はブツブツ話しながら考え込んでしまった。

「あ、あの『よし決めたぞ！！今から私の研究所に来なさい！！』って？え？」

そついうと常連さん（仮）はエックスの手をとって店を出ようとするが

エックスは必死で呼び止めた。

「ちょ、ちょ、ちよつと！！荷物を持たせてよ！！」

何とか男の手を振りほどき、急いで荷物を背負いながら常連さん（仮）に名前を聞いた。

「私こそ、このアルハザードにその人あり言われた、ジェイルⅡスカリエッティだ！！」

そうやって決めポーズを取るこの男のテンションに付いていけない  
マスターとエックスでした。

第1章 15ページ 珈琲（後書き）

え？なに？スカリエッツィのテンションが違っちゃって？  
それは未来のスカリエッツィだからいいのです。

第1章 16ページ スカリエッティの研究所（前書き）

スカリエッティはいい人です。

## 第1章 16ページ スカリエッティの研究所

「ようこそ、我が研究所へ!!」

ここはスカリエッティの研究所だ。  
結構な広さの室内なのだが人の気配がしない。

「なあ、ここって結構広いけど研究員とかいないのか？」

「ああ、人を雇うよりも研究にお金を掛けたいのでね」

「そ、そうなんか。そういや、スカさんはどんな研究してるのさ？」

ここに来る途中色々話していたら、自分の名前はあまり好きじゃないらしく

苗字で呼んで欲しいとのことだが、  
言いにくいから『スカさん』と呼ぶことにしたのだ。

「私は『人体補完』について研究しているんだ。」

「人体補完??」

人体補完

先天的・後天的に体の一部を失ってしまった人の体を補完することだ。

例えば、事故で足を失ってしまった人に義足を作るのだが、

この世界で一般的なデバイスを利用することによって  
より自然な義足を作成するのがスカリエッティの研究らしい。

「ところで、君はどんなデバイスが欲しいんだい？」

「いやあ、全くデバイスってもんを知らないから、どんなものがあるのかを教えてくださいませんか？」

「いいだろう。付いてきてくれ。」

そう言つて、研究所の奥にある真つ暗な小部屋に通された。

パチ

「おお！！！」

電気のついた部屋の中には、様々なデバイスが壁や床に所狭しと並べられていた。

「ええつと、どこやったかな？」

ガサゴソと辺りをスカリエッティはひっくり返し、目的のモノを見つけたエックスに赤いビー玉のようなものを手渡した。

「これがデバイスのコアだ。こいつに予め魔術をプログラムして利用するんだ。」

「へー、このビー玉みたいのがねー」

「つまり、尤も重要なのはコアであり、形状というものはあまり意味が無いのだよ」

「じゃあ、何で杖とか本とかナックルみたいな形があるんだよ？」

「魔法はイメージで使うものだ。自分が最も使いやすい形状であることが重要なんだ。」

そういうと、スカリエッティは机の上の部品を腕を使って端に寄せ開いたスペースに、杖と本の形のデバイスを置き説明を続けた。

「これを見てくれ、これを見てどう思う？」

「・・・すごく、デバイスです。」

「そんなことは聞いていないのだが？まあいい。これらは同じコアで動くデバイスなのだが、同じコアである以上処理速度は変わらないはずだな？？」

「そっか。同じ容量で同じ処理速度であれば同じモノができるんだ  
！！」

「正解。だが、実際には機能を削ってでも容量重視にしたり、速度重視にカスタマイズするんだ。」

「奥が深いんだな。」

「私の研究は、この処理速度と容量を利用すれば手足の代わりのデバイスが作れるつと思っっているのだがな、拒絶反応などが出てしまうから、そこを無くすのが目的さ。」

>> 結構いいやつじゃん。 <<

エックスのスカリエッティに対する印象だ。

生まれながらに障害を持った人に代わりとなるものを作ることで日常生活をより良くしようとしているスカリエッティを見ると  
なんだか胸が熱くなってきた。

「あのさ、形状って1つしかとれないの？」

「どついう意味だ？」

「いや、本の形と杖の形の両方を切り替えて使えないかと思ってね」

「できないことはないが、あまりメリットはないな。それこそ形が変わる程度だ。」

「コアを二つ以上積んだらどうなのさ??」

「コアを二つだと??」

エックスの言いたいことはこうだ。



速度重視にしろ、容量重視にしろコアを複数のコアを載せて処理を割り振れば高い性能が出るというものだ。

「面白い発想だが、それではただ二つのデバイスが出来るだけだ。」

「じゃあその管理用のデバイスを作って処理を割り振ればいいんじゃないか？」

そういうと、口をパクパクさせながら驚いた顔をしているスカリエツティがいた。

「あの〜スカさん？」

「君は天才だ!!」

そう言うと、壁に直接何か数式や図式などを書き始めた。しばらく、考え込んだり、閃いたりを繰り返しながら壁に書き、それでも足りなくなると、なんと床や着ていた白衣に書き始めたのだ。

結構な時間がたった後にエックスの両肩を掴み、「やったぞ!!」と叫びながらエックスを前後に揺すりだした。

「やったぞ!! できるぞ!! これならデバイスの問題が一気に解決するぞ!!」

「よくわからんが、俺のデバイスはどうなったのさ？」

「いくらでも、私が作ってやるぞ!!」

よく分からないが、エックスのデバイスをスカリエッティが作ってくれることになった。

## 第1章 16ページ スカリエッティの研究所（後書き）

ゴメンなさい！！

うまく話がまとまりませんでした。

でも、今のCPUみたいにマルチコア技術を使うとだけ考えてください。

## 第1章 17ページ マイデバイス（前書き）

エックスのデバイスが完成します。

## 第1章 17ページ マイデバイス

あれから、エックスとスカリエッティは試作品のデバイスを深夜遅くまで作成していた。

「だから、もっと専用設計にすれば速度が向上するだろ？」

「いやいや、何言ってるのさ！？汎用性を重視しないと意味が無いだろ？」

「しかしだな・・・」

先程から熱く議論している内容といえば、カスタイズの幅を残して汎用性を取るか

専用設計にすることでより高速な動作を目指すのかということだ。

「いつそのこと、それすらも分割しちまうか？」

「いいね、そういうことなら、もっと処理速度を向上できるな。」

これを研究者の会話ととるか、オタクの会話ととるかは人それぞれだろう。

「数時間後」

「できたー!!!」

東の空がうつすら白み始めた頃、エックスとスカリエッティの渾身（？）のデバイスが出来上がった。

「やべー、もう朝じゃん!? 早く帰らないと」

「これは、君のデバイスだ持っていきなさい・・・」

フラフラした足取りで荷物を背負い始めたエックスに、机の上に寝転びながら青い宝石の付いたネックレスを手渡すとスカリエッティは、すぐに寝落ちしてしまった。

「ああ、ありがとって、聞いちゃいねえな・・・」

「そいじゃまた」このエックスの挨拶を欠伸で返したスカリエッティでした。

く 木山邸く

「ただいまあゝ」

家の中は薄暗くシーンとした静けさが包んでいた。  
できるだけ物音をたてないように自分の部屋に向かう。  
こついったときは、いつもは気にならない音が非常に目立つ。

服の擦れる音。

呼吸の音。

心臓の音。

自分の部屋に戻り荷物を降ろした。  
早速上着とズボンを脱ぎ、ベットに入った。

「ふあああああ．．．．」

大きな欠伸をするとすぐに眠りに落ちるはずであった。

布団の中が温かい。  
それだけでなく、何かが布団の中にある為かなり狭い。

「んん？」

そう言って手を伸ばすと柔らかいものに手が触れた。

おそろおそろ布団をめくると・・・

子供たちが寝ていた。

布団を静かに掛け、ズボンを履くと部屋の外に出た。

>> 何で子供たちが俺のベットに入るんだか・・・<<

そんなことを考えながらエックスは研究室に向かった。

やはり木山も居ないらしく、安心したエックスは、時計を見た。

>> 5時か。しょうがないコーヒーでも飲みながら朝飯を待つか。  
<<



コーヒーを片手にベランダに出ると、壁に寄り掛かりながら座り込みタバコに火を付けた。

「ふああああ．．．ねみい．．．」

『おはようございます。』

いきなり、若い女性の声に挨拶をされた為、周囲を見渡すが誰も居ない。

『マスター。こちらです。』

声は、エックスの胸の辺りからしていた。  
はっ、と気づいたエックスは急いで首にかけられたデバイスを取り出した。

『やっと気付いてくれましたね。』

「おお、しゃべるんだ！！このデバイス。」

『通常のデバイスであつても日常会話程度であれば問題なくできます。』

「なるほどね。まあタベ初めてお前を作ったからまだまだデバイスについてよく分からないんだ。」

『左様ですか。私のデータベースにも何も登録されておりません。』

「お互いにこれから成長していますか。」

『了解。その前に、オーナー認証を行ってください。』

「オーナー認証??」

『はい。2、3の質問にお答え頂ければすぐに終了いたします。』

「わかった。じゃあ初めてくれ。」

『了解。マスターのお名前をフルネームでお願いします。』

「エックスⅡステイングレイだ。」

『了解。オーナー名、エックスⅡステイングレイで登録いたします。』

「はいはい、次はなんだ？」

『私のデバイスネームを登録してください。』

「そうだなあ・・・『Proxy』ってのはどうだ？」

『Proxy>>代行者<<ですね。認識しました。』

「ところで、お前のスペックとか能力ってどんなのだ？」

『イエス、マスター。私の能力は他のデバイスなどの力を代わりに使うことです。』

## Proxyの能力説明

処理速度は早いが魔法の登録数が少ないデバイスAと  
処理速度は遅いが魔法の登録数が多いデバイスBがあったとき  
デバイスAとBの能力を組み替えて自分の力のごとく使用できるの  
だ。

簡単にいうと、走行性能が高いがスタイルが良くない車と  
スタイルは良いが走行性能が低い車があったとき、両方のいいところ  
取りをして

走行性能が高くスタイルの良い車として動作できるデバイスだ。

「それって結構すごくないか？」

『この能力を組み込んだのは他ならぬマスターです。それに私は他の  
デバイスがなければただのデバイスよりも性能は低いです。』

「一長一短か・・・なにせよこれからよろしくな。」

『よろしくお願い致します。』

## 第1章 17ページ マイデバイス（後書き）

どーもJackです。

アップが遅れて申し訳ありません。

当初考えていたデバイスが他の作者様のデバイスの二番煎じになってしまうため、

このような能力にしました。

物語の再構築に思った以上に時間がかかってしまいました。

次回からはフラグ回収編になります。

## 第1章 18ページ デバイスの能力（前書き）

proxyの形はSTSのスバルのデバイス待機形態を想像して下さい。

ちなみに色はマツハキヤリバーより濃い青色です。

## 第1章 18ページ デバイスの能力

ドコッ

「っんあ!？」

「いつまで寝ているんだ。とつとと起きろ。」

「あゝ、寝ちまったんか・・・今何時？」

「もう10時だ」

「もうそんな時間かゝ」

「全く朝帰りとは良い身分だな」

「いやゝデバイス作りが盛り上がっちゃってね」

「子供たちがお前が帰るまで起きているって言うってたんだぞ」

「だから俺のベッドの中にいたのか」

眠気覚ましにコーヒーを飲もうと立ち上がると、立ち眩み木山にもたれ掛かった。

「ちょ、ちょっと!！」

「いや、ちょっと立ち眩みで」

「あー!!木山せんせとエックスせんせが抱き合ってる!!」

エックスを探しにきた数人の子供たちが丁度目撃したのだ。

「スッ、スマン!!」

「わく抱き合ってるなんて、エッチだ」

「こら、大人を誂うんじゃない!!」

木山は、頬をピンク色に染めながら子供たちを追いかけていった。  
まった。

「・・・ま、コーヒーでも飲むか」

コーヒーを飲みながら、自分の部屋に戻ると机の上に一枚の封筒が置かれていた。

「オ・・・リヴィ・・・エ、オリヴィエさんからか。」

封筒の中の便箋には、最近の街の様子がどうか色々書かれている



がよつするに、  
たまには遊びに来いという内容だった。

「そついや、なんだかんだで全然会いに行つてなかつたな、よし、  
今日遊びに行くか」

木山に一声かけてから出かけようと思い、木山の部屋をノックする  
が反応がない

「おゝい、木山先生」

「留守だ」

「いやいや、いるじゃないか、ちよつとオリヴィエの城まで出かけ  
てくるよ」

「行つてくれればいいだろ」

>>何を怒っているんだ？<<  
そう思いつつ、エックスはオリヴィエの城に向かつたのであつた。

くオリヴィエの城く

城の入り口で、デバイスを預けると応接間に通された。

「おまたせしました。」

「オリヴィエさん、久しぶり。」

「ええ、お久しぶりです。最近あまり来てくれないから心配してましたよ?」

「いやあ、訓練がなかなか忙しくてね」

「充実しているみたいですね。」

「あはは、まあなんかこうかでやってるよ。」

それから、最近のアルハザードでの生活などを話したのだが、どうやら城の近くでも難民が多くなり、一部では治安が悪くなり始めてきたらしいのだ。

「んゝそろそろ、アルハザードの自警団を作るべきじゃないか?」

「そうですね．．．そろそろ本格的に動き出さないとならないですね」

「それに、難民が増えてきたのなら、孤児院とかを充実させていかないか?」

「わかりました。明日にでも議会で検討してみます。」

そんな会話をしていると結構な時間が経ってしまった。

「ちょっと帰りに買い物をしたいから、そろそろ帰るよ。」

「今日はわざわざ来てくれてありがとうございます。また時間があるときに寄って下さい。」

城を出ると、木山のためにおみやげを買おうと市場でいろいろな物を見ていたら

人ごみの中で通行人と肩がぶつかった。

ただ、その相手が、いかにもなチンピラだった。  
ヤバイと感じたエックスはすぐに謝った。

「あ “あ” ！？それだけか？この俺様の肩にぶつかってそれだけか  
！？」

そついうと、服の肩を掴みながら裏路地に連れていかれた。  
いや、まじでヤバイよねこれ。

胸ぐら掴まれてガクガク揺さぶられながら、ドスの利いた声で怒鳴られると  
まじで怖いんですわ。

「おい、この四角い宝石は、なんだ？」

チンピラは『Proxy』を掴んでいた。

「自分のデバイスです．．．すみません。」

「っはん。まあ売れば金になるか。おい早く寄こせよ。」

「いや、それは勘弁してくださいよ」

「っるせ！！早くこのガラクタを寄こせつつてんだろ！！」

ブツチィ

チンピラの左手首を掴むと思いつ切り握った。

「イタタタ、てめ、離しやがれ！！」

グググッ

皿に握る力を強めるとチンピラは両膝を着きながら、うめいていた。

バキッ

チンピラの左手首が折れた。

「この、死ね。」

チンピラは折れた左手を庇いながら右手で殴りかかってきた。

>>スネークに比べれば遅い!!<<

チンピラの右手と胸ぐらを掴み思いつ切り投げた。  
所謂一本背負いだ。

ガッシャーン

ゴミ箱に頭から突っ込んだチンピラは、這い蹲るように逃げていった。

「怖かった」

緊張が溶けるとその場にへたり込んだ。

「ん？あれは・・・」

男が落としたらしい、赤いビー玉のようなデバイスを拾い上げた。

『マスター。それは、一般的な杖型のデバイスですね。』

「このままここに置いておくのは危ないからどうしようか？」

『私にいい考えがあります。それを私の前に掲げてください。』

胸の前に拾ったデバイスを掲げると、Proxyが光り始めた。それと同時に拾ったデバイスが空中で部品単位でバラバラになり、それらがProxyに吸収されると同時に光が消えた。

「なにが起こったんだ？」

『はい。先程のデバイスを構成をバラバラにして私の中に格納しました。』

「え？どゆこと？」

『はい。先程のデバイスをバラバラにして格納しておき、必要なきに必要な構成で、デバイスを構築できるようにいたしました。』

「じゃあ、さっきのデバイスの形態になれるの？」

『もちろんです。』

そういうと、Proxyは杖の形態に変化し、エックスの手の中にある。

「おお、すごい。」

『完全に作成できてしまえば、独立させることも可能ですので、複数のデバイスを同時に使用可能です。』

「でも、お前の中に格納できる限界量とかあるんじゃないか？」

『そこはご安心下さい。第2次元平面領域に専用スペースが作成済みです。』

「?????」

『つまり、上限値はほぼ無限だとお考えください。』

「なるほどね。よく分かったよ。」

『私の現在の処理速度などを向上させるためにもできるだけ多くのデバイスを吸収しなければなりません』

「さっきみたいにバラバラにするなら、ジャンク品とかでもいいのか?」

『問題ありません。』

木山のおみやげを買いながら、安いジャンク品を買い占めていった。

## 第1章 18ページ デバイスの能力（後書き）

更新遅れて申し訳ありません！！

仕事が忙しかったんです。

軽く夏バテになってたんです。

できるだけ早めのアップをしようと思いますので感想を下さい。



## 第1章 19ページ プレゼント（前書き）

PVアクセス5万突破！！

ユニークアクセス8千突破！！

ありがとうございます。

## 第1章 19ページ プレゼント

「ただいま」

まだ、夕日が辛うじて出ている夕暮れ時に

エックスは先程市場で買ってきた紙袋を両手に持って返ってきた。

「「エックスせんせいお帰りなさい。」」

「ほい、ただいま。これお土産だよ」

「「やった〜!!」」

お土産のシュークリームを夕食後に食べるように言っと

エックスは自室に戻りラフな格好に着替えると夕食の準備に向かった。

「ほら、お皿持って行って」

「コラ、つまみ食いすんな!!」

「ほらほら、ケンカしないの!？」

まだ、小さい子は何かとお手伝いをしようとするんだが

まだまだ危なっかしい足取りなので食器とか割れやすいものは一枚一枚持たせているんだが「もうおねえさんなんだから」と

胸を張っている姿はとてもいいなあと思う。

大家族って大変だとは思っけど、大家族にしか分からない楽しみが

あるんだ。

「あれ、木山先生は？」

「エヘヘ、もうすぐ来るよ!!」

「????まあいいや、」

すると、入り口で木山が子供たちがやいやい騒いでいた

「おい、どうした!？」

「来るな!!」

「何があつたんだ!!」

「いや・・・そのたいした事じゃないんだが・・・」

「????」

しばらく、入り口でもじもじしていたが、意を決して入ってきた  
木山の姿に思わず息を飲んだ。

「・・・どうかな？」

「髪切つたんだな。似合っているぞ。でもどうしていきなり髪切つ  
たんだ？」

「いやな、その、子供たちが短いほうが、その・・・」

「ん？」

「かつ、カワイイっていうもんだから・・・（モジモジ）」

子供たちから「カワイイ」と言われ照れているようだ。

>>このタイミングで渡すべきだなく<

「その、春生にプレゼントがあるんだが・・・」

「これ・・・は？」

「春生に似合うかなっと思って」

そういつて、エックスはブレスレットを木山に付けた。

「ありがとう／＼／＼／」

「どういたしまして。さぁみんな飯にするぞ!!」

「「はぁい!!」」「」

く夕食後く

エックスの部屋のベランダでコーヒーを飲みながら嬉しそうにブレスレットを眺めている木山がいた。

「そんなに嬉しかったか？」

「いや。まあ別に・・・そういうわけでは／＼／」

「俺さ、今までの事を覚えていないんだけど、今が一番楽しいし幸せだなんて思うよ。ほんとありがとう。」

チュ

「!!!!!!」

「ブレスレットのお礼だ」

そう言うとき真っ赤な顔をしながら足早に部屋から出て行ってしまった。

## 第1章 19ページ プレゼント（後書き）

どーもJackです。

アップ遅れてホントすいません!!!!!!

最近会社の夏祭りの幹事になってしまい  
サービス残業の毎日です。

皆様からのメッセージを頂ければ、明日への力になりますので、  
ぜひお願いします!!!!!!

## 第1章 20ページ サバイバル（前書き）

訓練に緊急参加です。

## 第1章 20ページ サバイバル

「コラア起きろ!!」

「は?え?ちよつと!!」

木山との幸せな時間を噛み締めながら温かい布団で寝ていたらいきなり、叩き起された。

「いいから起きろ!!」

「まじでなんなの!!?ええええ!!」

寝ぼけ眼で、服を無理やり着せられ、無理やりどこかに連れていかれた。

inどこかの森

「現時刻より、サバイバル訓練を開始する!!」

「「「サー、イエッサー」」」

「は?どゆこと?スネークじゃん!!助かった。これってどういう事なの?」

「陛下から聞いておらんのか?今からアルハザードの代表者に訓練を行ない、自警団を結成するための訓練を行う。」

「まじで?」

「まじだ。さあ訓練を開始するぞ。」

そついうと、すでに訓練場の横に建てられたテントで装備品を整え

ていた。

エックスも、3日分の食料と武器や医薬品、寝袋といった装備品をバックパックに詰めたのだがその重量約20kg！それでも、スネークに言わせれば最低限らしい・・・

「装備を整えたら集合しろ！！」

「「サー、イエッサー！！」」

「訓練内容を説明する。これより7日間以内に山の向こうにある我が軍の駐屯地に到着すること。ただし、装備品の途中廃棄は一切認めない。以上！！」

「あ、あのすいません・・・」

「なんだ？」

「あの、食料が3日分しか無いのですが？」

「どうにかしろ。」

「え？つでも・・・」

「ど・う・に・か・し・ろ。」

「サー、イエッサー・・・」

「時間がない、以上！！展開！！」

そういうと、メンバは一斉に山に入って行った。  
エックスも続いて行った。

Proxyに地図情報を読み込ませ、  
現在の場所とゴールへのルートを検討している。

「やはり、最短ルートがいいかな？」

『ですが、最短ルートは、とても険しいルートになります。』

「じゃあこっちのルートは？」



『あまり難関箇所はありませんが、ほぼ休みなしで移動してギリギリ到着できるほどの時間がかかります。』

「やはり頂上までいかないためか・・・」

『それが一番かと思えます。』

「わかった。ナビゲートを頼むぞ。」

『了解』

一番移動距離が短くあまり過酷な箇所のないルートは、頂上を経由するしか無いようだ

## （第一日目）

登り始めてまだ、ほんの2〜3時間程度なのだが非常に暑いProxyに調べさせたら、現在気温41、湿度70%！！パンツの中まで汗で蒸れるほどの気温と湿度だ。

ぬかるんだ地面は思ってた以上に体力を削り取られる。

「ぶはっ！！」

『水の摂取が予想よりも早いです。このままでは給水ポイントまで持ちません。』

「そうは言っても暑くてつらいんだよ。そうだ、荷物をデバイスみたいに格納できないか？」

『可能ですが、先程スネーク様より武器やナビゲートとしての最低限の動作以外は禁止との連絡が来ました。』

「まじかよ！？」

しばらく進むと岩石地帯に入った。

足元には小石が散らばるようなところであり、非常に歩きにくい

「ちょっと休憩」

そういうと手頃な大きさの岩の上に座り食事を取ろうと荷物を降ろした

「ふう」

やはりタバコだ。

こんな時くらいやめればいいのに・・・

「なんかいったか？」

『？？いえ私は何も』

さて、問題はこの後だ。

この岩石地帯を抜けると急激に気温が下がるだけでなく、  
ほぼ垂直に切り立った岩肌を登らないとならないのだ。

「もう少し進んだところで、少し早いがテントを立てるか」

プルルル、プルルル

「ハイ、エックスです。」

『木山だが、スネークに訓練に連れて行つたと聞いてな』

「叩き起されたと思ったたらいきなり山に登れだからな、勘弁して欲しいよ」

『まあがんばるんだな。』

「ありがとう」

>>さて、もうひと踏ん張りいきますか！！<<  
立ち上がるうとした時だ、誰かが近づいてきた

ゾク！！！！

「！！！！！！」

殺される！！エックスは咄嗟にそう思った。

油汗が止まらない。

今自分が背にしている岩の丁度反対側に何かいる。

ヤバイ、絶対にヤバイ。

息をするのもキツイ。

後ろの岩の反対側から見られている。

ジーッと見られている。

やがて、ソレは興味がなくなったようにエックスから離れて行くのを感じた。

時間にすればホンの数秒かもしれないが  
エックスにとっては数時間に及ぶ拷問のような時間だった。

「ぷふあ、はあはあ。いったいなんだったんだ。」  
『どうしたのですか？』

「今、後ろに何かいたろ!？」

『センサーには、何も反応がありませんでした。』

「え？」

『熱・電磁波・音波は常にチェックしていますが一切反応はありませんでした。』

「じゃあいつたいなんだったんだ。あれは。」

『センサーの精度と種類を変えてみますが、発見できる可能性は低いです。』

この訓練は荒れそうだな・・・

## 第1章 20ページ サバイバル（後書き）

えーやつと夏祭りが終わりました。  
こんどこそペースを上げたいと思います。

第1章 21ページ ロッククライミング（前書き）

安全が確保されているならぜひやりたいスポーツです。

## 第1章 21ページ ロッククライミング

〈第二日目〉

「もう朝か．．．」

巨大な岩石が重なってできた隙間からのそのそはい出てくるとエックスは昇ったばかりの朝日を浴びた。

「んんん！！！！」

パキッ、カコッ

伸びをすると体中の関節が小気味よい音を立てた。

『おはようございます。マスター』

「ああProxy、おはよう。って寝てはいないんだがな．．．」

昨日は謎の生物に殺されると感じたため予想以上に疲れてしまい暗くなる前に休んだのだが、いつ現れるか分からない恐怖に怯え一睡もできなかったのだ。

「ああゝねむいゝ」

『本日は昨日の遅れを取り戻すためにも、かなりハイペースに進む必要があります』

「まあそうだな、じゃあ今日もナビゲートを頼むな」

『了解です。』

小石転がる岩石をエックスは進み始めた。

「数時間後」

「なんじゃコリヤ~~~~!!!!」

エックスの前には巨大な岩の壁があった。  
ただ、問題なのは壁の角度だ。  
90度を超え、100度以上はあるのだ。

「なあ、Proxy」

「なんでしょうか？」

「この壁は絶対に登らないとダメかな？」

「ただいま周辺を再スキャンしましたが、このような場所が左右に  
30kmほど広がっています。」

「なんでこんな意地悪な地形なんだろうか・・・orz」

「以前ここには川があったためこのように削れたのだと予想されま  
す。」

「はあ、しょうがない。登るとするか・・・」

エックスはバックパックを下ろすと、中からロープを取り出し一方  
の端をバックに固く結び、もう片方を腰のベルトに固く結んだ。

「Proxy、やばかったら言うからそれまでは、最低限のサポ  
ートに抑えてくれ」

「了解です。」

「よっしゃ!! っつかあ!!」

パッシー!!

といい音をさせて両頬を叩いて気負いを入れると岩壁の前に立ち目



を閉じた。

>> 体の中で魔力をゆっくりと回転させながら隅々まで行き渡らせるイメージで・・・<<

エックスの中で魔力が動き始めた。

まだまだ、未熟なため綺麗に回転しない。

早くなりすぎたり遅すぎたり、向きがバラバラになってしまったり上手く安定しないが、Proxyが微調整程度で力を制御したため少しづつであるが綺麗な回転になり始めた。

ゆっくりと目を開け、岩壁の突起に手をかけると岩壁をゆっくりと登り始めた。

「つぐ、思ったとおりキツイな」

魔力を一定の力で体の中で回しつつ、Proxyから言われた次に登る突起を探しているは非常に難しく魔力をどんどん消費していつているのだ。

2時間ほど経ったであろうか？

まだ、半分ほどの高さなのだが、魔力は予想以上に少なくなり量としては、1/3程度しか残っていなかったのだ。

「さて、Proxy。このまま上まで登りきれると思うか。」

「今までの方法では、99.89%不可能です。」

「でも、降りることも止まることもできないんだよな・・・何かい

「い案はないか？」

『成功確率は低いですが、ございます。』

「聞かせてくれ」

『まず、魔力を足に集中させた後に一気に反発させることで、上に飛び上がります。』

滞空中に私の能力で魔力ナイフを作成するのでそれを踏み刺しながら一気に駆け上がってください。』

「最後の踏み刺しながらするのは、一瞬でも失敗したらアウトだな。」

「

『現状考えられる案はこれ位しかありません。』

「しょうがないが、タイミングは上手くあわせてくれ」

『了解です。』

「つと、その前に・・・」

右手だけで体を支えながら、左手でスボンのポケットに手を入れてタバコを一本取り出し口に加えた。

「よつと、」

左右の手を入れ替え、今度は左手一本で体を支えながら、ズボンから使い古した銀色のジッポを取り出し火を付けた。

カラン、シュツ、カチ

ワン・ツー・スリーのタイミングで火を着け終わったあとのジッポの蓋を閉じ

ポケットにしまい、両手で体を支えると胸いっぱい煙を吸い込んだ。

「ふう〜。うめ〜」

時刻はお昼過ぎくらいだ。

これが終わったらすぐに飯にしよう。

それから、喉も乾いたな、給水ポイントは

確かしばらく行ったところだからバックパックの中の水は全部飲んでも良いよな。

「どちらにせよ・・・」

短くなったタバコがゆっくりと回転しながら落ちていく

「いくしか・・・」

2、3mほど落ちたら、灰も残さず一気に燃え上がった。

「ないっしょ!!」

思いつ切り腕の力だけで状態を起こし

そのままの勢いを利用し体を「く」の時にまげる。

そして、壁面に思いつ切り足の裏を付け、足を中心に魔力を貯めた。

現在の体制は所謂蛙飛びのポーズなのだが、飛び出す方向が違うのだ。

「ふんっ、んー!!」

齒を思いつきり食いしばり両足を蹴り出した。  
ロケットのように飛び上がったエックスはグングン上空に向かっていく。

「っほ!!」

上昇の勢いそのままに、右足を前に突き出しそれと同時に、足の裏に10cm程の魔力でできたナイフが作られた。

それを地面に食い込ませたと同時に蹴り飛ばす。

左足でも同様の事を行ない、次に右足というように左右交互に行いながら壁を駆け上がっていく。

パキ

ゴールまでほん数mの時だった。  
ナイフを生成する魔力が尽きたのだ。

「っほ!!」

ギリギリ、両手で壁面を掴めたが状況はかなりまずい。  
先程までの>>壁面ダッシュ<<の影響で魔力がほとんど残っていないのだ。  
もちろん身体強化など出来るはずもなく、現在ただの筋力だけで体

を支えているのだ。

「ッグおおおおー！！！」

ここまで来るともう気合だけで腕を動かし続けた。

そして、

「はあ、はあ、やったぞー！！！」

なんとか頂上まで無事つくことができたのだ。

地面に大の字になって寝転びながら、ありったけの声で叫んだ。

そのまま、1時間ほど経ったであろうか？

体が重いかわずかに動く様になったので、腰につけられたロープを引つ張りながら

下にあるバックパックを引き上げ始めた。

「っち、重いな」

すこしづつ引き上げていたいた時である。

ゾク!!

再びあの、殺意の塊のような気配がしてきたのである。  
殺されるではなく、殺されたと勘違いするほどの殺意と恐怖がエッ  
クスを包んだ。

しかし、ここで、手を離せばバックパックは真つ逆さまに落ちるだ  
けでなく

中の荷物は辺りに飛び散ってしまうだろう。

そうすれば、回収の為にこの壁を降りて、再び登らなければならない

「ならば、一気にひきあげるまでよ!!」

バックパックが近づいてくると同時に『アイツ』の気配が近づいて  
きたのだ。

「Proxy!! 周辺スキャン開始!!」

『了解。全スキャンシステム開始。周辺スキャンニング精度最大。』

残り距離がだいぶ近づいてきた、エックスの脂汗もすごい勢いで流れ始める。

「Proxy!!」

『スキャンに反応なし。さらにスキャン開始。』

もう後、ほんの数mでバックが回収可能になる。  
それと同時に『アイツ』と対面することにもなる。

「Proxy!!」

『反応ありません。』

「ちくしょう、スキャン中止。シールド全開だ!!」

『了解。シールド展開。』

ブウンと電子音がするとエックスの周囲をシールドが包みこむ。

「ラストお!!」

最後にバックパックを一気に引き上げた。

空中をゆっくり舞っているバックパックとそれにつながれたロープ。  
シールドの展開している鈍い電子音。

頬を伝う一筋の汗。

エックスの前に現れたのは・・・

第1章 21ページ ロッククライミング（後書き）

さて、恐怖の対象の>>アイツ<<とはいったいなんなのでしょう  
か？

答えは、次回投稿までお待ち下さい。



## 第1章 22ページ 恐怖のアイツ（前書き）

最初に言っておきますが、今回上手くまとめきれませんでした。  
なんじゃこりゃ？と思われるかもしれませんがご容赦下さい。

## 第1章 22ページ 恐怖のアイツ

ドッサー!!

ロープに繋がれたバックパックがゆっくりと地面に落ちた。

ジリジリと肌を焦がすような太陽。

汗が頬を伝い地面にポツポツとシミを作っている。

「・・・誰も、いない？」

ついさっきまで、バックパックと一緒に上に上がってきたはずなのに目の前には誰もいない。

>>>ぐくり<<<

見えないだけで気配というか殺意は辺りを包んでいる。  
突然薄いガラスの割れる音がした。

「!!!!!!」

『シールドが破壊されました』

「え？」

その時であった、目の前に黒い人影が現れた。

>> 俺の真後ろに誰かが立っている!?!<<

周りには体を隠すような場所は一切ない。

目の前の崖からエックスに気付かれずに後ろに回り込むのは不可能だ。

「ンッフフ．．．そう怖がるな」

「あつ．．．ああ．．．」

若い男の優しい声だった。

すべてを包みこまれるような感覚に襲われるほどの安心感を与えてくれる。

「どうした？声も出ないほどに怖いのか？ん？」

「つかはあ．．．はっ、はあ」

「多少は喋れるようになったようだな。」

「あんた、一体何者なのさ？」

「俺か？俺は『お前』だ」

「は？」

「正確にはお前が今まで、見ないようにしてきたもの。捨ててきたものの全てだ。」

「俺自身．．．」

ゆっくりとエックスの正面に回りこんできた>>アイツ<<の顔を見た。

>> 俺がいる!?!<<

まるで鏡を見ているように目の前にはエックスと姿形が全く同じ人間がいた。

「その顔を見る限りよく理解出来ていない顔だな」

「ま、まあ」

「簡単に言つとお前の過去と影の部分だと考える。」

「はあ．．．」

「人によつて恐怖の対象は違う。それは生きてきた経験が違うからだ。」

日本人に銃を突きつけても「アブない」程度しか考えないが、アメリカ人なら「死ぬかもしれない恐怖」を味わう。

「人ごみが怖い人」や「一人になるのが怖い人」など人の経験や記憶によつて恐怖の対象は変わる。

自分が最も怖がるのは自分自身が最も知っているというのだ。

「影の部分は自分の中の破壊衝動だと考える。」

「破壊衝動？」

「殺したい奴がいただろ？盗んででも欲しいと思ったことがあっただろ？」

「できることなら犯してやりたい女とかいただろ？それら負の存在、それらを1つにしたのが俺であり、お前なのだ。」

「自分が一番怖いっていうことか？」

「ニヤリと笑つと一瞬にして、>>アイツ<<が見えなくなった。」

「清濁併せ吞め。俺もお前の1つの存在だ。俺はお前の全てであり、

お前もまた俺の全てだ・・・」

最後の方は風に消えかかっていたが確かにそう言っていた。

## 第1章 22ページ 恐怖のアイツ（後書き）

ユニークアクセスが1万超え！！

PVアクセス6万5千超え！！

記念のアップなのにこんな内容で本当にすいません・・・  
一番怖いことは自分自身がよく知っていると思って頂ければ  
よろしいかと・・・

## 第1章 23ページ 最終訓練

あれから4日が経つが、>>アイツ<<は現れなくなった。

>>アイツ<<と言っても、もう一人の俺なのだが分かりにくいので  
>>アイツ<<と呼ぶことにする。

訓練の方は、何だかんだで順調に進んで行き、あと少しで目的地の  
駐屯地だ。

食料？

ああそれならウサギや蛇を捕まえて食べたよ。

蛇は魔力で火を起こして燻製にしたよ。

なんというか、樹の皮のような味がしたよ。

樹の皮自体食ったことが無いが、そんな味というか風味がしたよ。

そんなことをしながら最終日前夜の6日目の夜から始まります。

パチパチ

焚き火をしながらエックスは考えていた。

この訓練を通して如何に自分が無力かと考えていた。

「なあ、Proxy」

『なんでしょう？マスター』

「まあなんというかな・・・力が欲しいと思ったんだ。」

『力ですか？』

「ああ、所詮人間で力が強いと言ったって、素手で猛獣に勝てるわけではない。」

魔力がいくら多くたって使い方を知らなければ何の意味もない。」

『・・・』

「もっと力が欲しい。子供たちや木山とかスカリエッティとか守りたい奴を守るだけの力が欲しい。」

『マスターと私ならきつとできます。』

「そうだな・・・ありがとう。さあ明日が最終日だもう休みよ」

『おやすみなさい。』

「おやすみ」

（訓練最終日）

「あれが、目的地の駐屯地か？」

『はい、ここからならおおよそ4時間程度で到着できるかと』

「よし！！じゃあ行くぞ！！」

『了解です。』

ここからは草原のような土地をひたすら下るだけだ。

ラストスパート！！とまではいかないが、大分疲労の濃い体を動かして

山を下り始めた。



しばらく進むと校庭のように硬い地面の平坦な場所に出た。

「スネーク!!」

腕を組みながら仁王立ちでスネークが一人立っていた。

「お前が最後だぞ」

「まじで!? 他の奴らつてもう着いてんの?」

「初日には着いていたぞ」

「え!? 初日!!」

どうやらほとんどの訓練生たちは、飛行魔法が使えたらしくすぐに到着したのだ。

「マジかよ。俺も飛行魔法覚えとくんだった...orz」

「落ち込んでいる暇はないぞ。これから最終試験が待ってるんだからな」

「え? 最終試験で何なのさ?」

「最終試験は、こいつと戦ってもらう」

ズン!!ズン!!

地響きと共に巨大ロボットが現れた!!

ただ、足が人間の足のような筋肉質な形をしており、上半身には腕と首がなくちょうど胴体のような部分しかないロボットだった。

「何これ？」

「我軍が創りだした兵器、メタルギア『月光』だ。コイツを倒してゴールしろ」

「は？」

「時間は、そうだな。日没までに駐屯地に来ることだ。」

「え？ちよつとー!!」

「ああちなみに既に到着した奴らは全員月光にやられて今は入院しているがな、まあがんばれ」

「ぶつ!!」

エックスの反応を無視して一方的に説明するとスネークはバイクに跨り颯爽と駐屯地に走っていった。

「これを倒すのかよ・・・」

モー！！

突然牛のような鳴き声をあげ、月光が襲ってきた。

「うあつと。やるしかないのね。」

『マスター』

「分かっている。一先ず身体強化して、距離を取るぞ」  
『了解』

エックスはここ2、3日で扱いに慣れた身体強化魔法を行ない、全力で走り始めた。

ズン！！ズン！！

月光もエックスを追いかけられるため走り始めたのだが、尋常な無いほど早い！！身体強化を行っているエックスと同じ位の速さで追いかけてくるのだ。

「っち！！っそら！！」

走りながら背負っていたバックパックを横に投げ捨て、身軽になったエックスは全力で走り続けた。

少しづつ月光との距離が開き始め、このまま身を隠せるところまで逃げようとしたらいきなりマシンガンをぶっぱなしてきた！！

『シールド展開』

Proxyの展開したシールドに弾かれてエックスに弾が当たることは無いが、弾痕でボコボコになった地面と、辺り一面を覆う砂埃でうまく走れなくなった。

ヒュッポ

間の抜けたような音がした直後、エックスの後ろで地面が爆発した。

「ぐっ!!」

爆発そのものは防げたが、爆風で前方に吹き飛ばされた。

「殺す気かよ!!」

『マスター。反撃の準備を』

「よっしゃ!!それなら、砲撃杖!!」

『了解。』

そういうと、エックスの手には、

ライフルをベースとした砲撃に特化した杖が握られた。

月光がこちらに近づいてくる前に立ち、トリガーを引き魔力弾を連射した。

だが、月光の目の前ではじかれた。

発射した魔力弾は全て弾かれるだけでなく、月光の速度は一切変わらずエックスに近づいてきた。

「やば!!」

月光の右足がちょうどサッカー選手のように振り下ろされるとエックスのシールドを突き破り、そのままの勢いでエックスを蹴り飛ばした。

数十メートル吹き飛ばされ、地面にバウンドしながらエックスは倒れた。

「ゴホゴホ!!」

『マスター!!』

おそらく、蹴られた衝撃で内蔵を痛めたのだろうか、コブシ大の血の塊を吐き出した。身体強化していなかったら確実に死んでいるほどの力だ。

「Proxy!! 魔力刀!!」

『了解』

一振りの魔力でできた刀がエックスの右手に握られた。それを支えにしながらエックスは立ち上がった。

「ゴホゴホ」

先程よりも大量の血を吐き出した。早急に手当をしなければ、危険な状態だが、身体強化魔力で無理やり体を動かし立ち上がった。

「Proxy現状の分析を」

『了解。月光の蹴りを再び受ければマスターの体が持ちません。また、遠距離からの攻撃ではシールドに阻まれて無効化されてしまいます。』

「打つ手なし．．か」

『一つだけ方法があります。』

「聞こう」

『月光をハッキングするのです。』

「可能なのか？」

『不明です。ですが、現状考えられる唯一の選択肢かと』

「確かに、あんなだけでかけりや近接戦もかなり厳しいな」

『但し問題がありまして、月光に30秒ほど触れていないとハッキングは不可能です。』

「30秒か．．」

『それは、私の全システムをハッキングに費やした場合の希望的観測です。実際の時間は不明な上、その最中はマスターの補助は一切できません。』

モーーーーー！！

ズン！！ズン！！ズン！！

「考えている時間はなさそうだ。その作戦でいくぞ」  
『了解です。』

エックスは魔力刀を正面に構えながら魔力を込めた。

「うおりゃー！！」

月光に向かい走りだした。

月光はマシンガンとロケットランチャーを打ってきた。  
マシンガンはシールドで防ぎ、

ロケットランチャーは着弾ギリギリでジャンプして避けた。

直後ロケットランチャーが爆発した。

その爆風で吹き飛ばされながらも月光に向かった。

再び月光の蹴りがエックスを襲う。

現在空中のため受け流すことも防ぐこともできない！！

「おおおおおお！！」

月光の膝上の部分に魔力刀を突き刺した。

月光自身の蹴りの力と、ロケットランチャーの爆発の力の両方のお陰で

かなりしっかりと刺さったのだが、蹴りの勢いを殺し切れず、

エックスは月光の上空高くに蹴りあげられた。

「つぶ、ふぁ！！」

口から盛大に血を吐き出した。

それと同時に意識を失いかけるが、そんな事を許さないかの如く細いワイヤーがエックスの足首に巻きつき、次の瞬間地面に思いっ切り叩き付けられた。

この時点で意識を失ったのだが、次の瞬間ワイヤーを伝わって電撃が走り

無理やりエックスの意識が無理やり覚醒された。

「があああ!!」

もう嫌だ・・・

死にたくない・・・

誰か助けて!!

エックスが心のなかで強く念じた時だった、  
足首を締め付けるワイヤーから力が抜けたのだ。

「Proxy!!」

『お逃げください。』

立ち上がるうとするが足に力が入らない、どうやら右足の骨が折れているみたいだ  
左足で立ち上がるうと地面を蹴りながら、腕で這いつくばるが思うように進めない。

モーーーー!!

月光から低い牛の鳴き声のような悲鳴のような鳴き声を  
あげながらその場で暴れている。  
その地響きでエックスは転んでしまった。



もはや立ち上がるほどの力も残っていない。  
最後の力で仰向けになると、月光がエックスと反対側に倒れるのが  
見えた。

「してやったぜ!!」

中指を立てながらエックスは思いつ切り叫んだ。  
それと同時にエックスは再び意識を手放した。

第1章 23ページ 最終訓練（後書き）

戦闘シーンは難しい・・・

## 近況報告

どもJackです。

いつも「リリカルなのは 最弱でヘタレなオリ主」をお楽しみ頂きありがとうございます。

実は先週末に仕事の疲れと熱中症で倒れて入院しており、本日退院してきました。

だいぶ体調はもとりましたがまだ本調子ではなく、更新まであともう少しお待ち下さい。

更新をお待ちの方には、このような内容でガツカリされた方も多く大変申し訳ないと思っております。

申し訳ありませんが、次回更新まで今しばらくお時間を頂きたいと思います。

以上簡単ですが近況報告とさせていただきます。

## 第1章 24ページ 最終訓練 サイドストーリー

Side ???

「・・・ん、ここは？」

エックスは真っ白なベッドの上で目覚めた。  
目の前にはベットと同じくらい真っ白な天井があった

「つく、痛って」

部屋を見渡そうと体をおこそうとするが全身を激しい痛みが襲う  
エックスの全身には包帯やギブスが巻かれながらミイラ男のよう  
だった

『マスター!!』

「おお、Proxy、ここはどこだ。」

『ここはオリヴィエ軍事病院です。』

「病院か・・・」

『マスターはあれから7日間ほど眠り続けておりました。一時は目  
覚められないかと思いました。』

「そんなに寝ていたのか。俺が眠った前後に何があったのか教えて  
くれ」

『了解です。マスターが眠られる前後・・・』

ここから回想編

エックスが月光と戦闘を開始するまで遡る

くスネークSideく

「さて、あいつはどの程度まで成長したかな？」

バイク駐屯地に到着し、そんなことを呟きながらバイクを降り1つの建物に入っていた。

「「「お疲れ様です！！」」」

部屋に入ると数人の屈強な兵士たちがスネークに一斉に敬礼した。

「ごくろう。現状の報告をしろ。」

「サー、イエッサー！！現在エックス訓練生は月光との戦闘を開始しました。」

「よし。主モニターに映像を写せ。」

「サー、イエッサー！！」

「なんだ、これは？」

月光が、エックスに実弾を発射している。

ロケットランチャーも発射している。

「どういうことだ！？月光には訓練弾しか積んでいないはずだぞ！！」

どん！！と机を勢い良く叩きながら叫んだ。

「わかりません！！」

「月光緊急停止信号を拒否しました！！」

モニターではエックスが月光に蹴り飛ばされたいた。

「まずい、医療班に連絡してすぐに現場に向かえ！！  
動ける奴は全員武装して向かえ！！今すぐだ！！」

「「サー、イエッサー！！」」

すぐにスネークはへりに乗り込み訓練場に向かい  
その後ろには医療部隊・戦闘部隊の全部隊が続いた。

「エックス訓練生発見！！」

「どこだ！！」

「10時の方向！！月光のすぐ足元です！！」

月光が苦しみながら悶えている。

このままでは、エックスを踏みつぶしてしまいかねない。

「っち！！ステインガーを寄越せ！！」

近くにいた兵士から受け取ったスネークはすぐに月光に狙いを定め  
て、

発射した。

ズウウウンン・・・

着弾と同時に月光は倒れた。

「エックス発見！！」

「呼吸が停止しています！！」

「増血剤を投与しろ！！いかん傷がかなりひどいぞ、緊急手術の準備！！」

「すぐに病院へ搬送しろ！！」

スネークは医療部隊にエックスの事を任せると月光を調べた。

「迂闊に近づくなよ、月光はこの程度じゃ倒れないぞ」

月光を銃を構えながら取り囲みながら叫んだ。

『月光は完全に沈黙しています。』

「お前は確か、エックスのデバイスの・・・」

『Proxyです。以後お見知りおきを。』

「そうか、なぜ月光は沈黙したのか説明しろ」

『了解です。月光のシステムにハッキングし制御権を奪いました。』  
「そんなことが．．．まあいい、すぐに月光を分解してシステムを調べ直す。お前も協力しろ。」

『否定します。私の最上位命令者であるマスターより、「ハッキングして月光を止める」と命令されております。その命令は現在有効になっております。』

「なぜだ！！すでにエックスは病院に向かっている、傷はひどいが死ぬようなことはないはずだ、すぐに月光を引き渡せ！！」

『否定します。私の能力でハッキングを行ったものは全て私の中に格納され、

その時点でハッキングが完了したとみなされます。さらに、月光をあなた方に渡した時点で再び暴走させる危険があります。』

「暴走だと？」

『はい。月光には「マスターを殺しそのあと、自爆しろ」と命令されていました。』

「なんだと？」

『．．．月光は渡せませんが、月光のデータを渡しますので、解析をお願いします。』

それから、数日間スネークはProxyから渡されたデータの解析を行なっており、



セキュリティ上の問題からProxyは解析作業に参加できず、エックスの病室に來られ、そのうちにエックスが目覚めたというのだ。

〽回想終了〽

「なんだか、大変な事になってたんだな。」

「この後の予定はどうないますか？」

「そうだな、まあまずは怪我を直してから考えるか。」

「了解です。」

はてさて、月光を暴走させた人物は誰なのか？

その理由はなんなのか？

次回疑惑への核心へ迫る！！

第1章 24ページ 最終訓練 サイドストーリー (後書き)

どもJackです。

長らくお待たせしました！！

お陰さまで月曜より職場復帰することになりました。

しばらくはまた倒れないように気を付けながらの生活になりますが  
次回更新はもう少し長くなれるように頑張りますので  
これからもよろしく願います！！

第1章 25ページ 拉致（前書き）

今回はかなり急展開です

あれからしばらくしてスネークが丁度様子を見に来てから色々と事の経過を離してくれた。

スネーク曰く

訓練用の月光と今回の月光は途中何者かによってすり替えられていた命令は書き換えられた形跡があるが、犯人は特定できなかった  
月光の機体は訓練時に破損し修復不可能なため廃棄したことにした

「月光は結局廃棄したのか？」

「いや。廃棄していないぞ。」

「え？だってさっき廃棄したって・・・」

「お前のデバイスに組み込まれたままだ、もっとお前のデバイスから取り出したところでバラバラにして廃棄することは確かだから多少細工させてもらった。」

「多少細工って・・・まあもらえるならいいけどさ」

「あと、木山に連絡したらもうすぐこっちに来ると言っていたぞ」

「ああ、ありがと」

その会話の直後木山と子供たちが一斉に部屋になだれ込んでいた。その後は、散々だったよ。

子供たちは大泣きするし、木山はスネークに「危険なことをさせるな――！」

って食って掛かるし、みんなを何とかなだめようとしても体が動かないし

ナースが来て「うるさい――！」と怒鳴ってくれなかったら  
今頃どうなっていたことやら・・・

子供たちは、ひとしきり泣いた後、ナースに連れられて別室に連れていかれた。

初めは「いやだ」とか「一緒にいる」って駄々をこねていたんだが  
木山が「エックスと一緒に『痛い注射』をするぞ」

と脅したら大人しく別室に移動していった。

現在病室には、木山とエックスの二人だけだ。

しばらく、無言の時間が流れた。

廊下からは、忙しく誰かが常に行ったり来たりしている足音が聞こえてくる

「なあ、春生」

沈黙を最初に破ったのはエックスだった

「ん？どうした？」

「俺さ、今回の訓練で自分がすごく弱いつて痛感したよ。」

「そうか」

「強くなりたい。みんなを守る力が欲しい」

「そうか」

再び無言の時間が訪れる。

「エックスよ」

今度は木山が沈黙を破った

「お前が決めたことだろ？ならば私は何も言っまい」

「・・・そうか」

エックスはただ一言だけ答えた

その後を訪れる沈黙はとても長かった

二人はどこを見るわけでもなく、ただただ時間だけが過ぎていった。

しばらくしたあと、今度沈黙を破ったのは木山でもエックスでもなかった。

「みなさん！！今すぐここから避難してください！！」

血相を変えてナースがエックスの病室に怒鳴りこんできた

「避難とは穏やかじゃないな。何があつたのだね？」

「テロリストです！！ここに病院に、ってキヤアア」

ナースを押しつけて2、3人の男たちが銃を手  
にエックスの病室になだれ込んできた

「おまえたちが木山春生とエックスだな」

「彼は病人ですよ！！手荒なことはしないでください！！」

バン

ツチン

カラン カラカラ・・・

乾いた銃声のと薬莢が転がる音が広がる。

ナースがどさりと倒れると同時に、さっきまで純白の天使と言われ  
る所以である

純白のナース服と床が真っ赤に染まってい

「もう一度聞く。おまえたちが木山春生とエックスだな」

何もなかったかのように再び男は問いかける。

「そうだ」

震える声でエックスは答えるだけで精一杯だった。  
頭の中をグルグルと考えが渦巻く。

>>ここは病院だぞ、その上軍事病院だ、すぐに誰か助けにきてくれるさくく

そう考え必死に勇気を振り絞って答えた一言だった。

バン

再びの銃声

咄嗟に目を閉じ、痛みに耐えようとするが、何も無い  
ベットの上にいきなり重みを感じたため、恐る恐る目を開けた

木山ベットのの上に倒れている

「春生!!」

己の体の痛みも忘れてエックスは起き上がり木山を起こした

「おい!!春生!!」

強く木山の体を揺するが反応は微弱だ

さっきのナースほどではないが出血がひどい



すぐに手当をしないと命に関わる

「頼む！！なんでもするからコイツを助けてくれ！！」

「これを飲め」

男は一本のアップルをエックスに差し出した。

「飲むよから、まじで頼むよ！！なあ、助けてくれよ！！」

「飲め」

「わかったよ！！飲むよ！！」

そう言うときエックスはアップルの口を割り  
中身を一気に飲み干した

パリーン

「っがぁ・・・」

アップルを落としたと思ったら、いきなり胸が苦しくなった

「うがぁぁ、ああぁぁぁ・・・」

そう叫ぶときエックスは気を失った。

エックスが気を失ったのを確認して、一人の男が麻袋を取り出し

そこにエックスを押しこむと、窓から飛び立った。

通報を受けすぐにスネーク率いる聖王軍が病院に来たが  
男たちはおるか、エックスすら見つけることができなかった

「クソ！！」

持っていた数枚の書類を床にたたきつけながらスネークは毒づいた  
落ちた書類は今回の事件の報告書だった

内容としてはいかのようことが書いてあった

警備に着いていた兵士20人は、全員背後から大型のナイフで頸動  
脈を切られ即死

16名の入院患者は心臓を一発で撃ちぬかれ即死

1名の入院患者が行方不明、

その患者の付き添にきていた女性は発見時まだ息があったことから  
現在緊急手術中

「クソ！！クソ！！クソ！！クソ！！クソ！！クソ！！クソ！！ク  
ソ！！」

ただ壁を殴りつけるスネーク

壁に穴が開こうが、殴っていた手から血が出ようがただ殴り続けた

「クソ！！クs「おやめなさい！！」、「誰だ！！」

振り返るとそこには本来こんなところにはいるはずもない人物  
オリヴィエがいた。

「陛下．．．失礼いたしました．．．」

「いいのです。それより報告は聞きました。」

「ギリッ！！」

スネークは悔しさのあまり歯を食いしばりながら、俯き  
先程まで壁を殴っていた手からは、血がポツポツと床に滴っていた

「スネーク！！」

はっと、顔を上げると悲しそうな顔のオリヴィエがいた。

「こんな所で腐っている場合じゃありません。

アナタが指揮を取りこの病院が襲った犯人を捜しなさい！！

そのために必要な物資・人員は聖王オリヴィエの名において全て許可します」

「イエス・ユア・ハインス！！」

スネークは、自分の職務を思い出し最上級の礼を持ってオリヴィエに答えた。

「スネーク。お願いです。何としてもこの事件の犯人を捕まえ、エツクスさんを無事助けだして下さい。」

「は!!! 必ず!!!」

そういうと、スネークはオリヴィエに回復魔法で手の治療を行なってもらい

すぐに事件解決の為に陣頭指揮をとりはじめた。

## 第1章 26ページ 実験

スネークたちは、犯人グループをそれこそ草の根を分けるように探していったが

手がかりとなるような情報は一切わからなかった。

だがしかし、オリヴィエとスネークには、犯人の心当たりがあった。それは、改革派グループの実質的なリーダーをしている3人の男たちだ

彼らは、度々オリヴィエと会っているエックスに対して、

あまり良い印象を持っていないという噂を耳にしていたのだ

だが、証拠がない。

今回の事件でこれだけ大々的に犯行を行っているにもかかわらず圧倒的に証拠の数が少ないのだ。

それらをいくらか合わせたところで、改革派グループのリーダーには到底たどり着けない

「ここまで情報が集まらないのは異常ね」

「陛下やはり、あやつらが．．．」

「現時点では可能性としか言いようがないわ」

突然勢い良く部屋に兵士が駆け込んできた

「無礼者！―陛下の御前であるぞ！―」

「エックス氏の居場所が判明しました!!」

「!!?」

「場所は、アルハザード郊外の『バイオエネルギー研究所』です。」

オリヴィエとスネークの予想は的中した。

但し、最悪なパターンの方でだ。

この『バイオエネルギー研究所』とは、名前だけ聞けば大層立派だが中身は非人道的な研究を行っているとして度々話題になっている。

具体的には、人間の反射速度を早めるために全身に電極を刺され、感電死したり

魔法を大量に記憶できるように、脳の記憶を司る海馬に手を入れ、廃人になったり

などなど……

これ以外にも挙げたらキリがないほどの事をしているが、

巧妙に偽装工作がされており、なかなか捕まえることができなかったのだ。

すぐに、スネークは部下を引き連れてバイオエネルギー研究所に向かった。

バイオエネルギー研究所周辺

「これより、作戦を指示する」

静かにスネークに注目する兵士たち。

「本作戦の目的は、『エックスの奪還』及び『今までの研究データの押収』。研究員たちの確保』だ。質問は？」

今回の作戦にあたり、スネークの部下の中から特に優秀な人員を選んで来ており

全員にピーンと緊張が張り詰める。

「敵勢力の人数及び武器の種類は？」

「どちらも不明だ。だが、軍事病院で仲間たちが一瞬で倒されていることから、相当の手練だと予想される。」

「研究員たちが抵抗してきた場合は？」

「可能な限り生きて捕まえる。判断は現場に任せる。他に質問がなければ装備を確認後潜入する。」

全員武器と防具に不備が無いかを確認し、腕時計を片手にスネークに注目した。

「通信チャネルを5番にセット、以降の会話は通信回線にて行う。」

「『貴婦人』準備完了」

「『サイコロ』準備完了」

「『行進曲』準備完了」

「了解。貴婦人はエントランスから『パーティ』に向かえ。  
行進曲は『次の曲の準備』。

俺は、サイコロを『持って』バックヤードに向かう」

「『了解!!』」

それぞれが、配置につく。

先程のスネークが言ったことは、通信を傍受されても良いように暗号で会話しており、要約すると「貴婦人チームは、正面から潜入せよ、行進曲チームは後方バックアップ。サイコロチームはスネークと裏口から潜入せよ」というような内容になる。

スネークとサイコロチームは静かに裏口に向かっていった。

途中トラップの類も設置されておらず、見張りも居ない。

ギイイイ……

監視カメラ・見張り・センサー・トラップなどが無いことを確認して扉を開け、潜入を開始した。

室内は、研究室らしく、実験機材や数式などが書かれた紙などが散乱していた。

ただどれも、分厚いホコリがかかっており長い年月使われいない様



だった。

「一階フロア制圧完了。救助者なし。」

「二階フロア制圧完了。こちらネガティブです。」

スネークにジェスチャーで伝えた。

「行進曲。『楽器はあるか?』」

「こちら行進曲。『楽器はありません。』」

>> 情報が間違っていた? ありえん!! では、どこにいるんだ? <<

そのとき、スネークたちの足元に魔法陣が展開された

「いかん、にげ・・・っぐ!!」

スネークたを初め兵士たちが次々に倒れる

「魔力が吸収されてるだど? 畏か、外にいる『行進曲』に知らせなくは・・・」

ツガガ

「その必要はない。既に死んでいるのだからな」

「お前は一体・・・」

すべてを言い終わる前にスネークは倒れこんだ。

Side ???

呆れた顔で、白衣のポケットに手をつ込みながらほくそ笑む男がいた。

「ふん。嘘の情報を流しただけで簡単に信じるとはな、度し難いバカどもだ。」

白衣の男の隣で、計器をしきりに動かしている別の男が、得意げに話した。

「ドクター、予想通り魔力の無効化と吸収の実験は成功です!!」

「やはり私の仮説は正しかったな。  
異世界から来た男のリンカーコアを解析し、素晴らしいデータが取れたよ。」

ドクターと呼ばれた男は、計測結果に目をやると、ニンマリ笑いだした。

「さあ、最後の実験に取り掛かるぞ。すぐに研究所に戻るぞ。」

そう言い残し足早に消えていった。

Side オリヴィエ

「スネークたちが全滅!?」

「はい．．．定時連絡が無かったため、我々が駆け付けましたが既に．．．」

生命維持に必要な魔力までも強制的に奪われた結果だ。

「緊急事態です!! 場内に賊が侵入しました!!」

「なんですって!! 賊はどこに!!」

オリヴィエのいる作戦本部室に一報を伝えに来た兵士にオリヴィエは詰め寄る。

パチチ

「ここだよ。」

放電音の後、オリヴィエはその場に倒れこんだ。

「貴様!!」

咄嗟に銃を構えようとするがその兵の体は動かなかった。

「あつ、あつ・・・」

そして、その兵士は驚いたことだろう。

本来銃を掴んでいるはずの自分の腕が胸に突き刺さり、自分の心臓を握りつぶしていたのだから。

「こちら、ブラボー3。聖王オリヴィエを拘束した。これより『研究所』に向かう」

男は通信を終えると、オリヴィエを肩に担ぎ『研究所』に転移した。

「研究所内多目的実験室」

「・・・殺せ」

薄暗い部屋の中エックスは、壁に礫られながら、消え入りそうな声で呟いた。

「焦るなよ。最後の実験の前にゲストを呼んでいるんだ。」

その瞬間、オリヴィエを肩に担いだ男が目の前に転移してきた。

「おお、やっとゲストの登場か、待ちくたびれたぞ!!」

「オリ・・・ヴィエ? てめー何するつもりだ!!」

エックスは叫んだ。

だがそれを無視して、オリヴィエを連れてきた男は部屋の隅からバケツを持ってきて、そこに魔力で作った水を貯め始めた。

「てめーいいかげんにしろ!!」

バsshャー！！

「姫様。お目覚めの時間ですよ。」

バケツの水をオリヴィエにかけて無理やり目覚めさせる。

「んん．．はっ！？エックス！！」

「オリヴィエ！！逃げろ！！」

「おっと、お待ち下さい。」

オリヴィエをバインドでその場に拘束した。

「あなた達は何者です！！名を名乗りなさい！！」

「あゝ、姫様？そういうのはいいですから。すこし黙っててください。」

「な！？」

男は椅子に掛けてあつた白衣を羽織ると、

白衣のポケットに手を入れて気怠そうに歩いた。

この男こそ、スネークを罫にかけ魔力を吸収した現場にいたあのドクターだ。

「あゝ、姫様？これより実験を行ないますのでそこで見ていて下さい。」

「実験？これは拷問でしょ！！」

オリヴィエの言うことを無視して、ドクターはスイッチを押し実験を開始した。

ブウウウウウン・・・

不気味な音を立てながら、近くの計器の表示が目まぐるしく変化し始めた。

「一体何が行われるというの？」

「ぎゃあああ！！」

「エックス！！つく、外れない！！」

「ああああああああ！！！！」

「お願い！！もうやめて！！」

「ああああああ・・・」

機器から発せられる音が消えたと同時にエックスもグッタリしだした。

「エックス！！」

オリヴィエは叫びながら、エックスの元に這いつくばっていった。

「エックス！！お願い、返事をして！！」

呼びかけに応え無い。

「一体これが何の実験だというのです！！答えなさい！！」

「うるさい姫様だな。見れば分かるでしょ？こいつに魔力を注ぎ込んでんだよ」

「魔力を？何のためだというの！？」

「人間に大量の魔力を注ぎこみ、リンカーコアを強制的に成長させたらどうなると思います？」

「！？」

「分からないでしょうね。私も分かんのですわ、だから実験したんですよ。」

ああ、ちなみにこの魔力はお宅の兵士から頂きましたがね。」

「まさか、あなたがスネークたちを殺したのですか！？」

「実験試料の名前とか知らないし。それよりもそろそろ起きだすぞ！？」

エックスは特に力を入れる風もなく、礫にされた壁から動き出し、ふらふらとした足取りでドクターに向かっていった。

「おお！！一気に魔力の運用効率が上がったぞ！！次にこれはどうだ？」

ドクターは魔力弾をエックスに投げつけるが、エックスに当たる瞬間に音もなく消滅した。

「魔力吸収フィールドか！！これなら対魔力防御は十分だな！！」



いそいそとメモを取りながらドクターは己の実験成果に酔いしれていた。

そして、気付いていなかったのだ。

エックスに切りつけられた事に。

ドクターは自分が切りつけられても笑っていた。

「いいよいいよ！！素晴らしい攻撃力だ！！」

白衣を赤く染めながらも笑い続けた。

「このままでは私の体が持たないから、あとは君に」ぶべら！！」

ドクターの頭が吹き飛んだ。

「これは！！スネーク！！」

「間に合いましたか！！」

白髪頭に眼帯の年老いたスネークを筆頭にオリヴィエの近衛兵たちがホールに雪崩込んできた。

「陛下！！ご無事ですか！！」

「スネーク！！生きていたのですね！？でもその姿は一体？」

「確かにあの時一度心臓は停止しましたが、私の中のナノマシンが老化と引換に魔力を供給して生命維持してくれたおかげでなんとか生き延びました。」

「そうだったのね。本当に無事でよかったわ。」

エックスは、ドクターの亡骸の前に立ちすくんでいた。

「ヴォオオオオ！！」

エックスは、叫びながら、急に近衛兵たちを襲いだしたのだ。

「攻撃してはならないわ！！彼は混乱しているだけよ！！」

「陛下！！離れてください！！」

「しっ、しかしエックスが・・・」

「確かに、このままではまずいでしょうな。」

『私に良い考えがあります』

「「！！！？？」」

突然、近くの机のから誰かが話し出した。

「Proxyか？」

『肯定です。スネーク様。』

「ところでいい案とは？」

『マスターの力の源であるリンカーコアを、第21次元平面領域に転移させます。そうすれば一時的にでもマスターの力を抑えることができます。』

「そんなことが可能なの？」

『肯定です。しかし、マスターのリンカーコアを転移させるためには一瞬でもマスターに私が触れていなければなりません。』

「一瞬でいいんだな？」

『私をマスターに投げつけてくれるだけで構いません。』

「そういう事なら話が早い。いくぞ！」

『お願いします！！』

スネークがProxyを投げつけたとき、いきなりProxyが、空中放電しながら青白く光りだした！！

『マスターのリンカーコアが予想以上に巨大化しています。このままでは溢れでた魔力で周辺の空間が削り取られます！！急いでこの建物から逃げてください！！』

「っち！！緊急退避！！急いで建物から脱出しろ！！」

無線で全員に命令すると、オリヴィエを連れて逃げようとするが・

「陛下！！危険です！！すぐに脱出してください！！」

「しかし、エックスが」

「ごめん！！」

スネークは、オリヴィエの腹を殴り気絶させた。

そして、だら〜んとしたオリヴィエを抱き抱えながらスネークたちはエックスを残し建物の外に逃げ出した。

『マスターの力を押え切れない！！このままでは>>Proxy！！<<マスター！！』

>>Proxy、俺の体は気にするな！！被害を最小限に食い止めることに専念しろ！！<<

『しかし、それではマスターの命が！！』

>>これ以上みんなに迷惑はかけらんねー、頼むぞProxy<<了解です！！』

しだいに、エックスの体がボロボロと崩れてきた、

『マスター！！』

>>構わん！！続ける！！<<

次第に足が崩れ去ったため、エックスは立っていられず倒れこんだ

>>いいマスターじゃなくて済まなかったな<<

『はい。自分勝手に臆病のクセに誰よりも強がりです。』

>>へへ、ひどい言い草だな<<

『申し訳ありません』

>>まあ事実だしな。Proxy最後にお前に2つ命令がある<<『なんででしょうか？』

>>木山とか子供たちとかを守れ<<『了解です』

>>そして、自由にいきろ。お前は他のデバイスとは違う。お前の考える道を歩め<<『了解しました』

エックスの体の末端部分はすでに崩れ去り、胴体の一部しか残っていない。

ぽっかりと空間に亀裂が入った。

次の瞬間、辺りを強い光が包み込んだ。

>>ありがと<<

光の中で最後にエックスの口はそう動いた

エックスたちを中心に直径1kmの巨大なクレータが出来上がった。

**第1章 26ページ 実験（後書き）**

大変永らくお待ちしました。

だめだ、今回は特になんか上手くまとめられない  
はっ！！これがスランプか！？

## 第1章 27ページ 最後の扉

エックスは真っ白な空間に漂っていた。

「俺は．．．死んだのか．．．」

そうつぶやくと、目を閉じゆらゆらと流れに身を任せた

コツッ．．．

コツッ．．．

コツッ．．．

足音が近づいてくる

「誰だ．．．もう目を開けるのも疲れた．．．」

「もう終わりにしますか？」

「??.」



エックスはゆつくりと目を開け、目の前の誰かを見た。

「あんたは、確か．．．キーメイカー？」

「覚えててくれましたか？」

「まあな。俺は死んだんだろ？」

「ええ、そうです。」

再び諦めたようにエックスは目を閉じた。

「もう終わりにしますか？」

「俺は死んだんだぞ？そんな俺に何が出来る？」

キーメイカーは胸ポケットからタバコを取り出しマッチで火を付けた

ふう．．．

「一服いかがですか？」

「．．．」

肩を竦めながら、キーメイカーはタバコを吸いだした。

無言の時間が流れる

「木山春生」

「！！！！」

「生きてますよ。彼女は」

ガバッとエックスは起き上がり、キーメイカーを驚いた目で見つめ

た。

「彼女は一命を取り留めましたが、ひどい後遺症ですが必死に生きています。」

「・・・」

「スネークは、急な老化により長くは生きられない体となりましたが、命の続く限り聖王オリヴィエと戦うそうです。」

「オリヴィエ・・・」

「子供たちは、あなたの帰りをずっと待ち続けていますよ。」

エックスは、上を向き目をギュツと閉じた

自分は何をしていたのか？

結局自分では何もできなかった・・・

「もう終わりにしますか？」

「俺は・・・俺は・・・」

とめどもなく涙が溢れてきた  
みんなを守りたかった・・・  
自分の無力さが憎かった

「俺は、終にしたくない！！」

キーマイカーは待ってましたとばかりに満面の笑みを浮かべ  
コッソンと持っていた杖で地面を叩くと

目の前に一つだけ重厚な木の扉が現れた。

「戻れるのか？」

「あの時代に戻ることは出来ません。」

「え．．．」

「過去は決してやり直せません。ですが未来は作ることが出来ます。」

「俺はもつと強くなりたい。もつと強くなって誰もが笑って暮らせる世界を作りたい！！」

エックスが心からの決意を述べると

キーメイカーは再び杖で地面をコツンと叩いた。

するとエックスの服装が変化した。

先程までは、糊のきいた白いワイシャツに黒いスラックスという格好だったが

今のエックスの格好は、まるっきり違っていた。

エンジニアブーツに黒いジーンズ、白いインナーの上に  
シングルライダースジャケットを羽織ったかなりロックな服装になっていた。

「これは？」

「貴方はみんなを守りたい、誰もが笑って暮らせる世界をと強く願

「い、望みましたね？」

「ああ」

短い、それは迷いのない答だった。

「貴方はみんなを笑顔にする『ラフメーカー』としての役割を見つけたのです。」

「ラフメーカー……」

「人は気付かないだけで誰でも役割を持っています。貴方は貴方だけにしか出来ないことをしてください。」

「わかった。」

エックスは扉のノブに手を掛けると、キーマイカーに振り返った。

「最後に聞いておきたいことがあるんだが」

「なんででしょうか？」

「なんで俺のためにここまでしてくれるんだ？」

キーマイカーは帽子を目深にかぶり直しながら、答えた

「私は人が生きる時間よりも、とてもとても長い時を生きてきました。」

「そんな中でたまたま貴方と出会った。それだけです。」

「また、会えるかな？」

「いずれ何処かで」

ありがとうと呟くとエックスは扉を開け中に入って行った。  
ボタンと扉が閉められたと同時に、扉は消え真っ白な空間にキーン  
イカーだけが  
一人佇んでいた。

「ありがとうか・・・」

そういうと、孫を見る老人のような優しい笑みを浮かべながら  
また、コツコツと音をさせながらどこかに消えていった。

**第1章 27ページ 最後の扉（後書き）**

今回で第一章完結です。

次回よりとうとう本編に突入します！！

ちなみにキーマイカーのイメージは  
クロノトリガーの時の最果てにいる老人です。

第2章 28ページ 見知らぬ土地

エックスが視界を取り戻すと海に見える公園にいた。

「ここは？」

辺りを見回すと日本の住宅街のようだ

夕暮れ時の公園の時計は、5時を少し過ぎたあたりを刻んでいた

「日本？まさか俺は元居た世界に帰ってきたのか？」

フラフラと夢遊病患者のように公園を出て歩きまわった

歩いた

歩いた

歩いた

歩いた

ただひたすら歩いた。  
何時間歩いたのか？  
何キロ歩いたのか？

辺りは既に夜の帳が下り  
涼しい風が流れるが、エックスは歩き続けたため汗だくで  
白いワイシャツが汗でベツトリと肌に張り付いていた

「一体ここは、どこなんだ？」

ふと、目の前の地面にキラリと光る物が見えた

「これって、旧500円玉!？」

何年か前に流通が止まり、一部のコレクターしか持っていないよう  
な硬貨が

道端に落ちていたのだ  
珍しがつて見ていると、100mほど通りの先に、自動販売機の明  
かりと共に

タバコ屋が見えた

「喉乾いたな．．．ま、ちょっと失敬させてもらおう」



タバコ屋のカウンターには野球中継を見ているおばさんがいた

「いらっしやい」

「おばちゃん、ラッキーストライクのソフトある？」

「あるよ、220円ね」

「え！？220円！？」

「そうなのよ、この5月で値上げしたもんだから、知らないお客さんなんか結構驚くのよ」

「あ、ああ、そうなんだ」

「はい、一箱でいいね？」

「ああ、あんど」

エックスは意味が分からなかった

いつも買っているときは、320円で買っていたのだ  
それが220円？それも値上がりして？

でもお釣りをを見ると確かに、280円

>>さあ続きましては新人類、4番清原和博・・・<<

え？清原？

あいつ引退したんじゃないの？

「！！！」

エックスの目の前に衝撃的な光景が写っていた  
タバコ屋のおばさんが持っている新聞の日付だ

そこには、

昭和61年 9月29日と・・・

## 第2章 28ページ 見知らぬ土地（後書き）

どーもJackです。

更新が遅れて申し訳ありません！！m（＿）＿m

単純にリリカルキャラクターたちに出会っても良かったのですが  
それだと、よくあるお話になってしまい面白くないと考えました

次回には、リリカルキャラクターと出会える予定です  
今後出演させて欲しい作品やキャラクターなどありましたら  
ぜひお気軽にメッセージをお願いします！！

第2章 29ページ 経済（前書き）

今回は説明メインです

## 第2章 29ページ 経済

エックスは当時生きていた時から数えて24年前に降り立った

ここは本当に過去の世界なのか、平行世界なのか確かめるために  
まずは情報収集と当面の路銀を得るために  
工事現場の作業員として働くことを決めた

「おいエーちゃん、そろそろ飯にしようや」  
「わかりやした」

エーちゃん？

エックスは面接で名前を名乗った際に監督が好きなアーティストで  
ある

矢沢永吉のあだ名である「永ちゃん」をもじって名付けられ名付け  
られたのだ

アメリカからの帰国子女で日本の各地を旅しているとか適当なことを  
いったら  
すんなり現場に付かせてくれたのだ

「しっかしエーちゃんは細いのにえらい力持ちだよな、なんかや  
つてたんか？」

「まあ昔格闘技を習ってたんですよ」

「はあ、どおりですごいわけだよ、あれか？合気道とか空手とか  
か？」

「まあいろいろやってみましたよ」

「ふうん、おキタキタ!!」

目の前には、大盛りのチャーハンとギョーザとラーメンが2人前づつ置かれた

「はふ、はふ、まあ今は人手が足りなくて困ってたんだし、ズルズル、助かるよ」

「すズズ、いやこっちこそ、ゴクゴク、住み込みで雇ってもらって感謝してますよ」

肉体労働者は、やはり体が資本とばかりに食べる食べるものの10分くらいで二人の胃袋に消えていったのだ

「んじゃまあ、午後も一仕事頼むわ」

「ういっす!!」

こんな生活をしながら少しの蓄えができたために

2、3日お休みをもらい、実家のある長野に一度向かうことにしたのだ

「そっいえば、俺の前の名前ってなんだっけ？」

実家の近くにいる事は確かなのだが、如何せん詳しいことが思い出せないのだ

「確かこの辺りだったと持ってたんだけどな」

しばらく右往左往した後に  
それらしい家を発見したのだがここからが問題だった

もし本当にエックスの過去のだとしても今頃は赤ちゃんなのだから  
直接会っわけにも行かないし、かと言って家に押しかけるわけにも  
いかないのだ

そうやって道端でうんうん唸っていると一人のかわいらしい女の子  
が話しかけてきた

「おじちゃん、おうちの前で何やってるの？」

「えーと、そのね、おじちゃん道に迷っちゃったんだよ」

「ふーん、おかーさん。迷子のおじちゃんがいるよ！！」

「！！！！！！」

いきなり女の子は玄関を開けて家の中にいる母親を呼んだのだ  
もしエックスの過去ならばその母親はエックスの親類の誰かである  
可能性があるのだ

エックスは固唾を飲んで玄関を見つめていると  
一人の若い女性が出てきた

「知らない人に話しかけたら、だめでしょ真奈ちゃん!!」

「だってこのおじちゃんさっきから行ったり来たりしてたんだもん」

「え?」

真奈ちゃんの母親はエックスを疑うような眼差しで睨みつけながら真奈ちゃんを庇うようにエックスに対峙した

「うちに何か御用ですか?」

「えっと、その、観光に来たんですが、地図を無くしてしまって、駅までどうやっていいのかと思ひまして・・・」

「あら、そうだったんですか」

咄嗟に最寄り駅までの道順を聞くことにしてなんとか取り繕う事に成功したのだ

「え〜っと、大丈夫かしら?」

「ええ、助かりましたよ」

「おじちゃん、おうち帰れるの?」

「真奈ちゃん、ありがとね。お陰でおじちゃんおうちに帰れるよ」

「えへへ／＼／」

駅までの道順とかこの辺りで美味しいお蕎麦やさんなどの情報を教えてもらい

エックスはその場を離れた・・・





「やはり平行世界か．．．」

少なくとも「真奈」という名前の親戚は覚えがなかった  
近所の子供もそんな名前の子供はいなかったのだけは確かだ。

あの母親と話している間も必死に思い出していたが一切記憶にない  
のだ

過去の自分がいたらどうしようかとも一時期考えたが杞憂に終わり  
現在の住処である愛知県鳴海市にエックスは帰っていった

（数年後）

エックスは鳴海に戻ってからは工事現場で働く傍ら

株式投資や先物取引などを通じて、かなりの額を稼ぎだした

時代はバブル経済真っ盛り。

銀行に金を預ければ雪だるま式に増え、土地の値段は毎日値上がりし投資は投資を産むまさに絶好調だった

世間では、コンピュータが社会に進出し始め

コンピュータが扱える人間は企業にとってかなり貴重な人材であり非常に有難がたがられた

覚えておいでだろうか？

エックスは元プログラム開発なので扱えるところではなく工事現場で使用する機材やシステムの作成もできるのだ。

そのシステムを買われ、当時小さな工事請負だった会社は世界に支店を持つまでに急成長を遂げ、後に訪れるであろうバブル崩壊も乗り越えられる

企業体力や技術などを手にするまでになっていた。

エックスは恩のある監督の下でずっと働いていたかったのだが大口の受注がありその打ち合わせのため、海外に一時転勤になったのだが

現地で妙な噂を聞いた

なんでもここ最近「シロウ」という日本人のSPが雇われ襲ってくる反政府組織の人間たちをその人間離れした身体能力で

次々と倒していくことから、反政府組織は関係の無い、  
民間の日本人を襲うといった事件が発生しているというのだ

そのため現地の日本人たちは次々に帰国し、日本人には見えないが  
結構現地で有名になったエックスは、ギリギリまで現地スタッフに  
引き継ぎを行い

いざ帰国するという最終日の夜に事件はおきた

ガッシャーン

パラパラ

キヤー！！！！

ドンドン！！

エックスのいるホテルが襲撃されたのだ

「一体なんなんだ！！」

すぐにベットから飛び起きたエックスはベットの脇に置いた  
銃を手にした。

現地のスタッフからいざという時に使えと渡されたものだ  
渡された銃はタウルスPT92 装弾数15発  
9mm弾を使用する自動拳銃だ

ここで普通の日本人ならまず部屋の外に出ようとするのだがそれは間違いである。

このような場合、ホテルの自室にバリケードを築き騒ぎが収まるまで大人しくするのが鉄則だ  
そのため、エックスはベッドや机など部屋中の物をかき集め入り口にバリケードを築き上げた

しばらくすると部屋の前が騒がしくなってきた  
どうやらこの部屋に入ろうとしているのだ

「なにをしている!!」

「内側からバリケードが築けているため、この部屋だけが制圧出来ていません」

「ええい、なら扉を爆破しろ!!」

ヤバ!!

エックスは急いで身を隠すとその直後、  
爆発しバリケード共々扉が吹き飛ばされた

その直後、ドカドカとマシンガンを持ち目出し帽を被った男たちが部屋に  
飛び込んできた



## 第2章 29ページ 経済（後書き）

以前もあつたこの展開さて今回はどうやって切り抜けるでしょうか？  
次回をお楽しみに！！

## 第2章 30ページ 帰国

パラパラ

パラパラパララ

チュン チュイイインン・・・

男たちは部屋に入るなりマシンガンを乱射した  
部屋の照明やクローゼットなどありとあらゆるものが蜂の巣のよう  
になった

「部屋にいた奴はどこにいるんだ!!」

男たちはくまなく人が隠れられるような所を徹底的に探したが  
エックスを見つけられなかった

「大佐!!窓の近くに血痕があります」  
「なに？」

壁一面に大きな窓があり、先程の銃撃で窓は何もなくなっていた  
その窓だったところに向かって血痕が点々と続いていた



大佐と呼ばれた男は窓から身を乗り出し辺りを見渡したが誰も居ない

「落ちたか．．．、全員３階の大広間に向かうぞ」

「「イエッサー！！」」

「いったみたいだな」

エックスはどこに隠れていたのか？

それは、風呂場の天井に一部押し上げられる場所があるのをご存知だろうか？

そこを押し上げて隠れていたのだ

「しかし、むちゃくちゃやる連中だな、部屋の中がボロボロだよ」

そう言つて、エックスは床に散らばった中からタオルと掴み  
先程の爆発で傷を負った左腕を簡単に治療した

「ツチ、思ってたより傷が深くなくて助かったが、あまり長居はできないな」

瓦礫中からスニーカーを見つけるとそれを履き、銃の弾倉や動作を確認すると、廊下に誰も居ない事を確認し部屋の外に出た

ここは、15階とにかく下に向かうしか無いため、階段を降りることにしたのだが、そこにはマシンガンを手にした二人の男が構えていた

「二人か・・・さて、どう攻めるか？」

曲がり角から様子を伺うが、ここからでは距離があるため銃では不利

「なにか、他に武器は無いか？」

ここは、ホテルの通路なため武器になりそうな物は何も無い  
仮に銃を使えばすぐに下の階から応援が駆けつけてしまう

そんなことを考えていると階段から銃声と怒声が聞こえてきた

恐る恐る階段を見ると一人の東洋人と思われる男が銃を持った男たちの一人を組み伏せていた

もう一人は頭から血を流しており、動かない

「Freeze!! (動くな!!)」

「...OK (分かった)」

「Are you Chinese? (中国人か?)」

「No, I'm Japanese (いや、日本人だ)」

ゆっくりと男の前に出る

なるほど、確かに近くで見れば日本人の顔だ

「!!!、あんたも日本人か？」

「ああ、あんたこいつらの仲間...じゃないみたいだな」

「ああ、ここで政府の会談が行われていて、そのSPをしてしていた」

そういえば、こいつが最近噂の「シロウ」か？  
ひとつカマかけてみるか

「ああ、噂は聞いたことあるよ、たしか「ヒトシ」だったか？」  
「いや、士郎だ。高町士郎だ。」

「そうか、、疑って悪かった。俺はエックスⅡステイングレイだ。」

「日本人じゃなかったのか？」

「帰国子女だ」

ああ、と士郎は納得するとエックスと握手をした。

「民間人のエックスに頼むのは間違ってるのは分かるんだが、俺の依頼主を初め人質を助けたい。協力してくれ。」

「もちろんだ。出来る限りのことはするつもりだ。」

「すまない。」

そういつて、士郎は館内の見取り図をポケットから取り出し

敵の配置や武器などをエックスに説明したのだが

そこで、1つ奇妙な事を士郎が言い出したのだ。

何でもここ最近テロ組織のリーダーは、超能力が使えるようになり銃を撃つても目の前で見えない壁のようなものに弾かれるらしいのだ

まあ、途中兵士たちをCQCで倒しながら、人質たちが捉えられている大広間で

体調と名乗る敵の首謀者と現在対峙している

「テメーら動くんじゃねーぞ！！動いたらコイツを殺すぞ！！」  
「つちい．．、わかった。武器は捨てるから撃つんじゃない」

そう言つて。士郎とエックスは銃を捨てた

「っへー！他に武器を持つてるかも知んないからな、お前ら服を脱げ」

「っー！調子に乗るんじゃないぞー！」

「うっせー！！いいから黙って脱ぎやがれ」

「．．．土郎、言つとおりにしよう」

ドゴオオオオオオンン．．．

直後爆発音と同時に地震かと思うほどホテルが揺れた

人質から銃口がずれたと同時に土郎とエックスは走りだした。

パンパン

土郎が一瞬よろたがそのままの勢いで犯人に掴みかかった

エックスは銃を蹴り上げ、丸腰となった犯人を土郎が一本背負いで倒した

一本背負いからの抑えこみはまず素人には逃げ出せない

ダイジョーブカー！！

犯人確保！！

先程の爆発はどうやら軍がホテルに突入した時の音らしく

すぐに軍が大広間に突入し、人質の保護と犯人の確保をしていた

すでに犯人は気絶していたが

それでもまだ士郎は犯人を押さえ込んでいた

「士郎？」

床に赤黒い血のシミが広がっていく

士郎は撃たれていたのだ

すぐに病院に士郎は搬送されたが

その最中エックスは士郎に魔力を使って治療を行っていた

〈数日後〉

士郎は助かったのだが、当たり所が悪くもう激しい運動は出来ない体になっていた

同じ日本人ということで医者から伝えて欲しいと言われたエックスは重い足取りで

士郎の病室に向かった

「おい士郎、調子はどうだ？」

「まあまあってとこだな、エックスは？」

「お陰さまでなんとかやってるよ」

しばらくそんな取り留めもない会話をしていたのだが突然士郎が真面目な顔になって身の上話を始めた

「俺さ日本に子どもと嫁さんがいるんだ」

「そうか・・・」

「一番下の子が生まれたってさつき連絡あつたんだ」

「よかったじゃないか」

「ありがとう。それで仕事を辞めて日本に帰ろうと思つんだ。どーせこの怪我じゃこの仕事はもう続けられないしな」

「気付いてたのか？」

「まあな、でも俺は人殺ししか出来ない人間だ。日本で家族を食わせていけるか心配だな・・・」

そついうと、士郎は俯いたまま黙り込んだ

「さて、そろそろ俺はお暇させてもらうかな。」

「もう帰るのか？」

「昼の便でな。そうだ、名刺を置いておくから日本に戻ったら連絡くれ」

「ああ、必ず連絡するよ」

そついつてエックスは一足先に日本に返ってきた

（数カ月後）

帰国してから数カ月間はテレビの取材や外交官と今回の事件について聞かれたり

して大忙しだったが、そんな忙しさが落ち着いてきた頃、士郎から一本の電話があつた。

何でも、奥さんと一緒に挨拶に来るということだ  
せっかくだからゆっくり話したいと思い、土郎の自宅に誘われた。

「おお、土郎元気そうだな!？」

「エックスこそすっかり有名人じゃないか!！」

二人で肩を抱き合っている光景をニコニコ笑っている女性がいた

「おおそうだ、紹介するよ。うちの妻の桃子さんだ。」

「どうも、主人がお世話になったみたいで」

「いえいえこちらこそ、俺がこうしていられるのも土郎さんのお陰ですよ」

「まあ!！」

そんな和やかな感じで話しているとエックスは気になることを土郎  
たちに聞いてみた。

「あのさ、これから仕事はどうするんだ？」

「そうだな、実家の道場で武道教室でもやろうと思うんだ」

「わっ、私もお料理教室の回数をもっと増やすわ!！」

「そうは言っても子供もいるんだろ？それだけじゃ大変じゃないのか？」

「そうなんだが・・・」

エックスは腕を組んだまましばらく考えこむと思い切った提案をした

「桃子さんは料理が得意なんだよな？」

「ええ、そうですか・・・」



「なら喫茶店とかやってみたらどうだ？」

「だが、最近は銀行も厳しくてな。開店資金とか準備出来ないんだ」  
「なら、俺が出資してやるよ。」

「流石にそこまでしてもらう訳にはいかないよ」

「もちろんきちんと金は返してもらうし、むしろ個人的な理由があるんだ」

「「???」」

「美味しいコーヒーを俺のために出してくれないか？」

プッ

士郎が噴きだすと続いて桃子さんも大笑いしだした

「はあ、はあ、確かに桃子さんのコーヒーは世界一美味しいからな」  
「いきなり何を言い出すのかと思いましたよ」  
「そんなに笑うなよ・・・」

「いやゝスマンスマン、負けたよ。」

「じゃあ、やってくれるか？」

「ああ、こちらこそよろしく頼むよ」

「でも、問題はどんな店にするかね・・・」

「そういう事なら俺に任せてくれ」

士郎と桃子さんが首をかしげていると、どや顔でエックスはしゃべった

「俺の会社って覚えているか？」

「「あつ！！」」

「俺はこれでもその建設会社の人間だぜ？」

すぐに専門のスタッフを集めるぜ！！」

それからというもの、世界的に有名なデザイナーとか人間工学の教授とか

錚々たるメンバーが集まり、あつという間に出来上がった。

「しかしあつという間にできたな」

「まあどうせやるなら本格的にやらないとな、そっぴや店の名前は

決めたのか？」

「これを見てくれ」

そう言つて土郎と桃子さんは、セーので看板に掛けられた布をとつた看板には緑色の看板にこう書かれていた

『翠屋』

「さあお客様。本日は淹れたてのコーヒーとサンドイッチなどがですか？」

「それを頂こう。」

そうして喫茶翠屋はオープンした。

## 第2章 30ページ 帰国（後書き）

えゝやつと原作に入りはじめました。

今までつまらないオリジナル展開でしたが  
ここからは原作に沿ったストーリーを展開していきます。

第2章 31ページ 願い（前書き）

原作キャラの登場です!!

## 第2章 31ページ 願い

エックスは務めていた建設会社を辞めしばらく世界を放浪した

時には戦闘地帯に趣き闘争を繰り返した  
時には病気に苦しむ人を助けて回った

少しでも強くなるために訓練を欠かさなかった  
多くの人を助けるために治療技術を学んだ

そして、多くの人を助けたと同時に  
多くの人を助けられなかった

自分の無力さや後悔をしたときにも翠屋に行き  
美味しいコーヒーと温かい笑顔に包まれることで  
もう一度立ち直り再び世界中を飛び回った

そんなことを繰り返したある日  
エックスのモバイルフォンに着信があった

「もしもし？」

「あの・・・エックスさん・・・」

「ああ桃子さん、久しぶり。」

「お久しぶりです。あの・・・土郎さんが・・・」

「どうかしたのか!？」

「士郎さんが．．．」

電話口の桃子さんはひどく憔悴していた

電話の内容としては士郎が何者かに襲撃され生死をさまよっているらしいのだ

すぐにエックスは日本に向かった

（in病院）

「士郎．．．」

そこには全身包帯に包まれた士郎がいた

「犯人は？」

「わからないわ。ただ、外国人としか．．．」

「そうか．．．」

エックスには犯人の目安が着いていた

士郎がSPを辞めたきっけになったあの事件の犯人たちだ。

士郎が捉えた隊長と呼ばれる男は本当の隊長ではなく影武者だったのだ。

その証拠に捕まえた男の持ち物には噂となった謎の武器を持っていた

なかった

「一先ず桃子さん家に帰ろう、子供たちもいるんだろう？」

「ええでも．．．」

「大丈夫。士郎はこんなことでくたばるようなタマじゃないよ」

「わかったわ．．．」

桃子さんを家に連れて行くと

息子の恭也と美由希が言い合いをしていた

「あ！！エックスさん恭也兄を止めて！！」

「どうしたんだ？」

「エックスさん．．．父さんを襲った奴らを倒すんだ！！」

「一人で行くのか？」

「そうか．．．」

そういつてエックスは恭也の腕を掴みくるとひっくり返した

「ぐはあ．．．」

「頭を冷さんかこのバカ者が！！」

「でも．．．」

「でもない！！敵の人数や武器を把握しているのか？」

「いえ．．．」

「そんなもの自殺行為だぞ！！それに士郎を倒した連中だ、そう簡単には倒せないぞ！！」

「うるさい！！」

「待って！！恭也兄！！」



恭也は逃げるように飛び出していった、それを美由希が追いかけて行った

「桃子さん!!」

精神的に限界だったのだろう、桃子さんが気を失った。

エックスは桃子さんを寝室に寝かせるとエックスは道場に一人佇む

「ふう・・・」

深呼吸をした。

エックスは自身の体の中の魔力をゆっくり巡らせた

初めて魔力の使い方を習った時の事を思い出しゆっくりとゆっくり

と巡らせた

ピリリ　ピリリ　ピリリ

エックスはモバイルフォンを取り出し、電話を始めた

「ああ俺だ．．．うん．．．そうか．．．ありがとう」

電話を切るとエックスは夕闇に消えていった。

｝side 恭也・美由希｝

「恭也兄！！落ち着いてよ！！」

「うるさい！！付いて来るな！！」

そんな事を言いながら埠頭にある犯人グループの潜伏先と思われる  
倉庫に着いた

そして、美由希の静止を無視して倉庫に入ると二日はとんでもない

光景をみた

「なんだよこれ？」

犯人たちは既に倒されていた  
ただその倒され方が異常の一言だった

犯人たちは全員生きているのだが、  
辛うじて日常生活をおくれる程度の後遺症を負うように倒されていた

ウーウーウー

パトカーのサイレンが聞こえてきた

「恭也兄！！！」

「……」

「ちょっと、恭也兄！！！」

無理やり呆然とする恭也の腕を捕まえて倉庫から脱出した

～in高町家～

「ただいま」

「・・・」

「恭也・美由紀おかえり」

リビングでコーヒーを飲んでいるエックスがいた  
恭也は恐る恐る先ほどの聞いてみた

「あの・・・あいつらをやったのはエックスさんですか？」

「そうだ」

「何で俺を連れていってくれなかったんですか!？」

ズズッとコーヒーを飲むと

「うゝん何が違うのかなあ？同じ豆を使ってるのに何で味が違うのかな？」

「エックスさん!！」

「美由紀ちゃん？コーヒー淹れてくれる？」

「っは、はい」

ガッシャーーン

エックスの差し出したコップを恭也は叩き落とした

「エックスさん!!真面目に答えてください!!」

「理由が分からののか？」

「ええ!!」

「理由を教えてやる。道場に来い」

そういつて三人は道場に来た

「どんな方法でも構わん。俺に一撃入れてみる。武器を使っても構わんぞ。」

「本気でいきます」

そういつと同時にエックスに飛び掛つてきたが  
そのまま腕をとつて恭也を投げ飛ばす  
蹴り掛かつてくれば軸足を繰り上げる

そんな事を数分間続けていると二人に差が出てきた  
恭也は汗だくになり、倒されたり投げられたせいでボロボロ  
エックスは汗もかいていなかった。

「どうだ恭也。分かったか？」

「はあ、はあ、俺が弱いつてことですか？」

「それもあるがな．．．美由紀ちゃん？そこから見えてどうだ？」

「えつと．．．エックスさんはさっきから一步も動いていない．．．」

「!!!!!!」

「正解。お前はすぐ頭に血が上る。そんなのは足手まといにしかない」

「．．．」

ゆっくり恭也に近づき、じっと見つめた

「いいか？もう士郎は武術は出来ない体だ」

「え．．．」

「だから、もしこれから何かあつたらお前が守れ」

「でも．．．俺は．．．」

冷静になつた恭也は俯いたままだ

「恭也。顔を上げろ」

そこには汗と涙でぐしゃぐしゃの顔の恭也の顔があつた

「泣くな！！」

「ビク！！」

「男の子だろ！？泣いている暇があつたら強くなれ！！皆を守るようになれ！！」

「．．．はい！！」

それから三人で美由紀のコーヒーを飲み、恭也と美由紀は休んだ

（病室）

ピッ      ピッ      ピッ      ピッ

「士郎．．今度は俺が助ける番だ」

そういつてベットの傍らに立つエックスの手には宝石のようなものが握り締められていた

「ふん！！」

エックスが宝石に魔力を込めるとほのかに光りだした

ピシッ      ピシッ      ピシッ      パァン

ヒビが急に入った宝石は粉々に砕け破片は士郎の上に降りかかると  
跡形もなく消えていった

く翌日く

エックスが高町家に行くと既に子供たちは学校に行っており  
桃子さんだけが出てきた

「エックスさん．．．昨日はありがとうございました．．．」  
「桃子さん．．．」

夕べもあまり良く眠れなかったのだろう  
化粧で隠しているがうつすらと隈が見える

リリリリリリリ

「はい高町です．．．！！！！本当ですか！？はい、すぐに行きます  
！！！」

ガチャと電話を置くと桃子さんの目には涙が溢れそうだった

「土郎さんの．．．意識が戻たって連絡がありました！！」  
「本当か！！ならすぐに病院に行くよ！！」  
「はい！！！」

タクシー飛び乗り病院に向かった

く土郎の病室く



「士郎さん!!」

「ああ、桃子さん……」

「よかった!!よかった……」

「心配掛けたね……」

エックスはそのまま静かに病室を出た

そのまま、自分の家に帰り着替とかトランクに詰め替えたり届いていたメールの処理などの雑務を終わらせると時刻は19時になろうとしていた

「さて、そろそろ恭也たちも帰っている時間だろ」

そういつてエックスは高町家に向かったのだが、途中の公園で女の子が一人ブランコに乗っていたのだ。

別に公園なら大しておかしくないのだが辺りは真っ暗に鳴っているような時間だ

「なのはちゃん？」

「おじちゃん？」

高町家の末っ子のなのはだった

「こんな遅くまで何してるの！？早く帰りなさい。」

「うん・・・。」

「???どこかしたの?」

「あのね、お父さんが怪我しちゃって入院してるの、それにねお兄ちゃんもなんだが怖い・・・。」

「そっかあ、なのはちゃんはいライねえ、よく我慢してきたね」

「う、うわあああん・・・。」

なのはの頭を撫でてあげると堰を切ったように大粒の涙を流しながら泣き出した

エックスは泣き止むまでなのはを抱きしめながらただ頭を撫でていた

しばらくすると泣き止んだのは一人で立った

「よし!!なのはちゃんがいい子にしていたからおじちゃんが魔法をかけてあげよう!!」

「魔法?」

「そうだよ、なのはちゃんがお父さんが元気になって、お兄ちゃんも優しくなって欲しいって強く願ってご覧」

なのはは、目をぎゅっと瞑り、胸の前で手を握った

「はい、もっいいいよ」

「もっいいいの?」

「そつだよ、今からおうちに帰ればなのはちゃんの願いがかなつて  
るから」

「ほんとだよ。でも早く帰らないと魔法が溶けちゃうかもなあ」

「!!!! 私お家帰る!!!!」

そう言つて家に向かつて全力疾走していった

公園に一人取り残されたエックスはブランコに座り  
タバコに火を付けた

「ふう．．．」

もうあの子たちは大丈夫だろう

エックスは胸がぽかぽかあったまるとような感覚を噛み締めていた

「さうて、俺も土郎の顔見ながら帰るかな」

エックスは深夜士郎の病室に忍び込み  
二人きりで久しぶりの再会を祝った

## 第2章 31ページ 願い（後書き）

PVアクセス 117,000超えました！！  
ユニークアクセス 17,000人超えました！！

本当にありがとうございます。

この作品に関する感想などありましたら何でも結構です  
メッセージをお待ちしています！！

## 第2章 32ページ 時空管理局

あれから数カ月後、士郎は退院した。

医者曰く、「奇跡が起こった」とのことだ

エックスも今まで以上に高町家に出入するようになり

すっかり家族同然の付き合いをしていた、そんなある日のこと。

エックスは、夜自宅で書類整理をしていると不思議な力を感じた  
それはどこか懐かしいような雰囲気であった

それが一体何？と聞かれればよく分からないとしか答えられないが  
例えるなら、子供の頃大切にしていた絵本を見つけたような気持ち  
だった

疲れているだけだと思ったが、その力の原因がだんだんはつきりし  
てきた

「Proxy？」

エックスのデバイスProxyのような力を感じたのだ

あくまで『ような』であって違うのだが似ている雰囲気を感じた

その感覚はしばらくすると感じ無くなった

「なんだっ たんだ？ 一体？」

その日はただ疲れているだけだと思いすぐに休むことにした  
それから数年間は一切その力を感じることは無くなった

～数年後～

エックスは喫茶翠屋の一番奥の席に座ってコーヒーを飲んでいた  
いつもの定位置だ

店内は人が多くすごく繁盛しているみたいだ  
ただ、エックス以外は全員女性客だった  
ちなみに、エックスの融資は既に完済出来るのだが  
あえて全部士郎は返さなかった

あくまでエックスのお陰で建てられた店であり  
何時までもエックスにオーナーでいて欲しいとの思いからだった

そんな幸せな日々が過ぎているある日のことだった  
近くの動物病院で爆発事故があったのだ、原因は不明だが  
エックスは現場でかすかに魔力を感じたのだが、  
すぐに海外に向かわなければならず詳しく調べることは出来なかったのだが

今回は短期間であるため帰ってきてから調べようと思っていた

～数日後～

エックスは思いのほか長くなってしまった仕事を終えて鳴海に帰ってきた

「なんだ？あれ？」

エックスの目の前には、ドーム型の空間が広がっていた  
恐る恐る手を伸ばしてみると、そのまま何の抵抗もなく通れるみたいだ

意を決して中に入ると戦闘中らしく  
棒のようなものを持った子どもがお互いに打ち合っていた

「あれは、なのはちゃんか？」



その瞬間二人の間に割って入る子どもがいた  
どうやらケンカを止めたみたいだ

そうして気になったため子供たちに近寄ってみることにした

近づくとも一人のはどうやら逃げたみたいだがその一人は・・・

>>なのはちゃん!! どういう事だ? そもそも何で魔法が使えるんだ? <<

空中にいきなり緑色の髪をした若い女性の顔が映し出されなのはを  
『アースラ』という場所につれていくというのだ  
さすがにヤバくなってきたため割って入ることにした

ガサガサ

「誰だ!!」

「お前こそこの子だ？」

「我々は時空管理局だ！！」

「ああ、わかった。なのはちゃん、そろそろ日も暮れるから帰るよ」

「あ！？おじちゃん！！」

「待つんだ。その子に話がある、だからこれからアースラに来てもらう」

「ごめんね坊や、もう遅いからまた明日遊んであげてね」

「あ、待て！！」

無理やりなのはを連れていこうとするエックスに向って杖を付き出してきた

先程の行動を見る限りどうやら武器らしい

「人にそんなもの向けちゃ危ないでしょ？」

「いいから止まるんだ！！」

エックスはゆっくりと振り返り、その男の子の元に近寄った

「え？」

その男の子は自分が何をされたか分からなかった気がついたら組み伏せられていた

「はっ、離せ！！」

「君を武器不法所持で現行犯逮捕する」

「！！！」

「すぐに警察に突き出してやるからな！！」

日本の法律では現行犯であれば誰でも逮捕が可能なのだ  
このままでは埒があかないと思い、エックスは大胆な行動に打って  
でたのだ、だが

『待つてください！！』

「かあさ・・・艦長！！」

先程の女性の映像が再び映し出された

「あなたがコイツの保護者か？」

『はい。その子の母親のリンディ＝ハラウンです。』

「今まで見ていたんだろ？ならなぜ武器を構えた段階で止めなかった？」

『それは・・・その子にお話があつたからです。』

「話だと？あれはいわば脅迫だぞ？場合によっては拉致するという意味に取れるか？」

「艦長に失礼だろ！！」

「子供は黙っている」

「つく！！」

『私たちは時空管理局です。ロストログアと呼ばれる兵器にその子が関わっているのです。お願いです話をさせてください。』

「だめだ。」

リンディの申し出をきっぱり断った。

「いつまで子供のぐっこ遊びに付き合っているんだ？埒が明かないから警察を呼ばせてもらう」

モバイルフォンを取り出し警察に電話しようとする  
と先程リンディと名乗った女性が目の前に現れた。

「お願いします。どうか警察だけは・・・」

そういつてリンディは頭を下げた

「はあ・・・時空管理局なんだろ？なら警察に引き渡しても問題ないんじゃないのか？」

「それは、その・・・」

「きちんとこの国の政府に捜査権を認められているんじゃないのか？」

「いえ・・・」

「ならこの国に密入国し、勝手に捜査をし、勝手に犯人を逮捕しようとしたわけだな？」

「はい・・・」

「この国ではそれは違法行為・越権行為だ」

「分かっています。でも・・・」

「この国に来た以上この国の法律に従う義務がある。どこの馬の骨か分からん連中の話を聞く気はない」

エックスは警察に電話しようとするが圏外のようにだ

「圏外だと？」

「申し訳ありません。まだこちらの政府に知られるわけにはいいかないのです。」

ブッチーーーーー

「テメーらしい加減にしやがれ!!」

「「「!!!」」」

「このクソガキも馬鹿なら、親も親だな。どこの田舎から出てきたんだ? あん?」

「それは...その...」

「答えられないのか? テメーらのやってることはこの国では犯罪なんだよ!!」

「でも...」

「でもない!! この国で正式に捜査がしたいのならこの国の正式な捜査令状を持って来い!! 以上だ」

そういつてエックスは組み伏せていた男の子を離したのはに近寄った

「なのは。帰るぞ」  
「はっはい!!」

〈高町家〉

「と、いうわけなんだ」

エックスは高町家に着くなり家族全員を集めて先程のことを話した

「うん。確におかしな連中だな。でもなんでなのはなんだ？」

「えっとね、、その、、ユーノ君がね、、」

「ユーノ君って、そのフェレットでしょう？その子の飼い主さんなの？」

「違うんだけど・・・その・・・」

『なのは、もういいよ僕が話す。』

「「「!!!!」」」

いきなりフェレットがしゃべりだしたのでみんな驚いた

「なんでフェレットがしゃべるんだよ!？」

『あの僕は、ユーノ＝スクライアといいます。実はなのはさんを巻き込んだのは僕のせいなんです』

「詳しく聞こうか」

コーノがいうには、発掘作業中にロストログアと呼ばれる  
古代の兵器を見つけその運搬中の事故でここ鳴海に不時着し  
その搜索をなのはに手伝ってもらったというのだ。

しかも、その搜索中に謎の女の子がそれを奪おうとして戦闘になり  
それを止めるために先程の男の子、クロノⅡハラウンが現れたと  
いうのだ。

「なるほどね。だいぶ話が繋がったよ」

「なあエックス。お前は世界中を飛び回ってるんだ、その、時空管  
理局とか聞いたことあるか？」

「いや、俺も初めて聞いたよ。」

「それって、ギャングがそう名乗ってるだけじゃないのかしら？」

「母さん、いくらなんでもそれはないでしょう？」

「いや、美由紀の言うとおりだ。以前父さんを襲った連中の仲間と  
も考えられる」

「ええ！！それじゃ早く警察に連絡しないと」

「ちよつと待ってくれ」

高町家のみんなが議論している中で静かに腕を組んで聞いていた  
エックスが話したした。



「なあユーノ。お前はその危険なロストログアを発掘したって言ったよな？」

『ええ。そうです。』

「そんなでもって、それを運んでいる最中に事故にあっただよな？」  
『そうです。』

「お前、どこに運ぼうとしたんだ？」

『それは・・・そう！！時空管理局に持って行こうとしたんです』

「ふゝん。本当なんだな？」

『はい・・・』

「あの・・・エックスさん。どういことなんでしょうか？」

「恭也だけじゃなく、みんなも考えて欲しいんだが、もし拳銃が庭から出てきたらどうする？」

「それは、警察にすぐ連絡するに決まってるだろ」

「士郎の言うとおりだ。警察に来てもらうか、もしすぐにそこから動かせなければならなかったら無力化するか安全な状態にしてから警察に持って行くよな？」

「あ！！そういう事が・・・」

「士郎さんどういことかしら？」

「ユーノ君の話が矛盾しているんだよ。」

士郎が矛盾点を説明し始めた

・危険物を何の処置もせず、警察（＝時空管理局）に連絡もせずどこかに運搬しようとしたこと

・さらに事故とはいえその危険物を無くしたのに警察（＝時空管理局）に連絡していないうえに、何の知識を持たない民間人の子供にそれを探させていること

・今まで話せるにもかかわらず、動物のふりをしていたこと

「確かにおかしいわね」

「だが付け加えるともう一点ある、どうやって発掘したのかだ」というと？」

「このフエレットの姿で発掘できるか？」

「確かに・・・」

『あの・・・僕は・・・』

「お前変身でもできるのか？」

『はい・・・』

そういうと、ユーノは光り始めた

光が収まる頃には、なのはと同じくらいの年の男の子がいた

「これが本当の姿です。」

「おまえは、俺たちを騙していたんだな!!」

恭也がユーノに掴みかるが、エックスがそれを静止する

「エックスさん、止めないで下さい!!こいつは俺達をだまして、なのはの部屋に一緒にいたんですよ!!」

「分かっている。やるならなのはの目の前でやるんじゃない。」  
「わかりました」

恭也はユーノを連れて表に出て行った

「お兄ちゃん!! ユーノ君!!」

「なのは!!」

「ビクッ!!」

恭也を追いかけようとするなのはを士郎は強い口調で呼び止めて、椅子に座らせた

「なのは。何でそんな危ないことを今まで黙ってたんだ？」

「だって、ユーノ君がかわいそうだったから・・・」

「なのは。あいつはお前がそう思うように嘘をついてたんだぞ？」

「でも・・・」

ピンポン

桃子さんがインターフォンを取ると急に険しい顔になった

「士郎さん。時空管理局のリンディ＝ハラウンさんが来たわ」

「俺が出よう。」

「士郎。俺も行く」

士郎とエックスが玄関を開けるとリンディがいた

「どういったご要件で？」

「突然申し訳ありません。私は時空管理局の次元航行船の艦長をしております。リンディ〓ハラウンと申します。ぜひなのはさんにお話しがあつてまいりました。」

「・・・こちらにどうぞ」

「士郎!!」

「内容を聞いてからでも遅くはないさ」

「俺は知らんぞ？」

道場にリンディを案内すると恭也がちょうど出てくる所だった

「恭也。アイツはどうした？」

「道場の中で縛り上げているよ」

中を見ると、顔がボコボコに腫れ上がったユーノが縛り上げられ気を失っていた

「これは!!! いったい・・・」  
「入れ」

エックスがリンディを道場の中に入れると同時にビクビク震えだした

「あんたが何もしなければ、こちらは何もしない」

「あの．．．これは一体？」

「コイツはアンタらの探しているロストログアをこの町に持ち込んだ犯人だ」

「え？」

士郎は先程の事をリンディに説明した

ただその間エックスと恭也はいつ襲ってきても反撃できるように警戒していた

「わかりました。このユーノ＝スクライアは私たち時空管理局が責任をもって引き取ります」

「頼む。で？なのははどうするんだ。」

「はい。私たちが知りたい情報は既に入手しましたので、こちらか

「接触することはありません。」

第2章 32ページ 時空管理局（後書き）

私は陰獣が嫌いだ

## 第2章 33ページ プレシア

長い夜が終わった

ユーノは盗掘・ロストログアの管理外世界の違法持ち出し及び違法転売の容疑で

時空管理局に捕まった。

また、時空管理局は二度となのはの前に現れないと約束をした

また、未回収のロストログアは時空管理局が回収するということが一応の合意を得た

なのはしばらく落ち込んでいたが時間が解決してくれるということになった

だが、数日のうちに事件が再び起きた

時空管理局の局員と謎の少女がロストログアを巡って戦闘を開始したのだ

その少女を助けるためなのは飛び出してしまったのである。

エックスがその話を士郎から聞きすぐに鳴海の海上に向かった

ズドン ドン ドン ドン



エックスが見たときには、なのはに向って魔力弾が大量に打ち込まれた瞬間であつた

「なのは!!」

エックスはすぐに飛び立った

飛び立つと言っても空を飛ぶというよりも空中を蹴って進む

所謂エアダッシュなのだが、もちろん普通に空を飛ぶよりもずっと遅い

必死に蹴っていく

蹴る

蹴る蹴る

蹴る蹴る蹴る

蹴る蹴る蹴る蹴る

爆風が晴れるとそこには無傷のなのはが見えた  
一瞬安堵するが、それでもペースを落とさない

「まじかよ!!」

なのはが驚くべき行為を行ったのだ  
金髪の謎の少女に向ってなのはは、収束魔法を放ったのだ  
ただ、その威力がとんでもない！！

海に丸く穴が空いたのだ  
さらにエックスは数キロに渡って吹き飛ばされてしまったのだ

「ぷふあー！！」

海上にやっこの思いで顔を出したエックスはすぐに空中に飛び立った  
だが、問題は直撃した少女だ  
あれだけの魔力砲撃を喰らえば無事に済むとは思えない

急いで少女が落ちていくのを掴むと再び海に向って真っ逆さまに落ちていった

ザパーーン！！

なのはにエックスと金髪の少女は助けられた

「ゴホゴホ！？」

「フェイトちゃん！！大丈夫？」

「大丈夫か？」

「ええ、なんとか・・・」

直後、稲妻がエックスたちを襲う  
シールドを展開し、ギリギリで直撃は免れたが余波でもかなりの衝  
撃が来た

「あ、ジュエルシールドが!!」

「ジュエルシールド？ロストロギアの事か」

小さな宝石が稲光する雲の中に消えていった

「つく!!」

「おじちゃん!!腕が!!」

エックスの両腕は先程の稲妻のせいで所々焦げていたのだ、  
すぐ局員によって、アースラに転送されフェイトとエックスは治療  
を行われ  
現在メインブリッジにいる

メインブリッジでは、フェイトの母親を逮捕しようとする  
局員たちの映像が映し出されていた

「なのは。フェイトちゃんは疲れているみたいだから何処かで休ま  
せてあげなさい」

「う、うん。」

返事をしたがなのは動かなかった  
なのはだけじゃない、ブリッジにいる全員が動かなかった  
否、動けなかった。

フェイトよりも若干幼い子どもがポッドのようなところに入っていたのだ

その子はアリシアという名前らしいが、そのあと衝撃の事実が一同を襲った

フェイトの母親、プレシア「テストロッサ曰く

・フェイトは人造生命体であり、その研究名F・A・T・Eからとられた

・ジュエルシード（＝ロストロギア）を集めてアルハザードに行き、アリシアを蘇生させるのが目的

「ああ、フェイト。最後にいいことを教えてあげる。」

「私はね」

「あなたが生まれた時から」

「大嫌いだったのよ」

フェイトは自分の母親からの拒絶を聞き、力なくその場に倒れ伏した

「フェイトちゃん!!」

「なのは、すぐにフェイトちゃんを医務室に運ぶぞ!!」

「はい!!」

ブリッジ内にアラートが鳴り響き、

Aクラスの魔力反応が尋常でないほどプレシアの城に現れたらしい

さらに、ジュエルシードを共鳴させ次元振動が起こり始めた

「早く船を安全な空域に移動させて!!」

「了解しました!!」

移動している最中に、クロノとすれ違った

「坊主、どこに行く？」

「坊主じゃない!! 僕の名前はクロノだ!!」

「ああ、分かった。それでどこに行く？」

「現地に行つて元凶を叩きます!!」

「なら、俺も行こう」

「し、しかし、魔法も使えない一般人では危険です!!」

「ここで議論している時間はない!! 大丈夫だ、すぐに行くぞ!!」

「わ、私も行きます!!」

「なのは!?! たつく、それよりも現地向かうぞ」

アルフという女性にフェイトを預け

三人はプレシアの元に向かった

「しかし、すごい数だな」

「クロノ。どう攻める？」

「正面突破しか無いでしょう」

「なら、話は早い。とつととぶん殴つて進むぞ!!」

「しかし、武器も持たないのは危険です!!」  
「大丈夫!!」

そういつてエックスは突撃した

まず一体目の敵の腕を武器ごと切り落とす  
切り落とした腕に逃げられているトマホークと一緒に斜めに切り上げた  
後ろから襲ってきた二体目の敵は、振り返りざまに叩き込んだ裏拳一発で沈めた

「す、すごい・・・」  
「武器が用意できた」

そういうと、エックスの何倍もある巨大なトマホークを軽々と担ぎ次の敵へと斬りかかっていった

「ぼ、僕たちも行くぞ!!」  
「うん!!」



3人はプレシアの元へ向かった

## 第2章 33ページ プレシア（後書き）

プレシアは忘れられた都アルハザードへ行けるのか？  
フェイトの運命は？

次回投稿をお楽しみに

## 第2章 34ページ 母と娘

「うおりゃー!!」

エックスは、トマホークで魔法人形を叩つ斬る  
なのはとクロノは魔力弾で一体一体倒していくが  
奥からどんどん魔法人形がやってくる

「っちい、キリがないな」

「はぁ、はぁ、このままでは次元振がおきてしまう」  
「なのは!!! 危ない!!!」

龍の形を模した魔法人形がなのはの死角から襲いかかる

「キャアー!!!」

なのは目を瞑り、次にくるであろう衝撃に耐えようとするが  
痛みはおろか衝撃もなかった

恐る恐る目を開くと、真つ二つになった魔法人形が  
地面に落下していく光景だった

「フェイトちゃん!!」

「なのは、大丈夫?」

「フェイトちゃんこそ大丈夫なの?」

「私もバルディッシュも大丈夫」

『Yes , Sir』  
もちろんです

「なのはから離れる!!」

クロノがフェイトに杖を向ける  
身構えるフェイト

「クロノ!!そこどころじゃないだろ!?!」

「しかし、彼女は・・・」

エックスはクロノの言葉を待たずにフェイトに問いかける

「フェイト。プレシアの元に行けばさらに傷付くかもしれんぞ?」

「分かってます。でも・・・」

「でも?」



「それでも、私の母さんだから!!」

フェイトの強い決意を聞き届けるとエックスは微笑みながら  
目の前の魔法人形を切り伏せる

「ならば俺が道を作ろう!!」

エックスがさらに魔法人形を斬りつけようとすると  
オレンジ色の塊が、魔法人形を貫いた

「アルフ!!」

「私はあの女が大嫌いだ!!でも、フェイトがあの子のもとに行く  
なら私がフェイトの道を作るよ!!」

「ありがとう・・・アルフ・・・」

フェイトは涙を流さないように力強く頷いた

「一気に行くぞ!!」

「「「はい!!」」」

エックスの激に皆が同意する  
それから少しづつではあるが、プレシアのいる最深部へと近づいた

「エックスさん!!」

「うち、腕が限界か・・・」

エックスの両腕に巻かれた包帯がうつすら血で赤くなっていた

「下がってください!!!ここは私たちがどうにかします」  
「まだまだあ!!!」

壁をぶち破って大型の魔法人形が現れる  
エックスがさらに斬りかかるが、  
シールドがシールドに弾かれるだけでなく、  
エックスの持っていたトマホークが碎ける

「うち!!シールドか・・・」

「エックスさん、下がって!!!」

「フェイト!!!」



「サンダーレイジ!!」

フェイトの、斬撃魔法がシールドに弾かれる

直後、魔法人形の肩に備えられたキャノンに魔力が集まり始める

「防御が硬い・・・でも私たちなら・・・」

「うん!!うん!!うん!!」

なのははうれしそうに頷く

「いくよ・・・バルディッシュ!!」

『Get set (準備完了です)』

「お願い、レイジングハート!!」

『Stand by ready いつでもいきます』

ふたりのデバイスが、ふたりの決意に答えるように変形する

「サンダーバスター!!」

「デイベイン・・・バスター!!」

二人の攻撃はシールドを突き破り  
魔法人形を破壊する

「もうなのはは、子供じゃないんだな．．．」

エックスは大剣を持った敵を殴り飛ばすと  
目を細めながら二人を見つめた

「フェイト！！ここはどうかする、お前はプレシアの元にいけ！  
！」

「でも．．．」

「大丈夫だよ。フェイトちゃん。」

「なのは．．．ありがとう」

「クロノ！！お前となのはは、ジュエルシードを止めてこい！！」

「エックスさん！！」

エックスは、機関部へと通じる道を作ると、二人を見送った

「さあて、ここから先はR指定だ」

エックスは全身に魔力を巡らせた

早く

強く

それでいても、決して雑にならないように

「はぁーーーー！！！！」

エックスの全身の筋肉が膨れ上がる  
両腕の包帯が耐えきれずはじけ飛ぶ

火傷の痕がみるみる再生を初め  
ボロボロと皮膚が崩れ落ち、その下から新しい皮膚がすぐに作られる

「ドラーーーーー！！」

シールドごと魔法人形をぶち抜くがエックスの右腕は骨が折れ  
皮膚を突き破る  
しかし、それと同時にすぐ再生を初める

振り抜きざまに回し蹴りを叩き込むがその足もすぐに再生を始めた

「はあ、はあ、」

辺りには魔法人形の破片とエックスの血が散らばる

「なのはは．．大丈夫か、なら」

フェイトの元に向かおうとするが足がもつれ倒れる

「へへ、血が足りねーや」

エックスは壁に手を着きながらフェイトの元へ足を進めた

｝sideフェイト｝

「かあさん!!」

「何をしに来たの？」

自分の元に駆け寄るフェイトにプレシアは血を吐きながら問いかける

「・・・消えなさい・・・あなたにもう用はないは」

「あなたに言いたいことがあつてきました」

プレシアはフェイトを見つめる

「私は．．．」

言葉を探しながら  
万感の思いを込めて  
自分の決意を込めて  
フェイトは続ける

「私は、アリシア」テストロッサではありません。あなたの作った  
ただの人形かもしれません．．．」

プレシアは、一瞬目を伏せるがすぐにフェイトを見つめた

「私．．．フェイト」テストロッサは、あなたに産んでもらった、  
育ててもらったあなたの娘です！！」

「ふふふ、あつはつははー、くだらないわ」

「それくらいにしたらどうだ？」

プレシアとフェイトが振り返るとそこにはエックスがいた

「もういいんじゃないか？プレシア」

「どついつことかしら?」

若干驚きつつエックスに問いかける

「プロジェクトF・A・T・Eは、死者を蘇らせるために生み出された研究だったな?」

「だったら何?」

「なら、アリシアはもう生き返らないことくらい分かっているんだろ?」

ブレシアは、目を大きく開きながら驚いた

目の前のこの男はいつたいたいなんなのだ?

なぜそんなすべてを見透かしたような目をしているんだ

「アリシアの魂と呼ばれるものは、このフェイトの体に入っている」  
「え?」

フェイトは驚いた

アリシアの魂が私の中に?

エックスは話しを続けた

「当初は、一時的に魂を保存し、オリジナルの肉体が再生した段階で移し替えるはずだった」

「・・・」

「だが、事情が変わった。魂が新たな肉体に馴染んでしまった。一度馴染んだ魂を取り出すためには、もう一度殺さなければならぬ。」

「そうよ．．．」

さきほどまでの高圧的な態度ではなく、母親の顔でプレシアが答えた

「だが娘を殺すことが出来なかったお前は、あえて嫌われようとした．．．自分の寿命が尽きる前に」

「かあさん．．．」

フエイトは不安げな顔でプレシアを見つめる

「自分の寿命を少しでも伸ばすために集めていたジュエルシードだったが、時空管理局が介入してきたことにより、自分が無理やりフエイトにやらせたことにした」

「ううう．．．」

プレシアは、静かに涙を零した

最も愛した娘を傷つけること、

最も愛した娘に嫌われること

最も愛した娘が自分亡き後に傷つかないためにしてきたこと

「自分の娘を信じてやれよ」



その傷付いた心にエックスの言葉はゆつくりと染み渡っていく  
その優しさにプレシアは耐えられなかった。

「その子は、アリシアじゃ．．．私の娘じゃないわ．．．」  
「プレシア！！」

それでも、愛する娘をせめてこれ以上傷つけないために  
自分がいなくなった後、自由に生きて欲しいから

今すぐフェイトを抱きしめたい気持ちと一緒に  
壊れそうな心を抱えながらの精一杯の言葉だった

「もう、戻れないわ」

プレシアは、持っていた杖で地面を叩いた  
直後、激しい振動と共に地面に亀裂が走る

「バカヤロウ!!」

エックスがプレシアの元に走る  
カラカラと音を立てて、地面が崩れていく

「かあさん!!」

フェイトも駆け出した

亀裂にプレシアが飲み込まれた

「……！」

エックスがプレシアの手をギリギリで掴む  
しかし、アリシアにのポッドはそのまま、亀裂に飲み込まれた

「アリシア!!」

「っぐ!!」

プレシアはアリシアのポッドを掴もうとするが届かなかった

「かあさん!!」

フェイトの力を借りてプレシアを引き上げる

引き上げたプレシアをエックスは平手で頬を叩き、胸ぐらを掴む

「自分の子供を信じる!!最後まで全力で愛せ!!」

「でも。私は・・・」

「かあさん。私は・・・アリシアじゃないけど、あなたの娘です」  
「フェイト!!」

プレシアとフェイトはお互いに抱き合って泣いた  
ただ泣いた

自分を母と認めてくれた娘の優しさに  
自分を娘と認めてくれた母の優しさに  
このかわいそうな二人はお互いを許し・認めた  
そして、ただ泣いた

ドガン

天井を砲撃で突き破ってなのはとクロノが現れた

「フエイトちゃん!!おじちゃん!!」

「クロノ!!ここはもうもたない!!すぐ転送の用意だ」

「分かりました!!」

安全な場所まで避難した後、全員アースラに無事転送された。

第2章 34ページ 母と娘（後書き）

えー実は映画版は見ていません。

ので、設定とかストーリーは完全オリジナルです。

## 第2章 35ページ 親心

アースラに収容後、すぐにエックスとプレシアは医務室に搬送された

エックスの体は一剣問題ないように見えるが

全身の破壊と再生を繰り返したため、体内バランスが崩れている状態だった

「何でもいい．．．食いもん持ってきてくれ．．．」

医務室のエックスの元にお粥が持つてこられたがすぐに

食べ尽くしそれでも足りないため、どんどん持つてくるように局員に頼んだ

374

チャーハン・ラーメン・サラダ・パスタ・焼肉etc．．．

自身の体積を超える程の食事を平らげたエックスはやっと一息ついた

「しかし、すごい量を食べましたね．．．」

「食った分はすぐに体の構築に回したからな」

「エックスさん．．．」

クロノ・フェイト・プレシアは呆れたような顔をしていた

一方なのは小さい頃からエックスの食事を見慣れていたため

あまり驚いていなかった

「あの、エックスさん．．．」

プレシアはフェイトの手を握りながらエックスに問いかけた

「あなたは一体ものなの？」

「僕も詳しく聞きたいと思っていたんだ、なぜあんなにもプロジェクトF・A・T・Eに詳しいんですか？」

「ふむ．．．行っておくが俺はお前たち以上の事は知らないぞ？」

「どういう事かしら？」

エックスは以下のように説明した

- ・プロジェクトF・A・T・Eは死者を蘇らせるための研究である
- ・情が湧くのに関わらず同じ姿の子供を作ったこと
- ・嫌いにも関わらず、アルフをなのはとエックスのいる町にあえて逃がしたこと
- ・フェイトへの虐待も決して後遺症が残るような事をしていない
- そして、すべて自分の手で虐待していること
- ・管理局の目の前であえて、フェイトとは無関係であることを強調したこと

「以上を考えると、プレシアが言うように本当にフェイトが嫌いとは思えなかった。むしろ、フェイトをどうにかして助けようとしていると思ったんだ。」



「どういう事かまいちピンと来ないんですが．．．」

「それはな、もし本当に嫌いならなぜアルフを逃がした？今後の計画に支障が出る可能性があることくらいすぐに分かるはずだ」

「そう言われてみれば．．．」

「あなたの言うとおりよ．．．」

プレシアはフェイトの手を強く握り締め事のあらましを語った

「確かに当初はアリシアの体が再生でき次第、すぐに魂を戻すはずだったわ．．．でも、そのためにはフェイトを殺さなければならなかったのよ」

一同は静かにプレシアの言葉の言葉に耳を傾ける

「でも、出来なかったわ。何度もやろうとしたけど、アリシアと同じ．．．

娘を殺すなんて出来なかったわ、

そのうちに、私の体は長くないことを知ったわ、このまま私が死んだ後、

一人残されたフェイトが無事に生活できるようにするために、ジュエルシードを奪わせたわ」

「だからユーノにジュエルシードを運ばせたんだ？」

「ええ．．．」

つまりこの事件は、ジュエルシードを裏で売買しているユーノから

購入し

運搬中にフェイトに襲わせたのだ

プレシアの頬には一筋の涙が零れた

「フェイト．．．ごめんね。今まで辛かったでしょう．．．」

「うん。だって、かあさんを信じていたから．．．」

「ごめんね．．．ごめんね．．．ごめんね．．．」

「うん．．．うん．．．」

二人は泣きながら抱き合った

二人が本当の意味での母娘になった

フェイトとプレシアは今回の事件の取調べのために、ミッドチルダへその後、エックスとなのはは鳴海に移送された

家に帰るとなのはは大層士郎に怒られたが無事に帰ってきたことを全員が喜んだ

夕食後、高町家にリンディがやってきて家族に正式に謝罪を行った  
その場でなのははいきなりとんでも無いことを言い出した

「私、フェイトちゃんみたいに困っている人達を助けたい!!」

初めは将来そんな職業に就きたいのかと思ったら

管理局で働きたいということらしい

流石に家族は反対したのだが、なのはの意志は固く家出をしてでも行くと言い出し

リンディを巻き込んで大喧嘩に発展した

リンディはすぐに返事を貰えるとははじめから思っていなかったらしく

明日また来るということになり、それまで家族でよく話しあって欲しい

ということになった

道場にて、士郎は一人なのはの事を考えた  
生まれたとき

初めてお父さんとしやべったとき

友達と喧嘩して泣いて帰ってきたとき

小学校の入学式の日

友達と楽しそうに遊んでいるとき

士郎はずっとなのはのことを考えていた。

「士郎。一杯どうだ？」

「ああ、もらおうか」

バカルディの酒瓶と二つのショットグラスを手にエックスが現れた

とくん．．． とくん．．． とくん．．．

「乾杯」

「乾杯」

チンと、グラスを鳴らしてなみなみ注がれた酒を二人は静かに飲む  
喉から胃まで酒の熱い感覚が伝わる

「なのはは、気がついたらずいぶん大人になっていたんだな．．．」  
「どうしたんだ士郎？ずいぶん老け込んだみたいだぞ」

「そうかも知れないな。つい最近まで、俺の後ろを歩いていたと思  
ってたんだが」

「気が付いたら俺の前を歩いていたよ」

「そうだな」

「いつかは大人になると思ってたよ」

ぐいっと士郎は半分ほど残っていた酒を一気に飲み干した

「でもな、頭では分かっているんだが、親ってのはそう単純じゃな  
いんだよな・・・」

「そうだな」

エックスは空いた士郎のグラスに酒を注ぎ  
自分のグラスに酒を注いだ

「子供もいつかは大人になるんだよ」

「でも、まだ早いんじゃないか？」

「確かにそうだな、そのために俺たち大人がいるんじゃないのか？  
士郎。」

ふふつと二人は笑うと、二人は酒を飲みながら夜が更けていく



## 第2章 35ページ 親心（後書き）

親の視点で書いてみました。

少しずつかもしれませんが、管理局を初めとした魔法世界を書いていきたいと思います。

## 第2章 36ページ 子離れ

翌日、士郎はなのはに管理局に行くことを条件付きであるが認めた  
その条件とは、

『こちらの世界の高校卒業までは正規の職員にならないこと』

父親としてできる精一杯の譲歩であった

なのははそれでも「ガンバル!!」と大いに喜んだ

それから数日後、なのはの元に意外な人物が訪ねてきた

「なのは」

「フェイトちゃん!!」

フェイトがリンディとなのはと二人で訪ねてきたのだ。

フェイトはまだ未成年である為、保護観察処分がすぐに決定し  
後見人としてリンディが名乗りをあげたのだ。

「フェイトちゃんのお母さんは？」



「うん．．．まだ裁判が終わっていないからどうなるか分からないけど、

多分もう一緒には暮らせない．．．」

「そんな．．．」

「でもね、きちんと病気の治療をしてくれてね、前よりもずっと体調がよくなった言ってたし、

会いたいつて言えばすぐに会わせてくれるんだよ。」

「そうなんだ。よかったね、フェイトちゃん!!」

「うん!! ありがとう、なのは。」

以前よりも表情が豊かになったフェイトはキラキラ輝くような笑顔で答えた。

「あとね、今日はなのはさんにお知らせがあるのよ」

「お知らせ?」

「実はね、フェイトさんはなのはさんと同じ学校に通ってもらったのよ」

「本当に!!」

「うん」

はち切れんばかりの笑顔でなのはとフェイトは喜び合った

ただ、その光景を見ていた一般の人はこのように思ったらしい．．．  
『なのはちゃんのおさげつて、感情と共に動くんだなあ』と

「数カ月後」

なのはとフェイトはまるで幼馴染みのように毎日一緒に過ごした

特にフェイトが転入した直後は質問攻めにあい

今まで同世代の子と接してこなかったフェイトが困っているときにアリサとスズカに助けられたため、今では『聖祥4姉妹』と呼ばれるほどの中になっていた。

「Side エックス」

エックスは、ミッドチルダから歴史に関する文献を取り寄せひたすら自宅と図書館に籠っている日々が続いていた。

「うーん、辻褄がなかなか合わないなあ」

図書館外の喫煙スペースで頭を掻いていた

古代ベルカ時代に関する情報を整理しているが

話が文献によってかなり違うのだ、そのためエックス自身の記憶と齟齬が生じ

エックスがいた時代の未来なのか、平行世界の未来なのか判断がつかなかったのだ。

「もうちょい調べるか」

そう言つて、エックスはうず高く本が積まれた自分の席に戻った

しばらく、文献を読んではノートに書き写すということをしていたとき、

ふと、なんの気なしに本棚を見ると、車椅子の女の子が少し上にある本を

取ろうとしていたのだが、なかなか手が届かず難儀しているみたいだった

「お嬢ちゃんが欲しい本はどれだい？」

「えっと、その本です。」

「はい、他にはあるかい？」

「じゃあ、あの本と、そっちの本もお願いします」

「はいはい」

いくつか、本をとってあげるとその子は、にこにこしながら受け取りお礼を言った

エックスは自分の席に戻ると、後ろからその子も付いてきた

「あの、すいません。ここ空いてますか？」

「ああ、いいよ」

「おおきに。ところでお兄さんは何でそない難しい本を読んではるん？」

「ああこれかい？ちよつと歴史に関する事を調べていてね」

「学者さんなん？」

「いやいや、ただの趣味だよ。ところでお嬢ちゃんは家族の人は一緒じゃないのかい？」

「うち、一人で来たんです」

「一人で！？家はこの辺りなのかい？」

「えつと、あの辺なんです」

そつするとその子はエックスの家の方を指差した

「家の近所だな。じゃあ帰りに送っていつてあげるよ」

「そんなん申し訳ないわ」

「子どもが遠慮するんじゃないよ」

「でも・・・」

そんなやりとりをしていると、本を抱えた司書が近くを通りかかった際に話しかけてきた

「エックスさん。普通は知らない大人に付いてなんか行きませんか？」

「うおー！そうだな．．．いやぁ申し訳なかったね」

「いえ、うちは．．．」

「でもはやてちゃんこの人の事知っているでしょう？」

「え？」

「あら？じゃあその本の作者見てご覧なさいな」

そういうと、司書ははやての持つ一冊の本を指差した

はやては裏表紙をめくるとそこには、エックスの名前があった

「あー！お兄さんがこの本の作者やったんか！？」

「なあに、趣味で一時期書いたものだよ」

「うちこの本好きなんです。世界中のいろんな所旅して．．．

うちもな、この足が治ったら世界中を旅するんが夢なんや」

「お嬢ちゃんの足は絶対に良くなるよ。そしたら俺が好きなところ連れて行ってあげるよ」

「えへへ、ありがとうな。って自己紹介がまだやったわ。うちは八神はやてっていいいます。」

「エックス」ステングレイだ。」

二人は握手を交わした

## 第2章 36ページ 子離れ（後書き）

これで、第二章は終了し、次回から第三章A・S辺がスタートです。

やばい、第一章と第二章のボリュームの差が大きいですけど  
そこら辺は第三章では、解決できる見込みですのでお楽しみに！！

感想を随時募集中です

作者は褒められても怒られても伸びる子です！！  
でも放置するとすぐに腐ってしまいます・・・

### 第3章 37ページ 家族

エックスは図書館に一日中籠っているため  
たびたびはやてと会う機会があつた

エックスが世界のどんな場所に行ったとか  
どんな人に会ったとかそんな話を  
キラキラした目をしらしながらはやては聞いていた

そのうちに、外国から来た親戚という人が付き添うようになった  
何でも色々観光で回つてりしているらしく、  
日替わりで付き添いの人が代わつていった

今日はシャマルという人が付き添いだ

「はやてちゃん。そろそろ帰らないと体に悪いわよ」

「えゝ、ええやんかシャマル。もうちょいだけ？な？ええやろ？」

「んもゝはやてちゃんたら」

ここ最近はやての顔色があまりすぐれない  
本人は大した事無いと言っているが、明らかに図書館にいる時間が  
短くなっている

「はやて。あまり無理するんじゃないぞ？」

「おおきにな。エックスさん」

エックスの調べ物はあまり芳しくなかったがそれでも気分転換にはなっているため、あまり気にしていなかった

それから数時間後、すっかり辺りが夕焼けのオレンジ色に染まるころエックスとはやて達は家路に着くことにした

エックスの愛車のハイエースにはやてとシャルルを乗せて送っている車中で

シャルルが夕食にでもこないかと誘ってきた

はじめは断っていたエックスだったがいつも送ってもらっているお礼だからと  
言われ、そういう事ならと了承したのだ

～夕食後～

はやてとシャルルはお風呂に入り  
居間では、エックス・シグナム・ヴィータ・大型犬のザフィーラだけが残された



「エックスさん」

「ん？なんですか？シグナムさん」

「あなたの調べものについて教えてもらえませんか？」

「調べ物？なあにただの趣味でやってる歴史探求だよ」

シグナムは真面目な顔なりソファに座り直すととんでも無いことを  
言い出してきた

「あなたが調べているのは古代ベルカ時代ではありませんか？」

いつもキリツとしたシグナムだったが、目の前のシグナムは非常に真剣だった

いつもふざけているヴィータですら真剣な眼差しで返答次第によっては

容赦しない雰囲気だった

「そうだ。確かに俺が調べているのは古代ベルカ時代だ」

「ではあなたの目的はなんですか？」

「目的？ふん．．まあ簡単に言えば何が起きたのかを知りたいんだ」

「何が起きたのかですか？」

「そうだ。当時は今以上に科学が発達していたのに、なぜ突然滅ん

だのかを知りたいんだ」

「知った後はどうするんですか？」

「分からない」

「分からない？」

「正直な話し、それを知ったからと言って俺がどうすることも出来ないし、考えたこともない」

「そうですか・・・」

納得したかどうか分からないような

上手くはぐらかされたような感じのままシグナムは答えた

「今度はこっちから質問させて貰いたい」

「私に答えられることであれば」

「お前たちは何者だ？」

ヴィータは自分の身の丈ほどの巨大なハンマーをエックスに突きつけた

ザフィーラは今にも襲いかからんばかりに歯をむき出しに低く唸った

「ヴィータ・ザフィーラやめろ！！」

「だってよ！！」

「いいから武器をしまえ！！」

「あゝもゝ難しい駆け引きとかに苦手なんだよ！！なあエックス、あんたアタシ達の正体を知ってどうするんだ？」

「何もしない」

「あん？」

「別にお前たちが誰でもいい。だが、はやてを決して不幸ににさせないで欲しい」

そう言つてエックスは頭を下げた

今すぐにでも飛びかからんばかりのヴィータは驚いた

命乞いでも

誤魔化しても

虚勢でもなく

お願いをしたこの男に自分が武器を突きつけているのはとてもひどいことをしていると感じたのだ

「エックスさん、失礼な事をお聞きして申し訳なかった」

「悪かったよ・・・」

「すまない・・・」

「いや、それよりもはやての事を任せてもいいのか？」

「もちろんだとも。我らの命に変えても主はやては必ず守ると剣に誓おう」

「ありがとう」

エックスは今まで一人暮らしたたはやてに家族ができた事を心から喜んだ

4人の家族ができたはやては、それ以上に嬉しいことだろう・・・

4人？

あれ？今の『すまない』ってしゃべった男って誰だ？

部屋の中を見渡しても男の姿は一切見えない

恐る恐るザフィーラを見るが『どうかしたのか？』という顔でこつちをみている犬しかない

「ザフィーラってオスだっけ？」

「ああ男だ」

エックスに問いかけにザフィーラは当然という顔で答えた  
犬なのに・・・

「犬がしゃべった!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

い エックスの叫びは風呂場にいたはやてとシャマルにも聞こえたらし

### 第3章 37ページ 家族（後書き）

原作A・S編スタートです!!

ちなみに私はヴォルケンリッターの中で  
ヴィータとシグナムが好きです。

きっと他の二人よりも登場回数が多いでしょう。

でもザフィーラはあまり好きでないので下手をすればほとんど出番  
はないでしょう。

### 第3章 38ページ 新たな火種

あくる日の夕方翠屋にて、エックスはコーヒーとサンドイッチを堪能していた

「あゝ、やっぱり桃子さんのコーヒーはうまいね」  
「クス、ありがとうございます」

ゆつくりとした時間が流れる

「いらつしゃいませ、あら、なのはじゃない」  
「ただいま、おかあさん」  
「「「お邪魔しまーす」」」  
「あら、みんなもいらつしゃい」

なのははフェイト・アリサ・すずかたちと一緒に翠屋にやってきた今日はみんなでお茶にしようというのだ  
なのはは、はりきってエプロンをつけると桃子さんと店の奥に入っていた



「ちょっとあんた何見てんのよ!？」

「ん？俺か？」

「そうよ!―ずっとこっち見てたでしょ!？」

「ちよつと、アリサちゃんやめなよ．．．」

「すずかは黙ってて!―」

「それに何？こんな時間に仕事もしないであんた何してんの？」

「いや、コーヒ―を飲んでいるんだが．．．」

「見れば分かるわよ!―どうしてこんな時間に男一人でいるのか聞いているのよ!―」

何か虫の居所が悪かったのか、ぎゃーぎゃー騒ぎながらエックスにアリサは

詰め寄っていた

「アリサちゃんどうしたの？」

「あ、いいところに来たわなのは、コイツ不審者よ!―」

ビシッとエックスに指差すアリサなのだが．．．

「あ、おじちゃん、いらっしやい!―」

「ちよ、なのはコイツ知ってるの？」

「助かった、なのはこの子にちよつと説明してあげて」

「あらあら、なのはは座っていいわ。私から説明しましょうか？」  
「お願いします」

桃子さんはアリサにエックスの事を説明した

「ごめんなさい!!」

「いやゝ分かってくれればいいんだけどね」

「だから止めたのに・・・」

「え!?!ずずかは知ってたの?」

「うん。パパの会社のパーティーで会ったことがあるわ」

「ああ、やつと思い出した!!月村さんとこの末っ子のずずかちゃんじゃん!!いやゝ大きくなっただね」

「おじさまこそお久しぶりです」

「ちよつとすずか！何で知ってたのに止めなかったのよ！！フェイトも知ってたら教えなさいよ！！」

「ごめんね．．．アリサ．．．」

「フェイトは謝ることは無いわ、アリサの自業自得よ」

「にやはは．．．すずかちゃん．．．」

「んん．．．まあいいわ」

そういつとエックスに向き直り

真剣な顔になり自己紹介を始めた

「私はアリサⅡバニングスと申します。先程の失礼をお赦してください」

そういつて、制服のスカートをちょこんとつまんでお辞儀をした  
一瞬驚いたエックスであったがすぐに、自己紹介を始めた

「私はエックスⅡステイングレイと申します。レディに先に名乗らせる無礼をこちらこそお許し願いたい」

そういつて、エックスはアリサに頭を下げた

そんな二人にやり取りをポーっとした顔でなのは見ていた

「なのは？なのは！！」

「ひゃい！？」

「大丈夫？なのは・・・怪我が痛むの？」

「なんでもないよ、フェイトちゃん！！」

「ならいいんだけど・・・」

なのはは、いつも遊んでいるアリサとエックスの優雅な挨拶がまるで映画のワンシーンのように見え、つつい見とれてしまったのだ

だがそこでフェイトの言った一言が気になったので聞いてみた

「ん？なのは、お前どこか怪我しのか？」

「ほんのちよつとだけだよ。もうフェイトちゃんもおじちゃんも大げさなんだから」

「ならいいんだけど」

エックスはそういうとコーヒーに口をつけながら  
先程まで読んでいた本に目線を落とし始めた

『あの・・・エックスさん』

『フェイトか？どうした念話なんかで』

『なのはのことなんです。．．この間魔法騎士に襲われて．．．リンカーコアを抜き取られたんです』

『詳しく聞こうか』

エックスは胸ポケットからサングラスを取り出すとそれをかけ、窓から見える景色を眺めるふりをしながらフェイトと念話をした

『はい。最近あらゆる次元で魔力素質を持った者が襲われ、リンカーコアを抜き出される事件が発生しています。』

『それでなのはが襲われたと？理由は？』

『第一級ロストロギア「闇の書」ではないかと言われています』

『そうか、ありがとう。こっちでも詳しく調べてみるがまた襲ってくる可能性があるから気を付けるんだぞ？』

『ありがとうございます』

エックスは話を聞くとすぐに席を立ち会計を済ませるとどこかへと出かけていった

「エックスの自宅」

エックスは帰宅するなりいくつかの本をパラパラとめくり闇の書と呼ばれる

ロストロギアを調べていた

「これかな？」

闇の書

持ち主の意志とは関係なく魔力反応からリンカーコアを吸収し

持ち主に吸収した魔力と魔法を与える禁断のロストロギア

さらに、持ち主が死ぬと次の主を探しに色々な次元を渡り歩くと言われている

「ふむ、かなり厄介な代物だな」

そう言うとノートパソコン型の通信機のコンソールを叩き  
クロノへと繋いだ

「ああ、エックスさんお久しぶりです」

「久しぶり。元気そうだな？」

「お陰さまで、ところでまた新しい本の注文ですか？」

「いや、今日は別件だ」

いつも以上に真面目な顔をしたエックスを見て  
クロノはただごとではないと感じた

「闇の書と呼ばれるロストログアを知っているな？」

「ええ、我々管理局が探している第一級の危険なロストログアです」

「それに関わっていると思われる連中がなのはを襲ったらしいな？」

「・・・はい。どうやら鳴海を中心に事件が多発しています、

さらに今回の事件はまだ死人がでていませんがいつそこまでなっ  
てもおかしくないです」

「犯人の目星は？」

「いえまだ・・・ただなのはを襲った犯人の映像があります」

そういつて、エックスのもとに転送ポートから写真が送られた

「やはりな．．．」

「何かいいましたか？」

「いや何でもない。何か分かったらすぐに情報共有を頼む」

「こちらこそ、何でもいいので情報をお願いします」

通信機を閉じてエックスはタバコに火をつけながら

大きく煙を吐き出すと、もう一度送られた写真を見た

「やっぱりあいつらか．．．」

そこには、最近引越してきたという話のはやての家族が写っていた



### 第3章 38ページ 新たな火種（後書き）

えゝ予想以上にA・S編を忘れていたことが判明し  
現在一話から見ています。

この後の更新は少し遅くなるかもしれませんが  
原作好き・オリ主好きのどちらの方も楽しめる作品に  
仕上げたいと思いますのでしばらくお待ちください

### 第3章 39ページ 治外法権

あくる日エックスははやての家に行った  
家にはシグナム一人で留守番をしていた  
今日はやては病院いつているらしい

「して、何の用だ？」

「これはお前たちか？」

エックスは数枚の写真を見せた

「貴様！！」

シグナムはすぐに自身のデバイスであるレヴァンティンを構える

「やはりお前たちだったのか・・・」

「貴様は管理局の人間だったのだな！！主と我らを騙していたのだな！！」

「違う！！」

「嘘を付くな！！なぜこの写真を持っているんだ！！」

一触即発の空気が辺りを支配する

今にも斬りかかろうとするシグナムとそれを嗜めようとするエックス

「管理局にはお前たちの事は教えていない、ただ確認したいことがあったのだ」

「それを信じると？」

「もし、知らせていたらここにいるのは管理局の人間だぞ？」

シグナムの目をじっと見つめエックスは訴えた  
若干

「先程確認したいことがあると言っていたが？」

「お前たちは何のために、リンカーコアを集めているんだ？」

「主はやてのためだ」

「はやては命じたのか？」

「いや．．．我らが勝手にやってこと。主は一切関係ない」

「そうか．．．なら事情を話してくれないか？」

「それを聞いてどうする？」

どうする？

確かに、自分はどうする事もできないかもしれないな．．．

そうやって考え込んでいると、シグナムはレヴァンティンを待機状態に戻した

「もう帰ってくれ。そして二度と我らの前に現れないでくれ」

「シグナム、俺は．．．頼む！！」わかった．．．」

エックスは八神家を出た

季節は秋から冬に移り変わる時期

玄関前に停めた愛車のSRのエンジンを掛けた

ドッ

ドッ

ドッ

ドッ

ドッ

単気筒エンジン独特のアイドリングを奏でていた

もう一度八神家を見る

来た時と変わらないはずなのにいつもよりも暗く見えた

ガチン

バイクのスタンドを立ててエックスは走りだした  
しばらく、何も考えずただひたすら走り続けた

ウ〜〜

ウ〜〜

ウ〜〜

「そのバイク止まりなさい」

「あ？警察か・・・」

いつものエックスならすぐに停止するはずだったのだが・・・

グオオオオオオオオ...

さらにアクセルを開け、加速した

「止まれ!!」

白バイはエックスを追いかける

エックスのバイクはSR400をベースにボアアップしてあるが単気筒

一方白バイはCB750Fourの4気筒エンジン

通常排気量が上がればエンジンパワーは増し

単気筒よりも4気筒の方が加速力に優れていると言われている

今回もその例外に漏れずぐんぐん白バイはエックスに迫りしまいには  
追い越されてしまった

ギャ!!ギャ!!ギャ!!

エックスは前輪のみブレーキを掛け

ジャックナイフ状態になったかと思うとそのまま90度ターンし裏  
路地に入った

すぐに白バイが迫って来るが

狭い裏路地では、750の車体は大きく思うように取回しが効かないらしく

だんだんと差が付けられてしまった

ファン ファン ファン ファン

どこからともなくパトカーと白バイが集まってくる  
だんだんとイライラしてくるエックス

「普段は仕事しないくせに!!」

それから、裏路地と車の間をひたすら走り続けた  
エックスはある場所に向って走っていた  
その場所とは県境である。

なぜ県境なのか？

警察は担当管轄というものがあり、勝手に別の管轄の警察が逮捕したとなれば色々ながらみでとても面倒なのだ

だが、今度はその管轄の警察が追ってくる  
しぶとく追ってくる警察にエックスはイライラしつつ  
とある建物に入った

そこは日本であって日本でない場所・・・

領事館だ

そこの中ではその国の法律が適用されるため  
日本の警察は一切手が出せない場所なのだ

中から職員や警備の者が出てくるがエックスが  
ヘルメットのバイザーを外し2〜3分話したと思うと  
何事も無く領事館の中に入っていた

「Side???」

領事館の中に入るエックスを電柱の上から見つめる仮面をつけた二  
人の男がいた

「こちらを見た？まさかな・・・書の完成もそろそろ頃合いかもし  
れないな」

そう言った直後一人は虚空に消えた  
・  
・  
・



### 第3章 39ページ 治外法権（後書き）

なぜエックスがこのような行動に出たのか？

そして、はやたと守護騎士たちはどうなるのか？

謎の仮面の男達とは？

いきなりの急展開ですが次回をお楽しみに

### 第3章 40ページ 領事館内

コンコン ガチャ

「Mr・ステイングレイ!!」

「突然押しかけて済まないね」

「何を仰います、あなたであればいつでも大歓迎ですよ!!」

現在応接室にて、この領事館の責任者である大使にエックスは歓迎された

「しかし、貴方が日本の警察に追われているとは何かありましたか？」

「いや、ちよつとね・・・」

「左様ですか・・・いやしかし、貴方にお会いできる日が来るとは夢にも思いませんでしたよ!!」

以前エックスが世界を回っている時に、内戦で苦しんでいた国で話し合いによつて解決して以来その国では無条件で要人として扱われる事になっているのだ

もちろんその情報は世界各国の大使館などにすぐさま伝えられこつしてエックスは歓迎されているのである

「数時間後」

夕食後、領事館の人達からその後の国の様子などについて懇談した夜も更けてきたため、エックスは来賓室のベットのうえであることで考え込んでいた

「やはりあいつらは、この国の人間ではなかったか・・・」

エックスは、はやてと知り合った直後から妙な視線を感じていたじつくりと観察するかのような視線は、エックスにとって不快感でしかなかった

そのため、多少強引ではあるが警察に追いかけられるというわざと目立つ行為をしたのだ。

もし、日本政府あるいはどこかの調査機関であれば警察が大勢動くような自体になればすぐに身を潜ませるのが常だ

だがしかし、この視線の主はそれでも身を潜ませることがなかった

「リンディやクロノの関係者と見て間違いないだろうな」

バイクでの高速で変則的な動きに付いて来るためには、空中から監視する必要がある、

警察のヘリが監視する中をバレずに監視するのは通常の方法では不可能だ

しかし、魔法で姿を見えなくし、飛行魔法でも使えば音もなく監視できる

リンディたち時空管理局がそのような人間を把握できないわけがないつまり、把握していながら見過ごす必要があるのだ。

カチッ

「ふう．．．」

エックスはベットから起き上がり窓を開けると煙草に火を付けた夜の冷たい風がエックスの頬をなで部屋に冷気が侵入してくる

「あいつらの目的は何なんだ？俺の監視？いや理由がない．．．可能性としてはやてたちの監視か．．．」

シグナムたちは、なのはや他の時空管理局の職員を初め多くの世界でリンカーコアを抜き取るという犯罪行為を繰り返している決定的な証拠を集めるためにも監視するのは当然の行為だ

そうになると、なぜクロノはシグナムたち居所を知らないのか？  
すでに危険なロストロギアである闇の書の持ち主が見つかったという状況で

リンカーコアの収集を放置すれば書が完成してしまっ

完成すれば甚大な被害が出ることを分かっているが．．

「目的は書の完成．．書力は所有者以外には決して使用できないが、

何らかの方法で洗脳できれば安全に力が入る．．」

窓の外に煙草の灰をぽんつと落とす

「しかし、書力は強力だ。加えて守護騎士もいる。

そう簡単に洗脳できるとは思えない．．

それに、文献では書の完成と同時に消滅した世界があった．．」

これだけの計画を管理局内で誰にもバレずに実行するためには相当の力が必要だ

もし、他の管理局員にバレたらそれこそ管理局から追われることになる

「んゝ情報がまだ少ないな、だが何らかの力が書の完成を見守っていることだけは確かだな」

窓を閉め、吸殻を燃える暖炉の中に投げ込んだエックスは  
暖炉の近くの椅子に座り冷えた体を温める

「どちらにせよ、動くとすれば書の完成前後か」

パチパチ音を立てて燃える暖炉を見つめながら夜は更けていく

「翌日」

「大使。すまないがこれを用意してもらえないか？」

渡した紙に書かれていたのは武器である

ここ日本ではそう簡単に武器が調達できないのである  
とくに銃や弾薬は難しいのである

「ええ、畏まりました。しかしこれだけの銃をここで使用するのですか？」

「無いことを祈っているがな」

「分かりました。大至急取り寄せますが、多分12月24日前後になりませんがよろしいですか？」

「頼む」

エックスは銃が嫌いだ  
あくまでスポーツや観賞用としてはいいのだが人に向かって撃つのは  
できるだけしたくない

「武器を無くすために武器を取るか．．．皮肉なもんだ」  
「ミスター．．．」

武器が到着するか？  
書が完成するか？  
エックスを監視していた者たちが動くか？  
ここからは時間との勝負である

### 第3章 40ページ 領事館内（後書き）

タイトルのページナンバーが間違っていました!!  
いまさらかとは思いますが修正しました・・・

総合評価300超え!!

お気に入り登録110を超えました!!

ここまで多くの方に読んでいただけて大変光栄です!!

おもしろかった・つまらなかった、こんな事して欲しいなど  
感想は随時受け付けておりますのでよろしく願いします!!



第3章 41ページ 大使の作戦

ギシッ  
・  
・  
・

ギシッ  
・  
・  
・

ギシッ  
・  
・  
・

エックスは領事館内のトレーニングルームにて  
トレーニングをしていた

鉄棒に足を掛け、逆さ吊りになった状態で腹筋をしている

ギシッ  
・  
・  
・  
ポタタ

ギシッ  
・  
・  
・  
ポタタ

ギシッ・・・  
ポタタ

腹筋運動に会わせて、鉄棒のしなる音と汗の落ちる音だけがする

エックスが今できること  
それは、ただひたすらに力を付けること

もう二度と守れない事がないように  
一人でも多く助けたいために・・・

コンコン

「Mr・ステイングレイ。脱出の手筈は整いました」

腹筋をやめ、鉄棒から降りたエックスはタオルで汗を拭きながら  
職員の話しを聞いていた

「ありがとう。助かったよ」

「勿体無いお言葉です。大使が是非お話があるとのこと、後で応接室までお越し下さい。」

「わかった。シャワーを浴びたらすぐに行く伝えてくれ」

「畏まりました」

（入浴後）

シャワーを浴び、さっぱりしたエックスは応接室で大使と今後の打ち合わせをしている

「武器は予定通り24日夜のクリスマスの騒ぎに乗じて港に到着します。」

また明日脱出用にお車を用意しましたのでそれでお逃げ下さい。」

「そうか、ありがとう」

「僭越ながら、我々に協力できることは本当にありませんか？」

「ここまで十分だよ」

「左様ですか・・・」

紅茶を一口飲んだエックスは驚く

「これはなかなかうまい紅茶だな」

「ありがとうございます。そちらはメイソンのアールグレイになります」

「香りがすばらしい！！あまり紅茶を嗜まないから特に新鮮だよ」

「喜んで頂ければ光栄です」

話題を変えたエックスと大使はこの後、紅茶談義に花を咲かせた

（明朝）

東の空がうつすら白み始める頃、領事館を数台の車が発車した。警察の捜査網から逃れるための罠だ

領事館からでた車の後ろを、日本車のセダンが一定間隔で付いて来る所謂覆面パトカーだ

日本の警察は個人が責任を取るということが大嫌いなため、それなりの大義名分を見つけるために備考しているのだが  
大使館職員の車を止めることは外交問題に発展しやすく非常に難しい

そうしているうちに数人の警察官が検問で職員の車を停止させた

「失礼しますが、免許証を拝見できますか？」

「その前にこの車はナンバーを見てもらえばわかるが、大使館の車だ。」

何の理由があって停車させたのか理由を伺いたい。」

「・・・はい。実は先日この辺りを暴走していたバイクがおりましてその捜査をしておりまし、ご協力願えませんか？」

「バイク？君にはこの車がバイクに見えるのかね？」

「いえ．．．あくまで捜査のタメでして．．．」

「君。今すぐ身分証を提示し給え」

「なぜでしょうか？」

「私は君がこの国の警察官とは思えないのだよ、だから身分証を提示し証明してもらいたいのだよ」

そのやりとりをしていると周りにぞろぞろと私服・制服を問わず警察が集まってきた。

他の大使館の車はすぐに免許証の提示などを行ったのにも関わらずこの車だけが協力しないとなれば、怪しいと思い集まってきたのだ

『こいつら相当暇みたいで、そろそろゴキブリみたいに集まってきます』

『ふん、民警どもが』

「あの．．．」

「ああ済まないね。本日要人を迎に行かなければならないから時間がないのだよ」

「すぐ済みますから、ご協力下さい。」

「では、ここにいる警察官全員の身分証を提示して下さい」

「なぜですか？我々は身分証の提示義務はありませんか？」

「そうかわかった．．．」

そう言った直後から職員達は非常に協力的になった

だが、警察の目的の人やものは一切見つけることができなかった

「はい、もう行っていいですよ」

「君たちは協力したものにお礼くらい言ったらどうだね？」

「ども、ありあとあつしたあ」

「ふん．．．」

そうして、職員の車は発進した

「おい！！何か手がかりが掴めたか？」

「いえ．．．何も．．．」

「ばかもん！！ならまだ領事館内に居るに決まっている、すぐに人員を送り込め」

「ッ了解いたしました！！」

「領事館内」

「ああ、うん。予定通りだな」

大使は電話を切るとにつこり笑いながらソファに座った

「予定通り、警察共は職務質問してきましたよ」  
「策士だな」

大使の机を挟んで向かいにいる人物

エックスである  
エックスはまだ、領事館内にいたのだ。  
では先程の車はどういうことなのか？

「さて、私は日本の外務省に正式に抗議してまいります」  
「しかし、こんなこととして大丈夫か？」  
「構いませんよ、日本の警察は融通がきかなくて、度々不快にさせられてましたからね」  
「ならいいんだが・・・」

大使の描いたプランをご説明しよう

- ・まず陽動で数台の車を出し、あえて職務質問される
- ・その中で一台だけはビデオ撮影を実施し、警察の捜査方法を記録する
- ・その映像を元に、日本の外務省にある事ない事でつちあげて抗議する
- ・日本政府から正式に、捜査させないようにした後で悠々とエック



スは脱出

「しかし、日本政府の対応は遅いぞ？」

「ええ、ですから遅くなれば遅くなるほど世間の印象は悪くなりま  
すから

こちらとしては好都合かと」

「あまりいじめないでやってくれ」

「畏まりました」

その後堂々と乗り付けたバイクでエックスは領事館を出たのだが、  
警察は遠巻きに観るだけで一切何もしてこなかった

後に、警察の横柄な態度は社会問題になり

警視庁のトップと今回の問題に加担した警察官は  
全員退職に追い込まれるだけでなく、政治と警察の一斉改革が始ま  
ったらしい

### 第3章 41ページ 大使の作戦（後書き）

今回の内容で勘違いされる方もいらっしゃるかと思いますので  
ここで弁解させていただきます。

私は右でも左でも、特殊な政治思想も持っていません。

ただ、日本の警察と一部の政治家の黒い奴らが嫌いなだけです。

今回リリカル分はありませんでしたが次回からまた本編に戻ります

### 第3章 42ページ リンディ

「あら、エックスさん。お久しぶりね」

「ああ、ちよつといいかい？」

「????ええ、どうぞ」

エックスは情報収集のため、リンディの元を尋ねた

「今、お茶を入れるわ」

「お構いなく」

手持ち無沙汰なエックスは部屋の中を見渡していた。

部屋はこたつの似合う、純和風の内装で

マンションの一室というより田舎のおばあちゃん家の雰囲気だった

「どうぞ」

熱い日本茶が注がれた湯のみを受け取った

リンディは、同じ湯のみを机に置きエックスのこたつを挟んで向かいに座った。

そこで、リンディは思いがけない事を始めた

まるで紅茶のように角砂糖をばちやばち湯のみに入れたかと思うとさらにミルクを注いだ。

「ずいぶん変わった飲み方をするんだな．．．」  
「あら、結構美味しいのよ？試してみるかしら？」  
「又の機会にさせてもらおう」

お互いにお茶をすすり一息入れたところで  
エックスは早速本題に入った

「お前たちが調べている闇の書についていくつか情報が欲しい」  
「民間人においそれと機密情報は教えられないわ」  
「そう思うと思って、こちら情報を持ってきたよ」

エックスは数枚ごとにファイリングされた書類をリンディに手渡した  
リンディは初め驚いたような顔をしていたがペラペラと紙を捲つて  
いる内に  
苦虫を噛み潰したような顔になった

「あなたの分析力には敵わないわね」  
「で、どうなんだ？」

「詳しいことは教えられないわ。ただ、私たちもあなた以上の事は  
知らないし

現時点できつと同じ結論に達しているはずよ」

「つまり内通者が居ると？」

「ええ．．．私に一切情報を伝えずにここまで出来る人物の見当も  
付いているわ、でも．．．」

「『証拠がない』 ったいったところかな？」  
「その通りよ」

今回エックスの渡したレポートを要約すると以下のことが書かれていた

- ・管理局の上層部が闇の書の完成を見守っていること
- ・闇の書そのものではなく、完成した闇の書が必要であること

「だが、なぜ闇の書を完成させる必要がある？」

「それは教えられないわ。それにまだ、憶測の域を出てないの」

「そうか．．．こちらも色々準備していてね、場合によってはそれなりの手段を取らせてもらうが構わないんだね？」

「．．．脅しのつもりかしら？」

キツとした顔でエックスを睨みつける

「いや。あくまで自衛手段を講じると言う話だよ」

コチ

コチ

時計の秒針の音だけが静かに流れる

「本日はもうお帰り願えないかしら？」

「・・・わかった」

そう言つて立ち上がったエックスは玄関に向つた  
後ろからはリンディが見送りに付いて来る

「邪魔したな」

「いいえ、構いません」

靴を履いて出て行こうとするエックスの後ろでリンディは一言呟いた

「・・・そう言えば地球の料理で『フォアグラの作り方』は知つて  
いるかしら？」

「???知ってるが、それがどうかしたか？」

「ただの独り言よ」

エックスはリンディの家から自宅に向かった

くエックスの自宅く

バカルディをショットグラスに注いだエックスはドカッとソファア  
座り

リンディとの会話を思い出した

「問題は完成させた後か・・・」

しばらく、考え込みながらグラスを傾けていると急に閃いた

「そうか!! 『フォアグラ』だ!!」

- ・闇の書は守護騎士たちが完成までリンカーコアを集め続ける
- ・完成した闇の書は場合によっては、その世界を破壊し別の主を探す
- ・完成前に主が死んだ場合も同様に、別の主を探す

以上のことからエックスはある答えにたどり着いた  
だがそれはとても恐ろしく残酷な答だった

#### 『フォアグラの作り方』

簡単に言えば、アヒルやダチョウなどを狭い場所に閉じ込め運動させないようにし

その間は大量の餌を強制的に与え続けることにより、  
脂肪が肝臓に貯まる脂肪肝を取り出したものをフォアグラと呼び、  
世界三大珍味友呼ばれている

狭い場所に閉じ込め、目的が果たされるまで生かさず殺さずの状態  
にするため

この製法を禁止している国が多い・・・



そう、目的が果たされるまで生かさず殺さず



破壊ができなく封印が目的の闇の書は永久に封印したい

そう、

はい  
主として

「本当にそんな事をやろうとしているのか？」

エックスはその事実にとどり着いたときに得体のしれない吐き気に襲われた

怒りとか悲しみではなく、単純に気持ち悪くなったのだ

幼い子供を大人たちの勝手な考えで永久に苦しめようとしているのだ

リンディは言っていた『私たちもあなた以上の事は知らないし現時点できっと同じ結論に達しているはずよ』と・・・

つまり全て知っていたのだ。

闇の書の現在の主は八神はやてであることに

当然といえば当然な話だ

時空管理局の技術力を以てすれば、写真から犯人を特定することなど容易い

そして、エックスがはやてと友好関係にあり調査を行っていることも知っていたはずだ

だが、知っていながら周りにあえて伝えていなかった

時空管理局の職員として被害を最小限に抑えるための自分  
同じ位の子を持つ母としての自分

その両方に板挟みになりも精一杯出したSOS信号

それが『フォアグラの作り方』だ

エックスの中で全ての答えが出た  
そして、決心を言葉にした

「絶対にみんなが笑って過ごせる結果にしてやる!!」

既に時刻は、12時を回った

本日は12月24日

今日は子供たちが世界で一番いい子になり  
世界で一番幸せな日でなければならぬ  
クリスマスの前夜だった……





### 第3章 42ページ リンディ（後書き）

管理局の目的が分かったエックスの決意と行動とは？

次回みなさんお待ちかねの『闇の書事件』の一日が始まります！！  
次回投稿までお楽しみに！！

### 第3章 43ページ Z

カランカラン

「あー！エックスさんいらっしやい」

「朝早く悪いね、あれ？今日は美由希ちゃんが店番かい？」

「今日は父さんと母さん二人で出かけているよ」

「相変わらず仲の良い夫婦だよな」

「だよー、今日もいつものでいい？」

「いや、今日はカプチーノを貰おうかな？」

「はい」

エックスはいつも以上によく味わってコーヒーを飲んだ  
いつもとは違うエックスの様子に美由希は不思議に思った

「あの・・・エックスさん・・・」

「ん？どうした？」

「いや、なんだかいつもと様子が違うなと思って」

「・・・」

「きつ氣にしないで下さい！！私の勘違いだったみたい」

ああそうか、俺は気が付かなかったんだけどいつも以上にピリピリ  
していたんだな

「いやスマン、今日ちよつと大きな仕事があるからそれで気が立ってたんだな」

「そうなんですか。あんまり無理しないで下さいね」

「ありがとうございます」

「そうだ！！今夜なのは友達呼んでクリスマスパーティーをやるんですけど、

もしよかつたら来て下さい。」

「仕事が早く終わったらな．．．つとごちそうさま」

「はい。いつてらっしゃい」

エックスは軽く手を上げて返事をした

時刻は午前9時

頼んだ武器は18時前後に到着の予定で、一日時間がある

「さゝて、準備でもすつかあゝ！！」

くとある倉庫く

ガラガラガラガラ

しばらく誰も出入していなかったため太陽の光を受けてホコリがもつもつと立ち込める

ガチン

バンッ！！

ブレーカーを入れたとたん倉庫内の水銀電灯が一斉に点灯する  
車であれば10台は楽に止められるほどの広い倉庫の奥に  
ホコリを被った毛布の塊があった

「ゴホゴホ！！??？」

ホコリで咳き込みながら毛布を一枚一枚剥いでいく  
毛布の下にはマールンカラーの一台の車があった

### S30型フェアレディZG

アメリカではDUTSUN 240ZGという名前で販売され現地では

『プアマンズポルシェ』と呼ばれていたらしい。  
ちなみにZGではなく、ただのZで青い色の湾岸を走っている  
悪魔のZは非常に有名である。

「久々に火入れるかな」

バッテリーを繋ぎオイル交換にタイヤを新品に入れ替えると  
最後にガソリンを入れキーを回した

キュルルルルル・・・

ブオン！！      ブオン！！      ブオン！！

エンジンからはけたたましいL型6気筒独特の音がする  
軽くアクセルを煽りながらエンジンのコンディションをチェック

ドロドロドロドロドロ

「油圧と水温、油温も問題ないな」

ドロドロとキャブ車独特のアイドリングをさせながら  
近くに置いた一人がけのソファーに座りタバコをふかす

この車は既に発売から10数年経過しており、  
一般的には『旧車』と呼ばれる部類に入る  
初めはカッコいいからという理由だけで買った車だったが  
スピードやメンテナンス性などを考えれば最近の国産スポーツカー  
の方が  
数段いいに決まっている

事実時間と共にあちこちガタが来ては部品を交換していたため  
新車以上の金を修理改造に掛けている

それでも、エックスはあえて手放さなかった  
人が思いを込めて作り、大切に使われたものには  
『魂』や『意志』のようなモノが宿ると言われている

時計をみると時刻は午後13時過ぎ

タバコをもみ消し、携帯灰皿にしまつとZに乗り込んだ

エンジンが高く吹け上がり

倉庫を出たエックスは、港へと向かった

ブオオン      ボオオオオオオオ・・・

街中を走っていると道行く人全てZに注目する

ある者はそのうるさい音に

ある者は懐かしい音に

ある者は昔聞いた懐かしいフォルムに

理由は様々だが振り向いた全ての人は、ロングノーズ・ショートデ  
ツキ

というその独特のフォルムに

『ほお  
』

つと息を漏らした

く鳴海近郊の某港く

「・・・許可証」

エックスは守衛に無言で一枚の紙を見せる  
それを受け取った守衛はめんどくさそうに頭を掻きながら  
台帳のページをめくりながら、お目当ての項目を探した

「C - 12」

それだけ言って許可証を突っ返してきたので  
無言で受け取ったエックスは、車を発信させC - 12倉庫を探し始  
めた

くC - 12倉庫内く

「お待ちしておりましたステイングレイ様」



そこにはここが倉庫の中とは思えないほど  
優雅に燕尾服を着こなした初老の執事がいた

「どうぞこちらへ」

執事に案内されるまま倉庫奥に止まったリンカーンに乗車した

ピピピッ

ピピピッ

ピピピッ

乗車したと同時に車内に備え付けの電話が鳴る  
受話器を取ると、変声機で声色を変えた男の声とする

「注文ノ品ナラ出来テイルヨ」

「感謝する」

「君ニヘノ借りハ返シタカラネ」

「分かっている」

受話器を置いたエックスは車を降り  
執事からトランクを受け取ると、確認のため早速中を開いた

「ヒュー？」

中には

1着の黒いロングコートとノースリーブのシャツが1枚  
ジーンズ地のような黒いズボンとこれまた黒いハイカットブーツが  
入っていた

「素晴らしい出来だ、確かに受け取った」

「感謝の極みにございます」

そう言つてエックスは執事と別れ倉庫を出た

現在、時刻は午後4時を回ったところだ  
小腹が空いたエックスは自宅に戻り腹ごしらえと着替をすることに  
した

### 第3章 43ページ Z（後書き）

着々と装備を整え来る戦闘に備えるエックス  
次回サイドヴォルケンリッターと対峙します！！

お楽しみに！！

ピピッ

ピピッ

ピピッ

ピーーーーピッ!!

クレーンで吊り下げられた大きな木箱が船から降ろされる  
2、3人の日焼けした作業員がワイヤーを外し、木箱を開け  
中からいくつかのトラックを出し倉庫近くの小屋に運ばれていく

「えーっと、これで全部かな？」

「へい、ステイングレイさん宛の荷物はこれだけになります」

「そうか、済まないな。まあ、これで一杯やってくれ」

そう言つてエックスは数枚の札を渡し

受け取つた作業員は「へへッ、どうも？」と笑いながら  
すぐに胸ポケットに仕舞つた

エックスは、人払いのされた小屋の中に入つていった  
中は畳の引かれた所謂飯場で作業着などが置かれており  
飯場の扉の鍵を締めるとトランクを開けていった

トランクの中にはいくつか銃が入つていた  
動作を確認しホルスターに銃を収めていく  
それぞれのマガジンをコートの内側に収めていく

「ん？やけに静かな」

飯場の扉に耳を付け外の様子を伺うが話し声やクレーンの音など一切何の音もしていない

トランクはそのままです少し飯場の扉を開ける

先程まで忙しそうに働いていた作業員は一人も居ない

ワイヤーに吊り下げられている荷物もあり

今まで作業が行われていたようだ

「これは一体・・・」

異常な事態に周辺を見ていると空の様子がおかしい  
さっきまで真っ暗な夜空に星が輝いていたはずなのに、一切星の瞬  
きもない

「急いだほうがよさそうだな」

Ｚに荷物を積み込むと急いで飛び乗り軽くホイルスピンさせながら飛び出していく

高速に乗りはやての家に急ぐが、ここも様子がおかしい

車が一台も居ないのだ、一般道は車どころか人っ子ひとりいない  
今夜はクリスマスイブなためこった返しているはずだ

「ますますヤバイな」

予想より早くはやての家に到着しエンジンを止める

「静かすぎる」

カシャ

エックスは胸のホルスターからベレッタ92Fを取り出しスライドを引く

玄関の横の壁に背中を預け中の様子を伺う

>>人の気配がしない・・・<<

ゆっくりと扉を開け中の様子を伺う

玄関から中を覗くが電気がついていないらしく真っ暗だ

サツと玄関の中に入り目を慣らす  
どうやら靴も無く誰もいない

腰から大型のサバイバルナイフを取り出し、刃を横にした状態で右手に持ち  
左手で銃を構えながら部屋の中を物色する

ドッ

ドッ

ドッ

ブーツのままフローリングを歩く為足音がするが  
極力音をたてないように一部屋一部屋調べていく

一階を調べ終わり二階を調べようと階段を登っている時だった・・・





ドオオオオオオオオオオオンン・・・

遠くで爆発音が聞こえた

「なっ!!」

急いで外に出ると近くのビルの屋上から炎が上がっている

「遅かったか!!」

急いでナイフと銃をしまうとZに飛び乗り  
火災現場に向かう

「まさか、本当に今日になるとはな・・・」

エックスは今日からしばらくはやての周辺を警戒するつもりで準備を進めていた  
何の因果かそのまさに当日に事件が起きたのだ

「まさか・・・病院か!!」

さっきまで炎が上がっている場所は病院の屋上だ

場合によっては他の入院患者を避難させるとなれば大騒動になる

「っち!!」

忌々しいと舌打ちしながらも急いで病院の正面駐車場に車を停める  
屋上からは戦闘中らしい

ボン

シュルルルルルルルルルルルルルルル・・・

ガキン

エックスはトランクからワイヤーガンを取り出し屋上付近の壁に向かって発射した

2、3度ロープを引っ張り、先端が壁に突き刺さり確実に刺さったことを確認する

「はぁあ!!」

ロープを掴むと全身に魔力を流しながら屈むと一気にジャンプした3階位の高さまで上がると今度はロープを一気に引きその勢いのまま屋上に飛び乗る

着地と同時に体を回転させ衝撃を吸収する体制を立て直しすぐに銃を構える

「お、おじちゃん!!」

なのはが呼ぶ声に反応し全員一斉に振り向く

「貴様やはり管理局の人間だったのか!!」  
「デメー……!!」

ヴィータがハンマー型のデバイスでエックスに殴りかかる

パン！！                      パン！！                      パン！！

ヘッド部分に3発の銃弾を浴びせ、起動をずらす  
ハンマーはエックスのすぐ横の床を砕く

「おりゃああ！！」

ヴィータはすぐにデバイスを引き抜き、横薙ぎに振るう

「ぐっ！！」

一瞬早く回避行動をとっていたお陰で威力は大分抑えられたが弾き  
飛ばされた

>>S o n i c   M o v e<<

フェイトがエックスを抱き抱え何とか屋上に留まることができた

「ハアハア、助かったよ、フェイトちゃん」

「大丈夫ですか」

「何とかね、それよりも状況を説明してくれ」

「彼女たちは、私たちが追っている闇の書と呼ばれるロストロギアの  
守護騎士達です、なんとか収集をやめさせたいのですが・・・」

「そうか、わかった」

エックスはシグナムに向き合う

一方のシグナムは剣を構えいつでも切り掛れる体制だ

「シグナム！！お前たちの事を教えてくれ、本当にはやての事が大切なんだな？」

「当たり前だ！！前にも言ったが我ら守護騎士は主の事を一番に考えている」

「なら教えてやる、闇の書が完成次第はやては封印されるぞ！！」  
「！！！！」

シグナムたちは一斉に驚いた顔した

「そんなもの覚醒した主と我々の敵ではない！！」

「バカヤロー！！覚醒してもはやてが本当に戦うと思っているのか！！」

あの子が知ったら悲しむぞ！！」

「それでも・・・」

「止まれんのだ!!」

「エックスおじさん危ない!!」

シグナムが斬りかかってくるのをフェイトはエックスを押し付け  
バルディッシュで受け止める

「フェイトちゃん!!おじちゃん!!」

「オメーの相手はこつちだ!!」

ヴィータがなのはに殴りかかる

「私たちが一番闇の書の事を知ってんだ！！このままじゃはやては闇の書に殺されちゃうんだ！！」

「だったらなんで、本当の名前を呼んであげないの！！」

「本当の・・・名前・・・」

パン！！      パン！！

いきなり空中に向ってエックスは銃を発射した  
音に一同が反応する中空間が歪み、仮面を付けた男が現れる

「テメーか？俺の事を付けていたのは？」

「ふん！！」

もう一人同じ格好をした奴がエックスを蹴り飛ばす  
モロに食らったエックスは屋上の入り口に横に激しくぶつかる

「バインド！？」

エックスの体を魔力で作られたロープが締め付ける



見ると全員バインドに捕まえられている

すぐに魔力を全身に回すがびくともしない

「ああああ!!」

「きゃああ!!」

「うっう!!」

シグナム・ヴィータ・シャマルが一斉に苦しみだす

「何なんだテメーら!!」

「ふん」

男たちの手には一冊の古い本が広げられておりそこに  
三人のリンカーコアが吸収されていく

「ておおおお!!」

「もう一匹いたな」

人間形態のザフィーラが殴りかかるがシールドによって仮面の男には届かない

「ぐ、うおおおー!!」

そればかりかザフィーラの体からもリンカーコアが抜き取られ、吸収される

「あとは主の覚醒を持って終了だな」

「おい!! お前ら管理局の人間だろ、こんなことしていいと思っ  
ているのか!?!」

「すこし、黙っている」

エックス・なのは・フェイトはバインドの状態で半透明の空間に閉  
じ込められる

「4重のバインドにクリスタルケージだ、数分は動けない」

仮面の男たちはなのはとフェイトに変身し屋上に魔法陣を展開した

「っち、お前らこれ外せるか?」

「まっっておじちゃん、少し時間が掛かるの」

「こっちもですー!!」

エックスは全身とにかく魔力を込めて引きちぎろうと藻掻く

「やめて――――！！！！」

3人にはやての悲鳴が聞こえた

「こんなものおおおお！！」

エックスは力づくでバインドとクリスタルケージを破壊する

「「「はやて（ちゃん）！！！！」」」

はやては胸を抑えながら座り込んでいる

「あああああああああああああああ……」

ドオオオオオオオオオオオン！！

一氣に黒い魔力が空間を多い尽くしてくる  
暴力的な魔力にはやてが包まれる

「はやて! はやて! —————! ! !」

エックスの叫びも届かず

魔力が晴れると銀の髪に黒い羽を付け

同じく真つ黒な服を来た女性が立っていた

「また・・・全てが終わってしまった・・・」

闇の書の覚醒である

### 第3章 44ページ 覚醒（後書き）

ついに闇の書の完成です

エックスが準備してきたものとは？  
はやての運命は？

次回投稿をお待ち下さい！！

第3章 45ページ 闇の書（前書き）

初めての3話連続アップです。



### 第3章 45ページ 闇の書

「あれが、はやて．．．いや闇の書か」

三人の前には、両手を広げた銀の髪の少女が涙を流しながら佇んでいた

「我は闇の書．．．我が力の全ては．．．」

>>Diabolic Emission<<

闇の書の頭上に黒い球体の形に魔力が収束する

「主の願いを．．そのままに」

一層黒い魔力球は巨大化する















「闇に．．．沈め．．．」

一気に巨大化した魔力に3人は飲み込まれる

「空間攻撃!？」

なのはすぐにレイジングハートでシールドを展開する

「ぐうっ!!」

しかし、Diabolic Emissionの威力を受けとめきれずジリジリと後退する

少しづつ

時間にしてホンの数十秒程度なのだが  
3人には数分に感じるほど長く感じた

「すぐにここから離れるぞ!!」

「はい!!」

一瞬威力が弱まると、3人は車に乗り込み一気にかけ出した

「フエイト!!後ろから銃を取ってくれ!!」

「はい...って銃!？」

「おじちゃんこんなの持ってきたの？」

「いいからはやく!!」

2人は後ろに大量に積まれた銃火器に若干引きつつ  
ベレッタ92Fを渡すとエックスは右腕だけを外に出し発砲した

パン パン パン

3発の銃弾は一直線に闇の書に向かって発射された

トブン・・・ トブン・・・ トブン・・・

闇の書の目の前で池に小石を落としたような音をさせ  
銃弾は消えてしまった

「バリアーかよ!?!」

『Alert!!!』

「きゃあああ!!!」

銃弾はバリアーによって防がれたのではなく

空間を転移し、エックスの運転する車のタイヤを撃ち抜いたのだ

突然タイヤがバーストしたため、コントロールを失い

そのままの勢いで商店に突っ込んで停止した

「くぅー！！痛つてえ．．．」

「エックスさん！！大丈夫ですか？」

「おじちゃん怪我してる！！」

なのはとフェイトは魔法でできたバリアジャケットを着ていたため無傷だったのだが、生身のエックスは頭から血を流していた

「大丈夫だ。問題ない。」

ふらふらとした足取りでグシャグシャの車から這い出たエックスは先に脱出した2人に支えられるようにして、車から離れた

空間結界の中のため、民間人は一人も居なかったのは不幸中の幸いだった

だがこのまま闇の書を放置することはできない。

「私たちが空に上がります！！エックスさんは逃げてください！！」

「しかし．．．」

「だっておじちゃん怪我してるでしょ！？私とフェイトちゃんがど

うにかするよ」

「あつ！！待て！！」

エックスの制止を振り切り2人は飛び立った

2人を追いかけようにも車は動きそうにないため

トランクルームからスナイパーライフルを取り出し

這い蹲るようにして店の外に出た

スナイパーライフルのスコープで確認すると

空中ではフェイトが高速で闇の書に斬りかかり

なのはがその隙に砲撃を打ち込む戦法をとっていた

「はあ．．．はあ．．．ちくしょう！！」

罵声と共にライフルを地面に叩きつけた

事故の瞬間頭を打つたらしく、朦朧とする意識の中では

精密射撃はともじやないが不可能だ

仮に打ったとしても混戦状態では味方であるのはとフェイトに当たってしまう

「ちくしょう・・・またなのか・・・」

壁を殴りながら忌々しいとばかりに心情を吐露した

「また俺は何も出来ないのかよ・・・」

辺りの魔力が闇の書に吸い集められる感覚がした  
そして遠くからでも分かるほど巨大なピンク色の魔力球に集約されていく

「あれはなのはの砲撃？」

「おじちゃん捕まって!!」

「おいどういことだ!!あれはなのはの魔法だろ!？」

遅れたやってきたフェイトが状況を説明する

「以前なのはのリンカーコアが吸収されたときにコピーされたんだ  
と思います」

「コピー・・・だど？」

『Sir, There are noncombatants  
on the left three hundred yards

(左前方300ヤード、一般市民が居ます)』



「『え?』」

バルディッシュからの警告によればこの先に一般市民が居るというのだ

もし、あれだけの砲撃に巻き込まれたらただでは済まない

急いで3人が探していると、前方に人影が見えた

「あの．．．すみません!!危ないですからそこを動かないでください!!」

「今の声って、なのは?」

「アリサ!!すずか!!」

「おじ様、それにフェイトまで．．．これってどういう事なの?」

「説明は後だ!!なのは、フェイト!!来るぞ!!」

>>St ar l i g h t    B r e a k e r<<

闇の書によって解き放たれた魔力砲撃が一直線に襲いかかる

なのはとフェイトは3人の前に立ちプロテクションシールドを形成する

エックスはアリサとすずかを抱きしめるように庇う









コンコンコンコンコンコン

「きゃあああ!」

悲鳴をあげるアリサとすずかをよりきつく抱きしめる

『なのはちゃん!! フェイトちゃん!! 大丈夫!?』

「エイミーさん、何とか・・・大丈夫ではあるんだけど・・・」

「結界内にアリサとすずか、それにエックスさんが取り残されているだ」

『分かった!! 余波が収まり次第3人を安全な場所に転送するからもう少し頑張つて』

ゴオオオオオオオオオオ  
・  
・  
・

「今だ！！転送！！」

エイミーは砲撃の余波が収まった瞬間3人を結界の外に転送させた

### 第3章 46ページ 戦いゝなのは・フェイトSideゝ

ゝSideなのは・フェイトゝ

ゴオオオオオオオオオオ．．．

魔力砲撃の余波がだんだんと収まってきた  
二人の複合プロテクションシールドだったため  
辛うじて防ぎきることができたのだ。

『なのはちゃん、フェイトちゃん。3人の避難が完了したよ』  
「エイミーさん、ありがとう。」  
「エイミー、他に一般市民がいらないか結界内をもう一度調べて」  
『わかったよフェイトちゃん。』

なのはとフェイトは闇の書を睨む  
一般市民。それも自分の友達目がけてなんの躊躇もなく攻撃してきたのだ



今までの戦闘でも流れ弾が当たってしまう可能性だってあったのだ

『二人とも一般市民はもういないよ。思いつ切りやって大丈夫だよ。』

『

「「ありがとうエイミィ（さん）」」

幸いもうここには一般市民が居ないという事実にはっと胸を撫で下ろす2人

だが状況が好転したわけではないこのままではジリ貧だ、せめて何か起死回生の手立てがないかを考える

「なのは。私に作戦があるんだけど」

「作戦って？」

「うん。私が今から何とか闇の書を抑えつけるから

なのはは全力の『スターライトブレーカー』で攻撃して」

「それは危なすぎるよー!!」

直後触手のようなものが地面を突き破り二人の体を締め付ける

「ッぐ!!...うん」

「う、動けない!？」

「こんなもの...は!！」

フェイトはバルディッシュの刃で自身となのはの触手を切ると  
闇の書目がけて飛び立った

「フェイトちゃん!！」

「なのはお願い!！」

『Master!!』

「うん。そうだね。レンジングハート!!スターライトブレイカー  
用意」

『All light , master . Setup >>Starlight Breaker<<!!』

（了解ですマスター。スターライトブレイカー発射準備!!!）『

空間に漂うホンの少しの魔力となのは自身の魔力を  
レンジングハートはかき集め球体に固定していく



『I c a n b e s h o t >> S t a r l i g h t B r e  
a k e r<<!!』

（スターライトブレイカー発射できます!!）『

「フェイトちゃん!!いくよ」

「うん。撃つてなのは!!」

そのやり取りを遮切るように闇の書がしゃべりだした

「お前も・・・我が内で眠るといい」

「あ・・・ああ・・・」

「フェイトちゃん!!」

フェイトの体が光る粒子になりながら闇の書に吸収された

「エイミーさん!!」

『待つて!!...えっと、大丈夫!!フェイトちゃんのバイタル確認。』

大丈夫無事だよ。ただ、闇の書の内部空間に閉じ込められただけよ』

「そんな...」

このまま、スターライトブレーカーを発射すれば内部空間に閉じ込められた

フェイトが危険になるとの判断から、発射をキャンセルした

直後なのはのいる空間が震えだす

「今度は何!？」





















空間がグンニャリ歪みその中心から強い真つ白な光が射している場所を発見した

「あそこって、まさか・・・」

### 第3章 47ページ 戦い〜エイミィSide〜

Sideエイミィ

「今だ！！転送！！」

エイミィは砲撃の余波が収まった瞬間エックス・アリサ・フェイトを結界の外に転送させた

「なのはちゃん、フェイトちゃん。3人の避難が完了したよ」

『エイミーさん、ありがとう。』

『エイミィ、他に一般市民がいないか結界内をもう一度調べて』

「わかったよフェイトちゃん。」

エイミィは、コンソールを叩き逃げ遅れた一般市民が居ないかを調べた

「二人とも一般市民はもういないよ。思いつ切りやって大丈夫だよ。」

『『ありがとうエイミィ（さん）』』

一般人が無事全員避難できたことに胸を撫で下ろす



目先の問題が解決しただけであって、闇の書の問題は継続中だ

「後はなのはちゃんと、フェイトちゃんに任せるしか無いか・・・」

クロノから通信が入る

『エイミィ！！状況は？』

「クロノ君！？今一般市民が全員避難完了したところだよ。」

『分かった。闇の書は？』

「そっちは、なのはちゃんとフェイトちゃんが何とか押さえてくれているけど

かなり不利な状況だよ」

『僕もすぐに現場に向かう何かあったらすぐに知らせてくれ！！』

「了解！！」

通信を切ると後ろに座るリンディに報告した

「艦長！！無事一般市民は全員避難完了しました！！」

「ありがとうエイミィ。」

報告を終えると今度は怒ったような顔をし、リンディに食ってかかった

「艦長、まだ上陸の許可は下りないんですか!？」

「ええ．．．何度も問い合わせているんだけど『現状維持』のままなのよ」

「しかし、このままじゃなのはちゃんとフェイトちゃんがやられてしまいますよ!！」

「分かっているわ．．．」

リンディはそういうと目を伏せた

エイミイは長く一緒にいたから決してリンディが

手を抜いているとは思っていなかった

だがしかし、幼い子供たちに世界の運命を全て任せるといふ身勝手さに

やり場のない怒りを感じていた。

そんなやりとりをしている艦内画面に衝撃的な光景が飛び込んできた

「フェイトちゃんが・・・闇の書に吸収された？」

直後なのはからの通信で我に戻る

『エイミーさん!!』

「待つて!!!・・・えっと、大丈夫!!フェイトちゃんのバイタル確認。」

大丈夫無事だよ。ただ、闇の書の内部空間に閉じ込められただけよ」



ビー　　ビー　　ビー

「第1種緊急事態警報!？」

画面には最大級の危険自体を知らせるアラートが表示される  
すぐにコンソールを叩き、状況を分析する

「エイミィ!! 一体どうしたの!？」

「闇の書の暴走が開始した模様です。

それに・・・これは・・・次元侵食です!!」

「この状況で次元侵食はマズイわ!! 次元侵食の発生地点はどこなの!？」

### 次元侵食

ある次元が別の次元によって侵食される現象のことで  
侵食によって次元に差が生じ、

規模によっては爆発的に広がり二つの次元ごと消滅してしまうのだ

さらに今回は、闇の書の暴走も怒っているため非常に危険な状況なのだ

「発生地点は・・・」

「どうしたのエイミィ！！早く報告を！！」

「発生地点は・・・」

「発生地点は、エックスさんたちの目の前です」

### 第3章 47ページ 戦い〜エイミィSide〜（後書き）

更新が遅れてしまつて申し訳ありません。

上手く原作の緊迫感を表現しようと

文を何度も書きなおしていたせいで時間が掛かってしまいました。

何度も行っていますが次回こそは早く書きます！！（笑）



第3章 48ページ 邂逅

ゴオオオオオオオオオオ  
・  
・  
・

「今だ！！転送！！」

エイミーは砲撃の余波が収まった瞬間3人を結界の外に転送させた

「ぐっ……2人とも大丈夫か？」

「ええなんとか……すずかは？」

「私も大丈夫よ」

「良かった。2人はこのまま遠くに避難してくれ」

「おじ様はどうなさるおつもりですか!？」

「俺は……」

このままここに居れば安全だ

また戻ったところで空を飛べないエックスは足手まといにしかならない

でも  
・  
・  
・

でも俺は助けたい！！  
みんなを助けたい  
みんなが笑って暮らせるようにしたい！！

「それでも、俺は戦う！！」

エックスが心からの決意を込めて叫んだ  
そのとき、突如目の前に閃光が現れた

「きゃあああ！！」「」  
「つく！！・・・」

電子音ともとれるようなその声が聞こえたと同時に光は収まり  
今度は目の前の空間がぐんにやりと歪んでいく  
まるで、絵の具をぐちゃぐちゃにかき混ぜたようだ

『マスターからの>命令<を開始します』

どこか懐かしい声が聞こえた

今度は、さっきまでの歪みがビデオの逆再生をしたみたいに元の風景に戻って行く

『お久しぶりです。マスター』

かつてエックスとスカリエッティによって作られたデバイス自分があの世界で消滅した時にすべてを任せたデバイス

「Proxy!!」

『はい。あなたのデバイスのProxyです』

そうエックスのデバイス、Proxyだ。

「ちょっとおじ様!!このしゃべる宝石みたいなのは一体なんなんです!?!」

「ああ、コイツはかつて俺が使っていたデバイスだ」

「あの・・・デバイスってなにかしら?」

「そうだな・・・なのはたちのことも全部ひっくるめて後で説明す

る。

今はまず、なのはたちを助けられないとな」

エックスは、Proxyを首に掛け、目を閉じて、Proxyと対話をする

対話と言っても言葉ではない、>>記憶<<で対話をするのだ

そのそも、言葉とは自分の記憶を相手に伝えることが目的である文字や絵のしても、全ては相手に自分の記憶を伝えるためにある

エックスが再び目を開く

心配そうにアリサとすずかはエックスの顔を覗き込む

エックスの顔は、嬉しとか悲しいとか懐かしいっていう

全ての感情をゴチャマゼにしたような、どこか人を不安にさせる顔をしていた

「ありがとう。Proxy」

『ありがとうございます。マスター』

最初にエックスとProxyからでた言葉は>>感謝<<だった  
二人が別れてから長い年月が経ち、  
多くの時間が流れその時間を共有した二人だからこそ言える言葉であつた

「バリアジャケットを」

まるで自分の本棚からお気に入りの本を取り出すかのように  
当然と白銀の魔方陣を展開し、

礼服のように真っ黒なロングコートを基調とした  
バリアジャケットに瞬時に着替える

胸にはProxyがまるでそこにあるかが当然と収まり、点滅しながら告げる

『バリアジャケット展開完了。武器は如何しますか？』

「ハンドガンだ」

『了解しました。ハンドガンタイプデバイスを展開します。』

これをハンドガンと呼んでいいのだろうか？

銀色のごついリボルバーがエックスの右手に握られる

「アリサ。すずか。できるだけここから離れるんだ」

「え？・・・ちよつと！！」

『飛行補助魔法プログラム開始します』

ふわりと地面から浮き上がったエックスは二人の返答を待たずに真っ白な魔力光をあげながら、弾丸の様に飛び出していった。

「行っちゃった．．．」

「そうね．．．ねえアリサちゃん．．．」

「分かってるわ。悔しいけど、私たちがここにいても足でまといになるだけだわ、でもね．．．」

「でも？」

「みんなを信じて待つくらいは出来るわ！..」

「うん！！そうだね！！..」

### 第3章 48ページ 邂逅（後書き）

くくザックスさん。ハルさん。naintaleさん。

貴重なご意見・ご感想をいただきありがとうございます！！

読み返してみると仰る通り読みにくい投稿でした。

今後は改善を実施し、

ぜひ読みやすく面白い作品を投稿したいと思いますので

お気づきの点などありましたらなんでも仰って下さい！！

本来であれば感想に直接返信するものだと思っていますが

私自身の戒めのためにもこの場で私の考えを述べさせていただきます  
ました。

どうぞ、他の読者のみなさんもおんなにご意見・ご感想でも構いません  
お気付きになったことなどをぜひ教えて下さい！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0112m/>

---

リリカルなのは 最弱でヘタレなオリ主

2010年12月22日20時03分発行